

---

# 『DIABOLOS』

神威

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『DIABOLOS』

### 【Nコード】

N6404A

### 【作者名】

神威

### 【あらすじ】

前世・輪廻・転生。真実味にかける単語達。時折、現れる曖昧に包まれたビジョン。不意に襲われる言葉に出来ない不安。『思い出す』事さえ忘れてしまった記憶。現世と前世。現在と過去。そして、未来。それらが交じり合う時…神のチェス盤の上、壮絶な戦いが幕を開ける。戦いの果てに在るモノ…それは戦いの駒となった『普通』とは全く違う日常を送る者達の想像を遥かに越えるモノだった…

## Cross - Examine

もし、生まれかわれるとしたら…

あなたはどんな自分になりたいですか？

もし、今のあなたの生きる道が予め『誰か』に作られたモノだったとしたら…

あなたはどうしますか？

もし、あなたの『最も愛する人』が『最も憎むべき人』だったとしたら…

あなたは、それでもその人を愛し続けますか？

それとも憎みますか？

いや…憎む事が出来ますか？

## 語り部

この世界に生まれゆく命、そして死にゆく命…

それは途切れる事無く繋がるメビウスの輪リングと同じ。

前世の記憶がなくとも…魂は新たな躰へと受け継がれ、新たな刻を紡いでいく。

そうして、地球ほしは『輪廻』という名の流れを作り上げる。

『輪廻』の中に存在する、人々の記憶の産物として生まれた『歴史』という名の物語。

例えば、その『歴史』の中で語り継がれる事のない物語があったとしても…

そこに生きた者達の魂もまた確かに存在し、確実に受け継がれていく。

現代いまという刻の中に…

そして…

止まっていた運命の歯車が再び廻り始め、新たな物語の始まりの鐘が鳴る。

我ら、語り部は干渉を許されぬ者。

ただ静かに見守るしかないのだろう…

ならば、この眼に焼き付けよう。

形は違えとて『唯一』の大切なモノを守る為。

己の全てをかけ戦う者達の生き様を…

その流れた血と涙の軌跡を…

紅い満月が漆黒の闇を照らしている。

多くの生命が安らかな眠りに漂う夜。

『ソレ』は永き眠りの淵から目を覚ます。

静かな狂気を宿し、静かな夜の闇を浮遊する。

解き放たれた事への歓喜を抱き…

愛する『唯一』の者の元へ。

決して消せぬ愛の証の『烙印』を刻む為に…

紅い満月の光を全身に浴びながら『ソレ』は浮遊する。

語り部は静かに見守る。

これから始まる『悲劇』に悲しみと憂いの表情を浮かべながら…

## O r y m p o s 　　〽オリンポス〽

『此処<sup>こゝ</sup>』とは異なる次元の世界。

〽オリンポス〽

その世界の遙か遠き古<sup>いにしえ</sup>。

豊かな緑の大地。

透き通る水の流れ。

果てしなく広がる青の空。

見る物や触れる物。

それらは様々な色や音に彩られ、美しい旋律を奏でる。

其処に住む人々は当たり前前に自然を壊す事無く共存している。

この世界に在る全てのモノは神が与え、オリンポスの王が守って  
くれている『大切な贈り物』なのだと。

もちろん、争いなどない。

誰かと。何かと。戦う。

その概念自体が存在しない。

皆が家族であり、友人であり、愛する人である。

人々の顔には笑みが溢れ、穏やかでゆつくりとした刻<sup>とき</sup>を刻んでいく。

『至高の楽園』

まさにその言葉に相応しい、誰もが一度は憧れるであろう世界。

其処に住む人々はその楽園が永遠に続くと思ひて疑わなかった。  
いや…

『どんなに素晴らしい世界も、いつかは壊れ滅んでいく』

それ自体を考える事さえなく日々を生きていた。

『光』の裏側に必ず在る『影』が少しずつ、でも確実に侵蝕し始  
めている事に気付かずに…

オリンポスの中心部にある空中に浮かぶ白き光を放つ宮殿。  
宮殿の中央にある王の間の玉座に一人の女性が座っている。

オリンポスの女王、ガイア。

長い金の髪。金の瞳。

白く透き通った肌と同じ白く長い神衣を纏まとっている。華麗な細工を  
施し、中央には碧く輝く宝石があしらわれる白金の首飾りを着けて  
いる。

それは王の証である首飾り。

首飾りの宝石を指先でなぞりながら、美しい顔には暗く憂いの表情  
を浮かべている。

ガイアの前には片膝を付いたまま控える二人の人物。

一人は白銀の髪に碧い瞳の男。

オリンポス唯一の軍を率いる將軍、ソリドール。

もう一人は黒の髪。薄紫の瞳と額に紅きチャクラを持つ女。オリン  
ポス史上最高と謳われる魔道師、レア。

二人とも白い革の軍服に似た上下に長いマントを羽織っている。

長い髪は彫刻を施した揃いの髪飾りで後ろに束ねている。

俯く顔にはガイアと同じ様に憂いを浮かべている。

「やはり、避ける事は出来ないのですね…?」

ガイアが静かに口を開く。

レアは顔を上げると真つすぐにガイアを見る。

「彼らは日毎に力を増しています。オリンポスの結界を破り侵入し  
てくるのは時間の問題です」

ガイアの口から溜め息が洩れる。

「私達に残された時間は僅かだという事ですね?」



「彼らには話し合いや譲り合いというモノ自体が存在しません。もはや戦いは避けられぬかと」

「ソリドール。その場合、軍は応戦するだけの力を持っていますか？」

ソリドールもまた真つすぐにガイアを見る。

「我々は秩序を守るという名目で作られた形だけの軍。それでも軍に所属する者達はオリンポスでは強き者達ばかり。彼らの軍に対抗出来る力は保有しています」

ガイアは憂いの表情を濃くして呟く。

「しかし…彼らに勝てる程の力はない…」

王の間に重苦しい沈黙が流れる。

「我らは争いを好みません。だからこそ戦いを経験した事がない。戦いだけが生きる道としてきた彼らに私達は勝てる可能性がない…」  
ガイアの言葉にソリドールが立ち上がる。

「ガイア様、それでも私達は負ける訳にはいかないのです。諦める訳にはいかないのです。このオリンポスを守る為にも」  
ソリドールの強い口調にレアも立ち上がる。

「勝てぬかもしれない。だからと言って、初めから諦める事も逃げる事も出来ません。だからこそ我らは、己の出来る限りの力を尽くします」

二人の決意に満ちた言葉を受け止めガイアは静かに頷く。

「私が初めから弱気では民が不安に襲われる事になる。戦う事がもはや避けられぬ運命なら受け入れましょう。負ける為ではなく、勝つ為に…」

二人は頷く。

「では、直ちに準備に取り掛かって下さい。しかし、まだ民には悟られぬ様に。不安は乱れを呼び込みます。良いですね？」

ガイアは控えたままの他の側近達に命じる。  
慌ただしく王の間から下がっていく側近達。  
そして二人に向き直り優しい笑みを称える。

「貴方方も今は十分に休養を取り、来たるべく戦いに備えてください」

「有り難きお言葉。では失礼します」

二人は深く礼をし、王の間を後にする。

一人残されたガイアは外に広がる庭園に視線を移す。

「全ては私が犯した過ちの結果…そのせいでこれから多くの血が流れる…罪を背負うべきはこの私一人だというのに…」

深い悲しみを称えた瞳はこれから起こる戦いを見つめていた…

## Prologue 1

2006 males

僕は唄う。

貴方への愛を込めて…

僕は、唄う。

狂おしい程の、貴方への愛を込めて。

手を伸ばせば届く場所に居る筈なのに…

どんなに手を伸ばそうとも届かない貴方へ…

ありつただけの想いを託して。

今日も僕は…声にならない貴方への愛を唄う。

ただ、貴方の為だけに…

午前2:00

防音設備が完璧に整えられたプライベートルーム。

中央に置かれた白いグランドピアノに向かい、翔は鍵盤を無心に弾いていた。

流れるメロディーはどこか儂気<sup>はかな</sup>で寂しいバラード。

翔自身の作曲で、あえて歌詞は付けられていない。

この曲が好きだと言ってくれた『あの人』が歌詞は必要ないと言ったせいである。

『あの人』の為だけに創られた曲。

だから翔はその意向のままに歌詞を付けずにいた。

どちらにせよ、歌詞を付ければ内容は一つの想い一色になってしまう。

そうなれば『あの人』はこの曲を好きだとは二度と言ってくれないだろう。

それが分かっているからこそ、メロディーだけのままとっている。

翔はふと鍵盤から顔を上げる。

ピアノに寄り添い、翔をじっと見つめる女性。

白い肌に長い黒髪。

女性は優しい笑みを浮かべている。

貴方は僕がピアノを弾く時、いつも傍にたたずみ優しく微笑んでいる。

貴方はゆっくりと手を差し出す。

僕は鍵盤に置いた手を貴方に向かって伸ばす。

だが、僕の指は虚しく宙をかすめる。

いつもと同じ。

いつもと同じ『幻』

現実の貴方は決して僕に優しく微笑んではくれない。

手を差し伸べてはくれない。

痛いほど理解している筈なのに…

僕は眠れない。

現実から眼を背けてしまいたい。

だから、ずっと眠っていたい。

だけど…幻よりも現実に微笑む貴方を見たい。

矛盾・絶望・希望・ジレンマ・愛情・憎悪。

入り交じる様々な想いと葛藤しながら。

僕は結局、今夜もピアノに向かってる。

眠れない永い夜が明けるのを待っている。

厚いガラスの窓越しには紅い満月が輝いていた…

## Prologue 2

2006 female Y

舞い上がる砂埃。

高らかに鳴り響く金属音。

雨の様に降り注ぐ無数の弓矢。

四方から聞こえる怒号。泣き声。祈りの言葉。

『私』は少し小高い丘から眼下に広がる戦いを見つめていた。

人の姿をしている者。

そして、異形の者。

両者が互いの命を奪い合っている。

だが…どう見ても異形の者達の方が優位にある。

異形の者達は皆、全身を覆う黒のローブを纏っている。

顔には無表情の白の仮面。

振り下ろされる剣や斧。

その餌食となり、ただの肉塊に変わり果てた人の姿をした者達。

【ここは地獄…？】

『私』は目前の惨劇に目を逸らす。

すると、逸らした視線の先にまだ幼さの残る少年の姿が写った。

【ここに居ては危ない！】

『私』は少年の方へ駆け寄る。

すぐ前にいる少年を抱き抱えようと手を伸ばす。

しかし、伸ばした手は虚しく宙を切る。

【なぜ？】

もう一度、手を伸ばす。

結果は…同じ。

少年は泣いている。

祈りの言葉を繰り返しながら。

眼下の戦いを泣きながら見つめている。

まるで『私』の姿など全く見えてはいないかの様に。【私が見えないの？】

尋ねてみるが返事はない。

姿が見えないだけではなく、声も聞こえていない。

【…！ダメ…！】

突然、少年が戦場に向かって走り出していく。

咄嗟に後を追う。

止めようと何度も手を伸ばすが捕まえられる。

【ダメ…！戻って…！】

叫んでも止まらない。

少年は落ちていた剣を掴むと、背を向けている敵に斬り掛かっていく。

【………！！】

気配に気付き、白の仮面が振り向く。

向かい合い一瞬の恐怖に身動き出来なくなった少年を異形の者が見下ろす。

仮面越しだが、それでも分かる。

明確な『殺意』

他者を殺す事への『快感』

酔い痴れる『甘美』

迷わず振り下ろされた剣は少年の左肩を切り裂いていく。

溢れ出す血液。

【やめて！！！】

『私』の声を無視して二撃目が振り下ろされる。  
碎ける骨の音。

異形の者の剣が少年の頭蓋を捕らえた。  
無惨にも原型を留めていられなくなった躰が乾いた地面に崩れ落ちる。

足元に広がっていく濃い紅の波紋。

裸足の足に触れる、生暖かい感触。

満足そうな笑いを浮かべ見下ろす異形の者。

【許さない！】

不意に『私』の中に込み上げてくる憤怒。憎悪。

少年の手を離れた剣を両手で握り締める。

【許さない！！！！】

両手に力を込め、剣を振り下ろす。

しかし、見事に剣で受けとめられてしまう。

それでも『私』は負けじと剣を振り回し斬り掛かる。

飛び散る火花。

ぶつかる度に鈍い衝撃が腕から全身へと伝わっていく。

【なぜだ！？まだ子供だったのに！なぜ…！】

「なぜ、殺したのか？」異形の者が初めて口を開く。



【……！！！】

「私の声が聞こえるのか？」

『私』の代わりに『私』の疑問を声にする。

あまりの驚愕に躰の動きを奪われる。

「私には見えている、聞こえている。お前の姿、声。そして…」

少年の死を前に冷静さを失った『私』の思考が一斉に回り始める。

「触れる事も出来る…」

立ち尽くす『私』の頬に触れる冷たい掌の感触。

【ど…う…し…て…？】

混乱。

「なぜなら…」

異形の者がゆつくりと仮面を外す。

まるでスロー再生の様に。

【……！！！】

外された仮面の下に現れた顔…

「私はお前だからだ…」

口元には残虐で歪んだ笑み。濁った暗い瞳。

それは紛れもなく『私』の顔だった…

叫びに近い声を発しながらベッドから飛び起きる。

全身を伝う冷たい汗。

激痛に上がらない頭を手で支える。

ベッド脇のサイドテーブルにある時計に目をやる。時刻は午前3：

00

「またか…」

重い軀を必死に起こし、室内にある小型の冷蔵庫に向かう。

ミネラルウォーターを取り出すと一気に流し込む。

喉を通る水の冷たさに少しづつ軀と頭が冴えていく。

昔から繰り返し見る『悪夢』

戦争の夢だとは分かるが、そこにある真意は分からない。

ただただ気味の悪い『悪夢』

お陰で私は常に寝不足の状態だ。

夢なんか見ずにただ眠りたい…

知人の医者に睡眠薬を処方してもらい服用していた時期もあったが、効果は全く得られず薬に頼るのも諦めてしまった。

「逃げられない夢ってやつか…」

不意に出た独り言に苦笑しながら閉じられたカーテンを開ける。

窓の外には全てを飲み込んでいく様な漆黒の闇。

じっと見つめていると、あの白の仮面が現れそんな感覚になる。

再び乱暴にカーテンを閉め私はシャワーを浴びる為、寝室を後にした。

静寂に包まれる寝室。

微かに開いているカーテンの隙間から、紅い満月が輝いていた…

## Prologue

x x m a l e ? ?

「もうすぐだ…もうすぐ…」

静寂。

真つ暗な世界の一角に切り取られた空間。

教会にある様な背の高いステンドグラスの塀で取り囲まれている。

出入りできる扉はどこにも見当たらない。

塀の中は薄暗く、蝋燭の炎が揺らめいている。

中央には大きな金属の器が設置され、中にはいっぱいの水が張られている。

まるで水鏡のように…

その隣には椅子。いかにも中世ヨーロッパの貴族が好んだ様な装飾が施され、座り心地も良さそうであろう椅子。

一人の男がその椅子に座り肘掛にもたれながら、水面を見つめている。

「早く…早く…」

眩きながら長い足を組み直す。

「…待ち遠しいよ…」

蠟燭の灯りに照らされた横顔は優しく微笑んでいる。

「君はどの私を覚えているんだろうね…」

優しい微笑が、意味深な笑みに変わる。

「それとも…」

表情が一瞬の内に悲しみに彩られる。

「やはり…すべてを忘れている…？」

落ち着いた低い男の声が静かな空間に響く。

「忘れたフリをしているだけ…」

水鏡の水面に触れる。

広がる波紋。

突き刺すような痛みを伴う冷たさ。

それでも男はその痛みさえ愛しそくに水面を揺らす。

「今度こそ…失敗はしない…」

邪気を帯びる声。表情。

「必ず…手に入れる…」

空間内に発生した一陣の風に蝋燭の炎が激しく揺れる。

「お前の未来…お前のすべて…この手に…必ず…」

風は力を増し、ステンドグラスを震わせる。

男は腕を組み目を閉じる。

再び空間全体が静寂に包まれる。

まだ微かに揺れる水面には紅い満月が輝いていた…

## Chapter 1 (前書き)

ここ何日かバタバタ忙しく、執筆STOPしちゃいました。・  
・・) 読んでくださった方々、ゴメンなさいm(――) m出来る  
限り、間を空けずに書いていきたいと思ってますが…STOPした  
時はご容赦下さいませ(；´・(これから未熟者ですが、よろ  
しく願います、(^^)(ノ

## Chapter 1

海を見下ろす高台にある公園。

昼は間近にある鮮やかな赤に彩られた大橋が見渡せる。

緑の葉を茂らせた木々に囲まれ、多く点在する花壇には季節毎に色々な植物が植えられ花を咲かせる。

公園の中央にはベージュの石畳のスペースがあり、石で作られた数々のオブジェが展示されている。

そのオブジェはどれも現代的だが、何処かレトロな懐かしさを覚える。

旅行雑誌等に掲載され駐車場も完備されているので、わりと多くの人が訪れる場所となっている。

夜には対岸の街に灯る無数のイルミネーションが美しく、若者達のデートスポットとなる。

平日の夜明け直後、早朝。

公園の隅に海に向かって設置されたベンチに二人の男女が座っている。

時間帯のせい、公園に他の人影は見当たらない。

空には今にも雨が降り出しそうな灰色の重い雲がいつぱいに広がっている。

周囲には梅雨時期の独特な湿った空気が充満し不快感をもたらす。

顔にかかる薄茶の髪をかき上げ、男性 翔しょうは隣に座る女性に声をかける。

「今年の夏は去年より暑くなりそうですね」

「そうだな」

素っ気ない返答に翔は苦笑する。

女性 神威かむいは顔を上げ、梅雨の空をじっと見つめている。

「あまり暑くなると他の者達が海に行きたいと騒ぐでしょうね」

翔は黙ったままの神威と同じ様に空を見上げる。

「神威様は暑さに弱いですからね」

「暑いのは嫌いだが…春や冬よりはマシだ…」

神威が溜め息混じりに呟く。

その言葉に翔は俯うつむいてしまう。

流れる重たい沈黙…

翔の横顔をちらりと見ると視線を空に戻す。

「雨、降り出しそうだな…そろそろ戻ろう」

ゆっくりと神威が立ち上がる。

「そうですね…」

翔もつられて立ち上がる。

「雨でずぶ濡れるのは嫌だからな」

長い黒髪と水色のロングスカートを揺らし、神威は駐車場へと歩いていく。

翔は立ち尽くしたまま、その後ろ姿を見つめている。

「翔、お前が責任を感じる必要はない。春や冬が嫌いなのは私の勝手なんだからな」

振り返った神威が笑いかける。

「そんな暗い顔をするな。ただでさえ天気が悪いんだ。憂鬱さが増すだろう？」

「……」

黙り込んだ翔に今度は神威が苦笑する。

「ずっとそこに立っているつもりか？」

「いいえ…」

「なら、さっさと行くぞ」

神威は再び駐車場に向かって歩き出す。

翔が後を追う。



「神威様：申し訳ありません…ご心配を…」

翔の言葉を神威が遮る。

「他人事でも深く考え込んでしまうのはお前の悪い癖だ。そんな風だと何時か禿げるぞ」

悪戯な笑みを浮かべる。

「その時は潔くスキンヘッドにしますよ」

翔が少し不貞腐れたように返す。

「お前のスキンヘッドか…皆が腰を抜かすだろうな。まあ、見てみたい気もするな」

「きつと貴方は三日以上は大笑いし続けるんでしょうね」

皮肉の言い合いとは裏腹な穏やかに重なる視線。互いに笑い合う。

「とうとう降り出したな」

ぽつりと落ち始めた雨に神威が空を仰ぐ。

歩を早める。

ふと翔が座っていたベンチを振り返る。

向こうに広がる海。

曇った空を映した灰色の水面は緩やかな波に揺れている。

【あの下には『獲物』を求め蠢く影が存在する様な気がする…】

一瞬そんな感覚に襲われたが、すぐに神威の後を追いつき出す。

二人が去った後の公園は静寂に包まれる。

しばらくしてベンチを黒い影が覆う。

影は二人の去った方向を凝視している。

強く激しい『悪意』を漲らせて…

突然に現れた『悪意』に翔が見つめた海の水面が激しく揺れた…

## Chapter 2 (前書き)

『ウルトラ・ヴァイオレット』という映画を見してきました。女性が主人公のアクションものなのですが…その女性を演じるミラ・ジューボヴィッチ？がとっても強くて格好良くて綺麗でした（＾Ｏ＾）生まれ変わったら、あんな女性になりたいなって思っんですが…絶対無理！だなど痛感する今日この頃です…（ - - ; ）

## Chapter 2

郊外にある高級住宅街。

その高台にある一際目立つ大邸宅に向かい車はなだらかな坂を上っていく。

窓の外に続く濃い緑の木々達を雨が濡らしている。

人間にとっては憂鬱な雨の季節も、木々達にとってはすぐ先にある暑い夏に備える為の恵みの季節なのだろうか？

濡れる木々達は悦んでいる様に見える。

神威は煙草を燻<sup>くゆ</sup>らしながら、ぼんやりと外を眺めている。

吐き出された紫煙が車内に漂う。

「本格的に降り出したな」

視線を外に向けたまま、神威が運転している翔に声をかける。

「予報では今日一日は降り続くそうですよ」

「そうか…ま、雨は嫌いじゃないからな」

「でも彼らは嫌いな様ですからね。外に出ずに一日中、家にいるでしょうね」

「それは何よりも鬱陶<sup>うつとう</sup>しいな」

翔が頷く。

「確かにそうですね」

「あまりにひどい様なら全員まとめて外に叩き出してやるさ」

神威は灰皿に煙草を押し付けた。

車は大きな門の前に到着し一旦停車する。

設置された4台の監視カメラが車を捕えると門が自動に開いていく。

「彼らがまだ寝ている事を祈るばかりですね」

翔は扉の開いた裏門から駐車場に向けて再び車を発進させた。

#### 高台に建つ大邸宅。

広大な敷地は四方を高い塀に囲まれており、至る所に監視カメラが設置されている。

正門からはまっすぐな道が続き、その向こうには『白虎邸』と呼ばれる大きな屋敷が見える。

道の両サイドに広がる手入れの行き届いた日本庭園が由緒正しい日本家屋を更に引き立てる。

屋敷の裏手には何本もの桜の木々に囲まれた広い池があり、中央に木造の橋がかけられている。

橋を渡ると正面の屋敷とは打って変わり、3つの洋風の建物が並んでいる。

中央が『蒼龍邸』と呼ばれる海外より移築された3階建ての洋館。右側には6階建てのマンション風の『朱雀邸』

左側には地下1階、地上2階のコンクリート建ての『玄武邸』

その先には何台もの車が収容できる駐車場と裏門がある。

#### 真神家

遙か昔より続く日本有数の財閥でこの大邸宅の主である。

真神家の現当主である神威。そして翔は代々、真神家に遣える桜塚家の現当主である。

神威は25歳、翔は28歳。どちらも経営者としてはまだ若い方だが統率力・洞察力・行動力・先見の明等、巨大な財閥を支配するのに必要な数々の力を充分に備えている。

『ある事情』により神威は12歳まで別姓を名乗り、違う家で暮らしていた。

初めて真神家を訪れた神威を見た瞬間、翔はその美しさに眼を奪われた。

まだ13歳だというのに全身に威厳を持ったオーラを纏っている。

艶やかな黒い髪と白い肌、華奢な体。

大きな瞳は強い力を放つが、その奥には暗い『何か』が隠されていた。

あれから12年。

桜塚家の代々からの掟に従い、翔はずっと神威の傍にいる。どんな時も自分を犠牲にしても彼女を守ってきた。

翔自身。その掟に不満を持つ事はなく、むしろ自ら進んで受け入れている。

【神威様の盾となり、傍に居続けたい…】

それが翔の唯一の願いであった。

車は駐車場に到着し停止する。

エンジンを切ると翔はすぐに降り、助手席のドアを開ける。

神威は車から降りると屋根付きの駐車場から出て空を見上げた。

髪や顔から全身へと雨粒が伝う。

「風邪をひきますよ」

後ろから翔が開いた傘を差しかける。

「構わない。この時期に雨に濡れたくらいで風邪はひかないさ」

「また、そんな事を…お体が弱いのですから、気を付けて頂かないと」

翔のさしかけた傘が神威を濡らす雨粒を完全に遮る。

「お前は本当に心配性だな。しかし…お前の方こそ濡れてしまうぞ」

「私はいんですよ」

二人は蒼龍邸に向かい並んで歩き出す。

「おつかえりい〜!!」

玄関のドアを開けると大音量の明るい声が飛んできた。

「二人仲良く朝帰り〜？やらしい〜」

声の主はニヤニヤしながら二人を交互に見ている。

「祈りは届かなかったようですね」

呆れ顔の翔はうんざりした様な神威に小声で囁く。

「まったく朝から騒がしい奴だな」

「なになに？」

興味津々な声の主を無視し神威はリビングへ向かう。

「ねえねえ〜？」

神威の後ろ姿に尚もすがり着こうとする声の主を翔が止める。

「洋介、いい加減にしろ。あまりしつこいとまた鉄槌食らうぞ」

声の主 洋介 は不貞腐れ頬を膨らます。

「いいじゃん。帰ってくるまで起きて待ってたんだよ？何してたか聞いたってさ」

「生憎だがお前の期待してる様な事は何もない」

「でも、二人きりで居たんだろ？」

ちらりと翔を見る。溜息をつく翔もリビングに向かった。

「ノーコメントですか〜？ますます怪しいですね〜」

レポーター口調で右手にマイクを持つ仕草をしながら洋介は翔の後を追う。

リビングに入ると既に神威は大きなテーブルの指定席に座り、経済新聞を広げていた。

「翔、コーヒーは？煎れたてだよ」

神威の向かい側の席にいる青年 旬 が声をかける。

「ああ、いただくよ」

翔は神威の隣の席に着く。

「ねえねえってば〜」

洋介は旬の隣に座り、まだ諦め切れずに身を乗り出して正面の二人を見ている。

「何にもなかったんですか〜？」

レポーター口調のまま見えないマイクを差し出す。

新聞から顔を上げた神威が洋介を睨み付ける。

「池に沈めてやるぞ」

どすの聞いた声を発するが洋介は怯まない。

「脅しですか？ 恐いですね」

おどけた口調で返す。

「脅しかどうか試してみるか？」

神威は睨みながらもにつこりと笑う。

「まあまあ、お二人さん。朝から喧嘩はやめましょうね。でも洋介、池に沈められても僕は助けてあげないよ」

コーヒーをカップに注ぎながら匂が間に割って入る。

「私も助けてやらないぞ。むしろ手伝うな」

匂からカップを受け取り、翔もにつこりと笑う。

「ふん。何だよ、皆してさ。俺はひとりぼっちだなあ」

洋介は椅子の上で体育座りをして再び頬を膨らませる。

「お前は本当にガキだな」

「うんうん。ガキだね」

翔と匂が互いに頷く。

「どうせガキですよ！だ！」

洋介は舌を出しながら二人を睨む。

そんな三人のやり取りを神威は微笑みながら見ていた。

平穏に流れる時間。

外は重い雲が空を完全に支配し、雨は更に激しさを増していった。



## Chapter 3

真神家。

日本で有数の富豪であり、古来から続く名家である。表向きは様々な分野で活躍する数多くの企業を所有し、政財界などに多大な影響力を持っている。

しかし、現在まで発展したのは表向きの姿の為だけではない。裏の、いや真実の姿がもたらしたものだった。

おんみょうじ  
陰陽師

宇宙の現象・世界の動き・人事の吉凶などは陰陽 2つの相反する性質を持つものと、五行 火・水・風・土・金 により支配されている。それらが循環・転化・対立・依存しあいながら万物を形成する。

という概念に基づき構築された、古代中国の俗信から発達した天文・暦数・占いなどを含む方術を操る者達の事である。

日本には6世紀頃に伝来し、当初は陰陽道やそれを操る陰陽師達は周りの者達に受け入れられず殆ど相手にはされていなかった。

しかし、今では当たり前の天気の予測などを行ううちに認められる様になっていく。

その後、大宝令（たいほうりょう 飛鳥時代に制定された、現在での法律のようなもの）では宮中における全ての政務を処理していた重要な機関である 中務省（なかつかしょう 大宝令により設立された、現在での省庁のようなもの）の中に 陰陽寮（おんみょうりょう 現在での役所のようなもの）が設けられた。

そうして陰陽師達は次第に勢力を増し、直接的に政務に関わる者も現われた。

しかし…あくまでも陰陽師とは影の存在とされ、真神家や桜塚家などのいくつかの家は決して表舞台には出ず歴史に記す事さえ許さなかった。

逆に当時の陰陽師として有名なのは安倍・賀茂<sup>かも</sup>の両氏が名高い。

陰陽道に発した諸風習は世に広く普及し、その影響は多方面で今日<sup>こんにち</sup>にも及んでいる。

真神家は日本に現在する陰陽師達の頂点に立ち、それらを統べる役目を持つ。

桜塚家は代々から真神家を補佐し、当主に降り掛かる災いから身を呈して護る事が宿命<sup>さだめ</sup>となっている。

さらに様々な方術に使う霊符や刀など、特殊な神具を作り出す東条家。

そして、過去・現在・未来を見通し感じる力に優れた如月家。

日本で確立されて以来。

陰陽師の世界は真神家を中心とし、桜塚家・東条家・如月家の4つの家により統制されている。

現在の真神家当主・神威は歴代の中でも非常に強い力を持つにも関わらず、非常に珍しく複雑な境遇にあった。

真神家は代々、女性が当主となるのが習わしである。

神威の母 綾乃 は先代の当主となるはずだった。

しかし、幼い頃より他者に決められた宿命に強い不満を持っていた。20歳の時。周囲の強引な運びにより、家が決めた男性 宇月<sup>うつき</sup>と結婚。男の子 蒼一郎<sup>そういちろう</sup>を出産した。

周囲は「綾乃も蒼一郎を産んだ事で少しは落ち着くだろう。次は当主となり、さらには次期当主となる女の子を生んでもらわねば」と思ったが…

実際には抱え込まれた不満はより強くなってしまふ。

蒼一郎が2歳の誕生日を迎える頃…

ついに綾乃の我慢は限界を越え、密かに中学校時代から付き合い続けていた恋人 隼人 と家を飛び出してしまふ。

そして、二人の間には女の子が生まれ 雪乃 と名付けられた。

真神らの追っ手から身を隠す為に綾乃は雪乃が持つ全ての力を封印し、隼人の実家でひっそりと暮らしていた。

しばしの間。平穏な時間が綾乃達、親子を包む。

だが、そんな時間も長くは続かなかった。

雪乃が12歳の時。父・隼人が病気により他界。

さらに翌年。ついに真神らの追っ手に見つかり、綾乃と雪乃は連れ戻される事になる。

雪乃、13歳。

初めて、母・綾乃の実家である真神家を訪れた。

初めて、半分だが血の繋がりがあある兄・蒼一郎と対面した…

## Chapter 3 (後書き)

【ここまでの登場人物・紹介】 Chapter 1 真神 神威  
真神家の現当主、旧姓・朽木 雪乃 桜塚 翔 桜塚家の現当主  
/ Chapter 2 真神 旬 神威の従弟（綾乃の妹の息子）  
如月 洋介 如月家の次男 / Chapter 3 真神 蒼一  
郎 神威の兄（異父・同母） 真神 綾乃 神威&蒼一郎の母  
朽木 隼人 神威の父、綾乃の中学からの恋人、病気により他界  
真神 宇月 蒼一郎の父、婿養子

## Chapter 4

春爛漫。

桜は薄桃の花を咲かせ、時折り吹く風にその花びらを舞い散らせる。あまりに多くの桜の木々に囲まれているせいで、視界が花びらと同じ色をしている様に見える。

雪乃は母・綾乃に手を引かれ真直ぐな道を歩いている。

隣を見ると母は俯き加減で唇を噛み締めている。

十数年ぶりに実家に帰郷したというのに少しも嬉しそうではない。それどころか、逆に辛そうだ。

黙ったまま歩く母からは怒りさえ感じる。

それにしても…母がこんな大きな家を持つ富豪の娘だったとは…

生まれてからずっと父の実家である朽木家に親子三人だけで暮らしていた。

母は決して自分の生まれ育った家の話はしなかった。

まだ幼かった頃。

周りの子供達が夏休み等に故郷に帰省したりするという話を聞いた。朽木の家には早くに亡くなった為、祖父母がいない。

私は母方の実家というものや祖父母の事に興味を持ち、無性に知りたくなった。さっそく尋ねたら母は物凄い剣幕で怒りだした。

その姿を見て私は幼いながらも、聞いてはならない事なのだと悟った。

それ以来。母はもちろん、父にも何も聞けずにいた。

決して裕福ではなかったが、私は何不自由なく生活してきた。

父は穏やかに笑う優しい人だった。

母は逆に厳しく口うるさい人だった。私が悪い事をする、それがどんなに些細な事でも凄腕で怒りだす。

「母さんは極度の心配性なんだ。雪乃を心から愛している証拠だよ。だから、許してあげて」

その度に父は私の頭を撫でながら言っていた。だが、私にはそうは思えなかった。

【母は何かに怯えているんだ。それを紛らわす為に私に厳しくあたるんだ！だたの八つ当たりだ！】

一年中、極度に気を張っている母。

いつも周りに対して一線を引いている、そんな風に見えた。

私は母の、心からの笑顔を一度も見ただ事がない。

そして、私が12歳の時。優しくした父が突然、病気で亡くなった。とても悲しかった。

『あまりに悲しすぎると人は泣く事さえ出来ない』

何かの本に書いてあった文章。そんな事はないと馬鹿にしていたが、まさにその通りだと痛感した。

母は父の遺影にすがりつき、意味不明な言葉を発しながら何日も泣いていた。

初七日が過ぎた頃。

私の悲しみはほんの少しだが薄れ、冷静に状況を判断できるようになった。

【これからは母と二人きりで生きていくんだ】

その事にやっと気付いたが、考えるだけでとても憂鬱な気分には捕われる。

【今までは父がいてくれたから耐えられたのに…】

正直、私はすぐにヒステリックになる母があまり好きではなかった。今だに周りを気にせず泣き続ける母の背中を、私はこれから先の事

を考えながら複雑な想いで見つめていた。

父が亡くなってから1年ほど過ぎた頃。母はだいぶ落ち着き、日常の生活を取り戻そうとしていた。

そんなある日の夕方。家のチャイムが鳴った。

何気なく私が出ようとすると、もの凄い形相で母が私の行く手を遮る。

「あなたは二階に行つてなさい。良いと言つまで絶対に降りて来てはダメよ」

そう言つと真直ぐに玄関へ向かう。

私は母のただならぬ姿に好奇心を抱き、二階には行かず階段下からそつと玄関を覗いた。

開けられた扉の向こうには二人の男が立っている。

二人とも揃いの黒いスーツに白いシャツ、濃いグレーのネクタイ。いかにも怪しい風貌の男達だった。

何やら言い争いをしてるようだが、小声なのか内容までは分からない。

「帰つてちょうだい!!」

母は男達を突き飛ばし、乱暴に扉を閉め鍵をかけた。

階段下にいた私と目が合う。

咄嗟にこちらへ駆け出してくる母。

【しまった。また叱られる】

そう思い身を縮めると母は意外な行動を取った。

「隠しておくのも限界ね…もう、あの人もいなくなってしまったんだもの…」

そう呟きながら、母は私を抱き締め泣いている。

私は訳が分からず、ただ母に身を任せていた。

1ヵ月後。

「お母さんの実家に戻りましょう」

母に突然そう言われ、詳しい事情など一切聞かされずに私は今ここにいる。

後ろにはびったりと例の黒スーツの二人組が着いている。

進んでいる道の先には大きな日本家屋が建っていた。

家の玄関先には小柄な和服の女性と背の高い少年が私達を出迎えてくれている。

「よく戻って来てくれましたね」

和服の女性は私に優しく微笑みかけた。

母は相変わらず俯いたままだ。

「綾乃姉様。お疲れになったでしょう。とりあえず、今日はゆっくり休んで」

その言葉に母が顔を上げる。

「静。いい気味だと思っているんでしょう？結局は逃げる事なんて出来なかったわねって」

和服の女性 静 を鋭く睨み付ける。

静はそれでも微笑みを絶やさない。

「綾乃姉様の部屋はそのままにしております。とにかく今日は休んで下さい。明日、義兄様にいさまがお話があるそうです。雪乃ちゃん、明日また会いましょう」

静は私の頭を撫でると家の中へ入って行った。

「さあ、行くわよ」

苛立ちを隠す事無く母が繋いだ手を強く引つ張る。私はされるがままに母の後を追う。

「雪乃、また明日ね」

それまで黙って私を凝視していた背の高い少年が声をかけてきた。振り返ると、少年は優しく笑いながら手を振っている。

【これからはずっと一緒だよ】

ふいに直接心に響いてきた少年の声。

驚いて立ち止まる私を構わず母が更に強く引つ張る。



結局、私は何も話せないまま母が昔使っていた部屋に連れて行かれてしまった。

## Chapter 5 (前書き)

不覚にも風邪で寝込んでしまいました：Chapter 4 & 5はその最中に書いたので、文章や構成などが乱れ? になってしまいましたた(ノ。¥) 読んでくださった方、「何だこりや? 」と思いになるでしょうが…是非? ご容赦くださいませ> (――\*)<

## Chapter 5

翌日。昼過ぎに私は目を覚ました。  
窓からは明るい太陽の光が部屋を照らし、時折鳥の鳴き声が聞こえてくる。

布団に入っただまま、しばらく天井を見つめる。

まだ目覚めきれしていない思考が段々とはっきりしていく。

【ここは一昨日まで住んでいた朽木の家じゃないんだ…】  
ふと隣を見ると母の寝ていた布団は綺麗に畳まれている。

広い和室に一人。

すぐに起きる気はせず、私は昨日の出来事を思い返していた。

突然、家にやって来た黒スーツの来訪者。

突然、帰る事になった母の実家。

出迎えてくれた和服の女性と背の高い少年。

女性は静という名で母の実妹らしかった。

久しぶりに帰って来た生家、久しぶりに再会した妹。

なのに。素っ気ない態度で私を連れ、かつての自室に閉じこもってしまった母。

結局。昨夜は互いに何も話せず黙り込んだまま、部屋で夕食を取り床に着いた。

「訳が分からない事ばかりだ。説明くらいしろよ」

独り言を呟きながら、体を起こし布団から出る。

壁には洋服が掛けられていた。シンプルな白のワンピース。

母が用意してくれたのだろうか？そんな事を考えながら着替える。

室内にある洗面台に近付き身仕度を整えた。

布団を畳もうと屈み込むと同時に部屋の障子が開いた。

「雪乃様、お目覚めですか？あら！後片付けなんてなさなくて良いんですよ」

元気の良い初老の女性が部屋に入ってくる。

不思議そうに見ている私に女性が言った。

「私は長年、この家で家政婦をしています。雪乃様とは初対面ですね。お会いできて光栄です」

上機嫌で私に笑いかける。

「綾乃様は宇月様達とお話中です。その間、退屈だろうから家を案内するようにと宇月様から仰せつかってます。あ！まずはお食事ですね。お腹すいたでしょう？さ、どうぞ」

女性は一方的に話すと私の背中を押し部屋の外に出す。

「ささ、食堂にご案内いたします」

あまりの勢いに私は何も言えず、されるがままに着いて行く事にした。

外観からある程度は想像できたが、この屋敷はとてつもなく広い。

家政婦だという女性が案内してくれなければ確実に迷っていただろう。

「綾乃様とそっくりで美人ですね」

「白がよくお似合いです」

食堂に向かう間、ずっと女性は話し掛けてきた。

しかし、今の状況がほとんど把握できず混乱している私は曖昧な返答しか出来なかった。

「食堂はここですよ」

女性が扉を開けると、中は他の部屋とは違い洋風の造りをしていた。長いテーブルには白のクロスが掛けられ、背もたれの高い椅子が並んでいる。

開け放たれた窓に掛かるレースのカーテンがふわりと風に揺れている。

「おはよう。というよりは…こんにちは、かな？」

昨日の少年が窓際の席に座り私を見つめている。

「お腹、すいてるよね？一緒に食べよう」

家政婦の女性が黙って立っている私を少年の前の席に案内する。

俯いたまま席に着く。

「昨日はよく眠れた？」

運ばれてくる料理や飲み物を眺めながら、少年が再び声をかけてくる。

「雪乃は無口なんだね」

顔を上げると少年は笑っていた。

少年の事は初対面の昨日から無性に気になっていた。

吸い込まれそうな茶の瞳。

額にかかる茶の髪。

白く透き通る肌。

線の細い体。

歳はおそらく私より少し上だろう。まるでギリシャ神話の中から飛び出してきた神の様な、綺麗な少年だと思った。

「僕の顔に何か着いてる？」

少年の言葉に急に恥ずかしさが沸き再び俯く。

「ふふ、変なの」

少年が笑う。

顔が紅潮していくのが分かる。

「僕の名前は蒼一郎。これから宜しくね。さ、食べよう。食べ終わったら僕が家を案内するよ」

少年 蒼一郎 そういちろう は簡単な自己紹介をすると家政婦の女性に目配せする。

「では、私は失礼しますね」

女性は蒼一郎の視線の意味を理解したのか、にっこりと頷くと食堂

から出て行ってしまった。

残された空間の中で緊張せいなのか、私は無言のまま運ばれた食事を食べ続けた。

蒼一郎はあえて何も言わず、そんな私を微笑みながら見つめている。ようやく食べ終わり食後の紅茶を飲み干すと、待っていたかの様に蒼一郎が席を立ち私の手を取る。

逆らえずに立ち上がると、そのまま二人で食堂を後にした。

広い家を蒼一郎に手を引かれ進んでいく。

「ここが僕のお薦めの場所だよ」

蒼一郎が歩みを止め私の顔を覗き込む。

そこは裏庭らしく、顔を上げると見事な風景が広がっていた。

大きな池が横たわり、周りは花を咲き誇らせた桜の太木に囲まれている。

池の水面は透明で色鮮やかな鯉達が優雅に泳いでいた。

「さ、座って」

蒼一郎は手を離すと中でも一際大きな桜の木の根元に座り込む。

促されるまま、私も隣に座る。

「綺麗だろ？僕はこの家の中でここが一番好きなんだ」

「ええ、確かに綺麗……」

不意に零れた私の言葉に蒼一郎がこちらを向く。

「やっと、喋ってくれたね」

照れ臭くなり私は再び俯いてしまう。

「そのワンピース、やっぱり凄く似合ってるよ。苦労して選んだ甲斐があったな」

驚いて顔を上げる。

「これ、あなたが？」

今度は蒼一郎が照れ臭そうに俯く。

「今まで女の子の服なんて買った事ないからさ。でも着てくれて嬉

しいよ」

「ありがとう……」

私は何故だか湧いてくる意味不明な喜びでそう返すのが精一杯だった。

一瞬の沈黙。

沈黙を破り蒼一郎が口を開く。

「まあ、当然だよな？ 何にも知らされずに、いきなりこんな大きな家に連れてこられちゃ……誰だって混乱するよ」

優しい口調に昨日から自分がいつも以上に気を張らせていた事に気付く。

不意に緊張の糸が切れ、涙が零れそうになる。

「大丈夫だよ……」

蒼一郎の手が私の髪に触れる。

真つすぐに私を捕える茶の瞳。

「大丈夫だよ。何があっても雪乃は僕が守ってあげる……」

「……」

金縛りにかかった様に動かない体。

「これからは、ずっと、一緒だよ……」

ゆつくりと蒼一郎の顔が近付いてくる。

唇に触れる、冷たい唇の感触。

「離さないから……」

唇を放すと強く抱き締められた。

腕から伝わってくる体温、肌から伝わってくる鼓動。

はらはらと舞い落ちる桜の花びらをぼんやりと眺めながら、私は抵抗せず

に蒼一郎に身を任せた。

まるで、二人の間の時間が停まってしまったかの様にさえ思える。

何故だか分からないが【このままでいたい】そんな感情が込み上げてくる。

「雪乃！雪乃！どこにいるの？！」

唐突に穏やかな静寂を破り、母のヒステリックな声が聞こえてきた。蒼一郎は私から離れると困った様に笑う。

「お母さんが呼んでいるよ」

「……」

私の頭を優しく撫でる。

「これからはずっと一緒にいられるから。さあ、お母さんの所に行つてあげて」

立ち上がると私に手を差し伸べる。

立ち上がった私の背中を押す。

それでも進めずにいる私の頬に蒼一郎がキスをする。

「心配させちゃダメだ」

仕方なく屋敷に戻ろうとした所に母が現れた。

「……！雪乃！こつちへいらつしやい！」

母は蒼一郎の姿を見た瞬間、血相を変えて私に走り寄つて来た。

「早く！いらつしやい！」

手を捕まれ強引に屋敷の中へと引きずられていく。

ちらりと後ろを振り返ると蒼一郎は昨日と同じ様に微笑みながら手を振っていた。

屋敷に戻ると私は大きな和屋へと連れて来られた。

正面には立派な甲冑と豪華な装飾を施された日本刀が何本か飾られている。

背後の壁には一面に広がる水墨画の掛軸。

その前に和服を来て腕組みをしている細身の男性が座っていた。

隣には哀しげな表情を浮かべた静がいる。

「そこに座りなさい」

促され男性の前に座る。

母は私の隣に座ると前を見据えている。

「初めて会っな。私は宇月うづきという。お前の義父だ」

男性 宇月うづき は唐突に自己紹介をした。



意味が分からず困惑しながら母を見ると前を見据えたまま黙っている。

「突然の事で意味が分からないでしょうね」

私の思いを察したのか、静が間に割って入る。

「あなたのお母様は私の姉であり、宇月様の戸籍上の妻なのですよ。だから、宇月様はあなたにとっては義父になるのです」

説明されたのは良いが、あまりに簡潔すぎてまだ理解できない。

宇月に更に疑問の視線を送ると宇月はゴホンと咳払いをした。

「私と綾乃の結婚は両家の親達が決めた。いわゆる政略結婚というものだ。それは分かるかね？」

静かに頷く。

「綾乃はそれが我慢できず、最初の長兄である蒼一郎を産んですぐにかつてからの恋人とこの家を捨て逃げ出した」

宇月は深い溜息をつく。

蒼一郎が半分血の繋がった兄であった事にショックを受けた。

私の落胆に気付く事無く宇月は続ける。

「真神家の者達は四方に手を尽くし、あらゆる手段を用い、ずっと君達を捜していた。そして、やっと見付けた」

そこまで黙って聞いていた私は浮かんできた疑問を迷わず口にする。母と同様に宇月を真つすぐに見据える。

「どうしてですか？逃げた母や生まれた私をどうしてそこまでして捜していたんですか？跡取り問題が原因なら長兄がいらっしやるじやありませんか？」

私の言葉に母・宇月・静が驚いた様子を見せる。

ふと宇月が顔を綻ほころばせる。

「13歳というのに、なかなか肝の据わった子だな。それに賢い。これは下手に隠しても無駄な様だな」

静が何か言おうと口を開くのを宇月が制する。

「雪乃、陰陽師というものを知っているか？」

私は首を傾げながら答える。

「映画や本の中の知識しかありませんから、詳しくは知りません」  
宇月はうんうんと頷きながら続ける。

「この真神家の生業はその陰陽師だ。それも日本に現存する陰陽師達の頂点に立ち統べる役目を持つ」

一息つくとも更に続ける。

「私達が君達を捜していたのはな。真神家の当主は代々、最初に生まれ持った力を持つ女の子にしかねないという掟があるからだ。綾乃は本来、真神の当主となるべき者だったのだ」

驚きで隣を見ると母は俯いている。

「だが綾乃はそれが嫌で逃げ出し、自分の持つ力を禁術により放棄してしまった。放棄された力はもう戻らない。しかし、現在は空席になっている当主の座には誰かが座らなければならぬ」

「次の当主となるのは…先代当主になるはずだった私の最初の娘…つまり雪乃、あなたよ…」

今まで無言だった母が宇月の次の言葉を代弁する。

確かに母の実家の事を知りたいと思った事はあるが…想像を越えた展開に思わず絶句する。

「雪乃ちゃん？大丈夫？」

静が心配そうに声を掛けてくる。

「雪乃、これはあなたの避けられない宿命なのよ」

囁くように言う母の言葉に、混乱していた思考が一気に怒りに支配される。

【母が今まで生家の事を語ろうとしなかったのも、いつも何かに怯え気を張らせていたのも、私に厳しく当たっていたのも…全て自分の背負うはずだった重い宿命から逃げ続けるためだった。拳げ句の果てにはその宿命を私に押しつけようとしているんだ。しかも、ちゃんとした夫がいながら父さんと逃げただなんて…】

膝に置いていた拳に力を込める。

「私に選択や拒否する権利はないんですね？」

母に向かって問い掛ける。

「あなたの身勝手な行動の尻拭いを私にしろと言っんですね？」

自然と声に強い怒気が混じる。

その声に母は俯いてしまう。

「分かりました。あなた方の言う通りにします。ただし……」

思い切り母を睨み付ける。

「私はあなたを許さない！」

言い終えると私は部屋から飛び出した。

ただ夢中で廊下を走った。

何故だか分からないが、蒼一郎がいる筈の裏庭を目指して……

だがまだ慣れない家に迷い、私は途方にくれ廊下の端に座り込んだ。

「どうしたの？」

ふと頭上から声が聞こえる。

見上げると蒼一郎が心配そうに私を見ていた。

「何かあったの？父さん達に何か言われたの？」

視線を合わせるように屈み込む蒼一郎。

私は堪らず抱き付き、泣き出してしまった。まるで幼い子供の様に声を上げながら……

蒼一郎はそれ以上は何も言わず、私が泣き止むまで抱き締め髪を撫でていてくれた。

生まれて初めてだった。

誰かに泣き顔を見せたのも、ただ無防備に身を委ねてしまったのも……この時から蒼一郎は私にとって異父兄というだけではなく、かけがえのない『大切な人』となっていた。

それから2年間。

私は母によつて施された力の封印を解かれ、当主になるべく必要なあらゆる知識や方術を学ばされた。

辛く逃げ出したくなる事も数々だったが、常に蒼一郎が傍にいて励ましてくれたお陰で乗り越える事が出来た。

しかし母とはあれ以来、口を利く所かまともに顔さえ見ていない。  
私の中の母への怒りは今だに完全には消えてはいなかった。

そして、15歳。

春を目前にした頃。

私は古来からの儀式に基づき、正式に真神家の当主となったのだ。

## Chapter 5 (後書き)

【これまでの登場人物】

Chapter 4 & 5

真神  
静

綾乃の実妹

## Chapter 6

2006 初夏

今年の梅雨は例年に比べ、気温も湿度も高い。

降雨量も多く、ほぼ一日置きのペースで各地に大雨や洪水の警報が発令されている。

7月6日、午後。

神威は蒼龍邸の自室でぼんやりとテレビを見ていた。

予定を変更して放送されている臨時特番。

ブラウン管には昨夜からの大雨による土砂崩れの被害に遭い、半壊した幾つもの民家が映し出されている。

その内の一軒は難を逃れ無事な様だが、降り続く豪雨に今にも崩れ落ちてしまいそうだった。

倒壊を目前にし、それを実況するアナウンサーの興奮気味な甲高い声が耳障りに感じる。

『国民に真実を伝える。それが報道というものの義務だ』とはよく言ったものだ。

民家の主人にしてみれば、家や今まで生活してきた証を失う事は一生を左右するであろう一大事だと言うのに。

それをあんな風に興奮混じりで派手に報道されては、主人もいい迷惑だろう。

神威は軽い苛立ちを覚え、テレビの電源を切るとリモコンを投げ捨てた。

外は雨が降り続いている。

厚い雨雲のせいで太陽は完全に遮られ、昼か夜か分からないほど空は暗いままだった。

激しくなるばかりの雨音は、先程まで流れていたアナウンサーの声

よりは遥かに心地よく感じられた。

「神威様、いらっしゃいますか？」

ドアがノックされ扉の向こうから翔が声をかけてくる。

「ああ。いる」

簡潔な返事を返す。

「夕食の支度が出来ました。降りて来られて下さい」

丁寧に用件を伝えると翔は下の階へと降りて行った。

神威は気怠そうにソファから立ち上がると、翔の後を追いつ下の階にある食堂に向かう。

「神威、遅い！腹へった」

食堂に入った瞬間、指定席にいる洋介の間延びした声に迎えられる。

【こいつはあのアナウンサーと同種だな…】

神威は洋介には目もくれず、同じく指定席に座る。

翔も隣の席につき、神威のグラスに赤ワインを注ぐ。

「神威、遅かったね」

目の前に座る旬がミネラルウォーターが入ったグラスを差し出す。

### 真神 旬

神威の母・綾野の妹・静の一人息子で神威の従弟にあたる。

現在は真神本家の子となり弟でもある。

神威に続く力の持ち主で頭脳明晰、容姿も美しい。生まれ付きの茶の髪に大きな黒の瞳。華奢な体付きに似合わず様々な格闘技を習得している。

本来は穏やかな性格で争い事を好まない。その為、ファミリーの中では中和剤の役目をしている。

「今日も皆、揃ってるな」

ワイングラスを傾けながら、神威がちらりと周りを見渡す。

「こんな雨続きじゃ誰も外に出たがらないんだよ。ね？」

旬が隣にいる大柄の青年 悠 ゆう に声をかける。

「まあな……」

悠は運ばれてきた前菜を眺めている。

## 東条 悠

真神家が遣う神具の全てを造り出す東条家の現当主である。

日焼けした褐色の肌に赤茶に染められた髪。体系は背が高く筋肉質。

風貌からは想像が付かない繊細な作業も難なくこなす。

神具を造る腕は一流で、その面では神威の信頼も厚い。

「こう雨がずっと湿気が多くて憂鬱でしょう」

翔の隣にいた細身の青年 竜也 たつや が神威に問い掛ける。

## 如月 竜也

過去・現在・未来、あらゆる時間の流れを見通す力に優れた如月家の現当主であり、洋介の兄でもある。

強い先見の力を持ち、どんな苦言も包み隠さずにはっきりと言う。

神威はそこが気に入り、悠同様に厚い信頼を寄せている。

明るく社交的な洋介とは逆に物静かで知性的な青年だ。

はつきりと目鼻立ちに黒の髪。物静かに加え、普段は眼鏡をかけているせいで気難しい人間と勘違いされる事も多い。

「ああ、遊びに行きてえな」

洋介が前菜を頬張りながらぼやき始めた。

「雨なんか。嫌いだ」

「仕方ないよ。梅雨なんだから」

旬が諭すように言う。

「そつだ。それより、洋介。口に物入れたまま話すんじゃない」

竜也が洋介を軽く睨む。



「ふう〜だ」  
いじけて外方そつぽを向く洋介。

【まったく、洋介は本当に竜也と血の繋がった兄弟なのか？】  
神威はワインを啜りながら二人の兄弟を見比べる。

洋介は髪を金に染め、耳にはいくつものピアスをしている。服装は原色を好み、細目の体には不釣り合いな大きめの物が多い。確かに竜也とは肌の白さや顔立ちは似ているが…全身から出るオーラはまさに月と太陽。正反対だった。

まるで子供のまま成長したかの様に無邪気で騒がしい。外見はチャラチャラしているが、意外に正義感が強く熱血漢で馬鹿正直な所がある。

常に冷静な竜也と見比べると時々、本当に兄弟なのかと疑ってしまう事がある。

まあ、洋介の明るさに救けられた事もあるのは事実だが…

「そう言えば、明日は七夕だよね？」  
唐突に旬が話題を変える。

「そう言えば…そうでしたね」  
翔が同意する。

「でも、このまま雨だと天の川も見れませんね」

「せめて明日くらいは晴れてほしいもんだな」

竜也と悠が顔を見合わせながら頷く。

すると、洋介が思い出した様に

「ちよつと待っててよ！」

と突然部屋から飛び出して行つた。

「また、何か企んでるな」

「…みたいですな」

隣でメインディッシュを口にいる翔に神威がぼやく。

しばらくして洋介が食堂に戻ってくる。両手には大きな笹の木と色とりどりの短冊。

「じゃじゃ〜ん！みんな明日が七夕だって事、忘れてると思って…」  
笹の木を左右に振りながら得意気に大声を張り上げる。

「用意しておきましたあ〜！」

「洋介：本当、そういうイベント事が好きだよな…」

半ば呆れた様に旬が笹を見ている。

「だってさ、一年に一回だけ織姫ちゃんと彦星ちゃんが逢えて愛を語り合う日なんだよ！」

興奮気味に熱弁する洋介。

「…ちゃんって。お前の知り合いなんか？」

悠が茶化す。

「知り合いじゃないけどさ。何か応援してやりたいじゃんか！」

顔を真っ赤にして洋介が反論する。

「それに〜短冊に願い事書いて吊したら叶うって言うじゃん？みんなで書こうよ！願い事！」

手にした短冊を全員に配っていく。

「願い事を短冊につて。ガキじゃないんだからさ」

悠が渡された短冊をひらひら揺らす。

「まったく！夢がないね！そんな大人が日本をダメにするんだ〜」

「お前に言われたかねえよ！」

言い争いを始める悠と洋介を見兼ねて旬が割って入る。

「まあまあ、いいじゃないか。たまには童心に帰るって事でさ。雨で滅入ってるんだから、ちょっとは楽しい企画があった方が良くよ」  
「さっすが、旬！話がわかる〜」

洋介は旬に抱き付き頬を擦り寄せてくる。

【願い事か…】

神威は目の前に置かれた短冊を黙ったまま凝視している。

翔はそんな神威に声をかけようとしたが、神威の言葉に遮られる。

「明日は晴れるといいな。天の川を見たいしな、洋介」

洋介は途端に満面の笑みを浮かべる。

「ほら！神威だって乗り気じゃなか！よし、みんな願い事書いて明日の夜までに提ぐ出！」

「ま、たまには良いかな」

悠と竜也はしぶしぶ短冊をポケットにしまう。

翔と旬は微笑みながら洋介を見ている神威に心配の視線を移す。その視線に気付いたのか神威はワインを飲み干すと席を立った。

「今日は少し疲れている。悪いが先に休ませてもらう」  
真直ぐに出口に向かう。

ドアを開け振り向き様に洋介に短冊を掲げる。

「明日は楽しみにしているぞ」  
言い終えると同時にドアを閉める。

ドア越しに

「承知したよ！」

と威勢の良い洋介の声が聞こえていた。

神威はそのまま自室には戻らなかった。

蒼龍邸と白虎邸の間にある庭園添いの部屋へと向かう。

庭園に面した壁はガラス張りで、向こうに広がる大きな池も桜の木々も見渡せる。

神威は外に向かって設置されている窓際のソファーに深々と腰掛けた。

洋介にもらった短冊をサイドテーブルに置く。短冊の淡い青が晴れた空を連想させる。

目前に横たわる池の水面は雨で無数の波紋を描く。

波紋を見つめながら神威は『あの日』を思い出していた。

初めて真神家に訪れた日。

初めて兄である蒼一郎と出会った日。

そして…蒼一郎に初めてのキスをされ、抱き締められた日。  
舞い狂う桜の花びら。

染まる薄紅の視界。

冷たい唇の感触。

暖かな体温。

早く脈打つ鼓動の音。

もう十数年も経つと言つのに、全てがまるで昨日の事に鮮明に記憶されている。

「願い事が…」

薄暗い部屋に呟いた声が響く。

「……！」

突然、庭園を眺めていた眼が大きく見開かれる。

池の周りの中でも一際大きな桜の下にゆらりと人影が姿を現した。

雨と夜の闇で視界はほとんど遮られていたが、神威はそれが誰だかすぐに理解できた。

「…蒼一郎…」

桜の下の人影が神威に向かって手を振っている。

『これからは僕が守ってあげるよ…』

影の澄んだ声が直接、頭に響いてくる。

『離さないって言ったはずだよ…』

声は続く。

『君もそう望んだはず…なのに…』

声は邪気を含んでいく。

『なのに…なのに…君は僕を裏切った!!』

叫びとともに影は深紅の炎に包まれていく。

神威は瞬きさえ出来ずに影を見ている。

『どうしてだ!なぜ、裏切ったんだ!!』

完全に憎悪を宿した声が神威の体を縛る。

『僕は君を忘れない!必ず迎えに行くよ!』

炎に飲まれた手が神威に向かって伸ばされる。  
全身を冷たい汗が伝う。

「…や…め…て、やめて!!」  
渴いた喉から許しを乞う言葉が溢れる。

「神威様！神威様！」

部屋のドアを激しく叩く音がする。

「どうなされたんですか?!」

慌てた様子で翔が部屋に飛び込んで来た。

「神威様！神威様！」

庭園を凝視したまま、ソファで固まっている神威を揺さ振る。

「大丈夫ですか?!」

ゆっくりと翔を見る。

心配の眼差しを浴び、神威の体は少しづつ感覚を取り戻していく。

再び庭園に眼をやると、蒼一郎の幻は完全に消えていた。

「大丈夫だ…」

必死に平静を装う。

「しかし！叫び声がありましたよ！何かあったんですか?!」

翔は神威の肩を掴んだまま問いたです。

「なんでもない。うたた寝をしてしまって…少し悪い夢を見ただけだ…」

視線を逸らし翔の手を振りほどく。

「本当ですか…?」

「ああ…」

重い沈黙。

耐え切れず、神威は短冊を手にとると部屋を出ていこうとする。

「神威様…」

立ち止まり尚も心配している翔に神威が笑う。

「翔、お前の願い事は何だ？」

「……」

答えず俯く翔。神威は首を傾げるポーズを取る。

「私にも言えない願い事か？まあ、言えないなら仕方ないな」  
再び開け放たれたドアへと向かう。

「神威様の願い事は何ですか？」

後ろ姿にかけられた声に神威は苦笑する。

「私の願いは…」

振り返らずに言葉を続ける。

「私の願いは…誰であろうと、例え神であろうと叶える事は出来ない…」

翔は黙りこんでいる。

「だから、誰にも教えられないさ」

ひらひらと短冊を振りながら神威は部屋を後にした。

残された翔は唇を噛み締め、窓の外を見る。

いつもと同じ風景。

翔には神威の見た幻は見えなかった。

## Chapter 7

翌朝、昨日からの雨は今だ降り続いている。

神威はベッドの中でただ雨音を聞いていた。

昨夜はまったく眠れず、かと言って何もする気にはなれず布団に包まったまま昔の事を思い出していた。

【昨夜、私が見たモノは私の心が生んだ幻か？それとも…】  
考えても答えは出ない。

紅く燃え上がる蒼一郎の姿が脳裏に浮かぶ。

ベッド脇の時計はデジタル表示で7月7日・AM 8:00と示している。

【夢をうなされずに眠れなかったのは久しぶりだな…】

重い体を起こし、室内にある小型の冷蔵庫に向かう。

ミネラルウォーターに口を付けながら閉め切られたカーテンを開ける。

窓の外は薄暗く重い雲が空を支配し、無数の水滴を地上に落としている。

ふと窓ガラスに映った自分と目が合う。

「ひどい顔だな…」

すぐに目を逸らしバスルームに向かう。

少し熱めのシャワーを浴びていると、ゆっくりだが頭がはつきりとしてくる。

しかし体はまだ重いままでタイル床に座り込む。

頭上から降り注ぐ水滴は全身を伝い、排水溝へと吸い込まれていく。

【このまま何もかも、記憶も感情も、流れて逝ってしまえばいいのに…】

排水溝をじっと見ていると背中に軽い痛みが走る。

斜めに走る一本の大きな傷跡。

神威は傷跡に触れる。

「そんな事、許される訳ないな……」

呟くとシャワーを止めバスルームを後にした。

「もう最悪!!」

蒼龍邸の広いリビングで洋介は窓の向こうの空を睨んでいる。

「日頃の行いの現れだね」

「そうだ。お前の日頃の行いが悪いからだ」

旬と竜也が交互に言う。

「うるさいな!二人で連呼するなよ!」

悠をちらりと見て洋介は言葉を続ける。

「日頃の行いなら……悠のせいだよ!」

悠は眉間に皺を寄せて尋ねる。

「何で俺のせいなんだよ?」

「だって……いつも俺に柔道技かけたりするじゃん……俺をいじめるじゃん……」

悠は呆れた風に両手を上げる。

「馬鹿かお前。あれはお前がうるさいからだろ?それにいじめじゃなくて愛の鞭だ」

「ううゝ雨、止まないかなあゝ天の川ゝ!織姫ちゃん!」

「だ・か・ら!織姫はお前の知り合いかって!?!」

悠が窓に張りついてしている洋介の頭をこづく。

旬と竜也は笑いながら二人を見ていた。

翔は朱雀邸の最上階にある自室でピアノに向かっていた。

洋介・竜也・悠そして翔は通常はこの朱雀邸に住んでいる。

蒼龍邸は神威と旬の住居で、何人かの使用人が通いで行き来している

何も弾く気になれず、鍵盤の上に置いたままの指を見つめている。  
翔は昨夜の出来事を思い出していた。



神威はうたた寝で悪い夢をみただけだと言っていたが…  
尋常ではない、そんな感じだった。

【何かを見たのだろうか？】

おそらく強く問いただしていたとしても、神威は何も話さなかった  
だろう。

【いつも、そうだ…】

神威は肝心な事は話さない。

弱みを見せる事も決してしない。

いつも一人で抱え込む。

神威が自分達に心配をかけない為にそうしている事は痛いほど分か  
っている。

でも、それが逆に無性に歯痒い。

傍ににいるのに何も出来ない。支えたいのに無言で拒否される。

どうにもならない感情。募るばかりのジレンマ。

翔は深い溜息をつくと鍵盤の上の指を動かし始める。

流れるのは物悲しいバラード。音色が部屋を漂う。

ただ一人、愛しい人の笑顔を夢見て曲を紡ぎ続ける。

午後3時。

蒼龍邸のリビングに神威が姿を現す。

「神威、遅いご起床だね」

につこりと笑いながら匂が入ってきた神威を見る。

「朝から起きていたさ。自室で本を読んでいた」

答えながら一人掛けのソファに腰を降ろす。

「コーヒーでも入れようか？出来たてだよ」

「ああ、頼む」

匂はカップにサイフォンからコーヒーを注ぎ、神威に渡す。

「ありがとう。翔はどうした？」

「さあ？まだこっちは来てないよ」

匂が首を傾げる。

「そうか…」

素っ気なく答えるとカップのコーヒーに口を付けた。

「何かあつたんですか？」

そんな様子を見て竜也が声をかける。

神威は視線を動かさずに

「何もないさ」

と再びコーヒーを啜った。

カップをテーブルに置いた瞬間、今度は翔がリビングに姿を現した。

「翔も遅かったな」

今まで黙って映画のDVDを見ていた悠がいつもの場所に座ろうとしていた翔に視線を移す。

「ああ、部屋でぼんやりしてたんだ。神威様、おはようございます」

「今頃、おはようはないだろ？」

翔は苦笑する。

「はい、コーヒー」

旬が翔の前にカップを差し出す。

「すまない。それにしても…静かだな」

悠の隣で黙ったままテレビ画面を見ている洋介をちらりと見る。

竜也がうんざりした顔で説明を始める。

「さっきまで喚いていたよ。雨が止まないってね。今はいじけてるんだよ」

「ガキだな…」

「まっただ」

翔と竜也は顔を見合わせ苦笑する。

「ガキで悪かったな…」

それまで黙っていた洋介がテレビ画面を見たままでぼそりと呟く。  
悠は

「また始まった」

と言いながら翔の隣に移動する。

神威はカップを手に悠の代わりに洋介の隣に座る。

「大丈夫だ、洋介。今夜は雨も止むさ。天の川も見れる」  
「本当に？」

体操座りの洋介が上目遣いに神威を見る。

「私が言うんだから間違えない」

優しく笑う。途端に笑顔になる洋介。

「うん！神威が言うんだから間違えないね！」

洋介は嬉しそうに立ち上がるとリビングの隅に立て掛けられた笹に走り寄る。

「織り姫ちゃん。早く逢いたいなあ。早く夜になんないかなあ」  
上機嫌で笹を揺らす。

「だからさ！織姫は知り合いか？っていうか、織姫は彦星のもんだろ？」

悠が突っ込みを入れる。

「なんだよ！織姫ちゃんは皆のアイドルなの！」  
他の全員が苦笑する。

「神威、あんまり洋介を甘やかしちゃダメだよ」

旬が洋介を面白そうに見ていた神威を軽く睨む。

「本当に単純な奴だな」

悪戯っぽく笑いながら元いたソファーに戻る。

「あのままどんよりされてたら逆にうざいだろ？」

「神威、悪い…純粋な少年を手玉に取ってさ」

旬がにやりと笑う。

「まあ、あれはあれでうざいがな」

全員で笹を片手にはしゃぐ洋介を見る。

「馬鹿だな…」

悠はコーヒーを飲み干すとぼそりと呟いた。

## Chapter 8

7月7日、夜。

夕方まで降り続いた雨は嘘の様にやみ、空を支配していた雲はどこかへとかき消されていた。

夜空には無数の星で出来上がった川が横たわっている。

天の川と少し欠けた満月で辺りはいつもより明るい。

蒼龍邸の前のテラス。

飾り立てられた笹の周りにはテーブルセットとバーベキュー用のコンロ、ビール等の飲み物が入った大きなアイスクーラーが設置されている。辺りには肉や野菜の焼ける匂いと煙が充満している。

翔・旬・悠・竜也・洋介はそれぞれ色違いの浴衣に着替えている。

「おお！すげえ〜！すげえ〜！」

先程からずっと空を仰ぎ洋介は同じ感嘆の言葉を繰り返している。

主語がない為、何を凄いと言っているのかがよく分からない。

「確かに晴れたな」

悠は焼けたばかりの肉を頬張っていたが、洋介と同じ様に空を見上げる。

「綺麗だねえ」

「そうだな」

旬と竜也も見上げる。

「神威は？まだなの？」旬が翔を振り向き尋ねた。

「それそろ来られると思いますよ」

「楽しみだね」

旬は意味ありげな笑みを翔に向ける。

「ねえねえ？神威はまだあ？」

洋介が缶ビールを片手に翔にまわり付く。

翔は虫をはらう素振りをしながら答える。

「もうすぐだ」

「そういえば…翔の短冊は？みんな、提出して笹にぶら下げたんだよ？」

翔は微かに俯いたがすぐに顔を上げる。

「短冊をなくした。第一、私には叶えてほしい願いはない」

「なんだよ、それ？一人だけズルいよ！ちゃんと書いてよ」

ポケットから予備の短冊を取り出し翔に押しつける。

「必要ない」

単語で答えるが洋介は引き下がらない。

「だゝめ！ほらあゝ」

「いい加減、しつこいぞ」

語尾を強くして睨む。

「洋介、やめる。そんなのは無理に書くモノじゃないだろう？」

竜也の言葉に洋介は頬を膨らませる。

「あ、神威…」

旬の言葉に全員が振り向く。

目線の先に神威が芝生の上をこちらに向かい歩いてくる。

皆は言葉<sup>みな</sup>を失い神威を見つめている。

「どうしたんだ？」

辿り着いた神威が皆を見回し不思議そうな顔をする。

「いや…久しぶりに浴衣…」

旬が口籠もる。

「綺麗だよ！神威！久しぶりに浴衣姿、見たけど！綺麗だよ！織姫ちゃんみたい！」

洋介が旬の代弁をする。

確かに浴衣姿の神威は美しかった。白地に何匹かの小さな黒い蝶が遠慮がちに飛んでいる。

薔薇の刺繍が施された濃紺の帯が白を更に引き立てる。

長い黒髪は後ろですつきりとまとめられている為、頭あたまになった細い首筋が襟から剥き出しになっている。体を纏う浴衣の白に月の光が反射し、まるで全身から光を放っている様に見える。

神威は気恥ずかしさから、一斉に向けられた視線を避ける様に笹に近付いていく。

目の前にぶら下がった短冊を手に取り読んでいる。

それは竜也が書いたモノ。短冊には『洋介の頭がもつともつと良くなる様に！』と几帳面な字で書かれていた。

「その通りだな」

くすりと笑う。

次に少し上にある短冊を見る。

『全員で仲良く、平和に歳を取っていきます様に』

悠の達筆で大きな文字が短冊いっぱいに広がっている。

「そうなれば幸せだな」

今度はその隣にある短冊に視線を動かす。

『神威がもつと笑ってください様に。』

丁寧な文字の短冊は旬のモノだ。

神威はそれに関しては何もコメントせずに皆を振り返る。

「翔と洋介のはどこにあるんだ？」

男衆は今だに固まったままだである。

神威は苦笑しながらもう一度問い掛ける。

「翔と洋介の短冊はどこにあるんだ？」

その声に洋介が反応する。神威に走り寄ると笹の天辺を指差す。

「俺のあそこだよ！」

あまりに高過ぎて短冊の文字が読めない。

「ずいぶん高い所にしたな」

「だってさ。高い所の方が願いが叶う確立が高そうじゃん？」

洋介が自慢気に胸を張る。

「そういうモノか？」

「そういうモノだよ！」

更に胸を張る。

「何て書いたんだ？」

洋介は少し戸惑いを見せたがすぐに真顔になり答える。

「宇宙一、可愛いお嫁さんをください！あと…琵琶湖サイズのプリンを食べたい」

神威は頭を抱えるマネをする。

「まあ、お前らしいな。良い願いだ」

自然と語尾に笑いが含まれてしまう。

「ひどい！神威、馬鹿にしてない？」

「してないさ。心からそう思っている」

「嘘だあゝ？絶対に馬鹿にしてるよ！」

洋介が再び頬を膨らませる。

神威はそんな洋介から翔に視線を移す。

「翔のはどこだ？書かなかったのか？」

慌ててぎこちなく頷く翔。

「俺には叶えてほしい願いはない！とか言って短冊捨てちゃったんだよ」

神威の後ろに隠れた洋介が代返する。

「捨てたんじゃなくて、なくしたって言ってただろ？」

悠が訂正する。

神威は

「本当になくしたんだろう」

と言いながら、テーブルセットに向き直る。我に返った翔が急いで椅子を引く。

「ありがとう」

微笑みを浮かべ引かれた椅子に座る。

翔・悠・竜也も同じく席に着く。

旬はアイスクーラーからビールを取出し神威に手渡した。

受け取ったビールの栓を開けるとプシュッと気持ちの良い音がする。

「神威の短冊は？」

前に座る悠が尋ねる。

神威はビールを一口飲むと首を振った。

「私もなくしてしまった」

その答えを聞いて洋介が

「なら……」

と先程の様に予備の短冊と筆ペンを取出す。

神威は黙ったまま出された物を見つめている。

「神威は書いてよ！願い事！ね？早く早く！」

洋介が神威を急かす。

「いいじゃないか、無理に書かなくとも」

翔が洋介を制する。

「そうだよ」

旬が皿に肉や野菜を取り分けながら同意する。

「なんだよ俺、神威の願い事が知りたい！みんなだって同じくせに！」

子供の様な真直ぐな眼を向けられる。

神威は観念したのか筆ペンを手に取る。

スラスラと何かを書いていく。

「ほら。これが私の願いだ」

洋介の目の前に短冊を突き出す。

全員が注目する。

短冊には大きく『家内安全。無病息災。』とだけ書かれている。

「お前のより高い所に吊しておけ」

きよとんとした洋介の手に短冊を握らせる。

「なんだよ、これ？！」

「願い事だ」

洋介は納得できないと反論する。

「ウソー！全然、色気ない！」



「願い事に色気もあるか。良いからさつさと吊せ。早くしないと…」  
洋介の浴衣の襟を持ち上げると顔を近付ける。

「お前を吊すぞ」

「チエツ！せつかく織姫ちゃんみたいに綺麗なのに…怖いのは変わってないよ…」

ブツブツ言いながら脚立を用意する洋介を全員が微笑ましく眺めていた。

「それにしても綺麗だね」

一通り食べ終えた後、旬がビールを飲みながら空を見る。

「神威様の言う通り、本当に晴れましたね」

翔が神威にビールを渡す。

「当たり前だよ！神威の言う事に間違えないもん！ね？」

赤い洋介の顔が神威に向く。

「おい、飲み過ぎだぞ」

竜也が握られたビールを奪おうとするが洋介は抵抗する。

「大丈夫だって！あ！そうだ！」

突然、思い出した様に邸内に走っていく。

「あいつは素面でも酔っても変わらないな」

悠が洋介の後ろ姿にぼやく。

「また何かやるつもりだろ？」

「でしようね」

神威と翔が顔を見合わせる。

しばらくして両手に大きな紙袋を二つ抱えた洋介がテラスに戻ってくる。

「おーい！誰か手伝ってよ」

紙袋で顔が隠れてしまっている洋介が情けない声をあげる。

「しかたないな」

竜也は歩み寄ると紙袋を一つ受け取る。

中にはたくさんのお家庭用・打ち上げ花火が詰め込まれている。

「締めはやっぱり花火でしよう？」

洋介が空いた片手でピースサインを作る。

「すげえな。こんなはどうしたんだよ？」

袋を覗き込んで悠が感嘆の声を上げる。

「今日の為に用意したんだよ」

袋を置いた洋介が今度は両手でピースする。

旬も袋を覗き込んでいる。

「さ、やるやる！俺と悠が火付け役ね」

「洋介、たまには気の利いた事するじゃん」

洋介と悠が花火を並べていく。

「たまには、じゃないよ〜だ！」

「たまには、だ！」

二人は言い争いながらも一通り一列に花火を並び終え、ジッポライターの炎を確認する。

「じゃあ、いくよ〜」

左右から一つつつ花火が点火されていく。

「たまや〜」

洋介の声と花火の爆音がこだまする。

夜空に勢い良く放たれた炎は様々な色を持った様々な形に変化する。

「おお〜たまや〜」

花火が開くのに合わせ、旬も掛け声をかける。

「たまや〜」

竜也や悠も加わり4人で合唱する。

「綺麗ですね」

隣の神威に翔は声をかける。

だが、神威は答えずに身動き一つせず空を見上げている。

瞬きを忘れた瞳に天空を舞う花が反射している。

「神威様？」

改めて呼び掛けるが神威は動かない。

細い肩に手を掛けようとした瞬間：

ゴオン！

花火の爆音とは異なる音が辺りに響き渡る。

ゴオン！

強い振動が大地を襲う。

「……？！なんだ？！」

突然の轟音と振動に感覚を奪われる。

ゴオン！ゴオン！

バーベキューのコンロが激しく転倒する。

慌てて竜也がアイスクーラーの氷をコンロに投げ込む。

「神威！危険です！伏せて下さい！」

翔が神威に向かって叫ぶ。

「神威！危ないよ！」

「神威！どうしたんだ！？」

揺れる大地に足を捕られ蹲っていた洋介と悠が続けて叫ぶ。

「神威！神威！しっかりして！」

旬が必死に神威に近付こうとするが、振動の激しさで前に進めない。

「神威様！」

翔は神威に手を伸ばす。

浴衣の裾を引き寄せ、庇う様にして覆い被さる。

腕の中の神威は天空の一点を凝視したまま動かない。

驚愕に見開かれた瞳。

何を見ているのかと見上げると、そこには月を飲み込まんと醜く歪んだ夜空が眼に入った。

「…！竜也！」

翔の声に竜也が天を仰ぐ。

「何だ、あれは！？」

他の三人も同時に空を見る。

「空が…空が！」

洋介は慌てふためき悠の腕を掴んだ。

「……………！」

まさに月が歪みに飲み込まれる寸前、白の光が天を貫いた。

光の先を辿ると、翔の腕から立ち上がり左手を高く上げた神威がいる。

「オン・バザラ・ハンドマ・タクマ・カン…」

神威の唇から静かに真言が紡ぎ出される。

「オン・バザラ・ハンドマ・タクマ・カン！」

左手に着けられた白金製の腕輪から放たれた白の光が声とともに輝きを増す。

光は逆に歪みを飲み込んでいく。

次第に歪みは消え、大地を襲っていた振動も激しさを失っていった。

「神威様！」

辺りが静かになったと同時に神威が倒れ込む。

咄嗟に翔が体を受け止める。

旬達も傍に駆け寄り顔を覗き込む。

全身には大量の汗をかいており、白の浴衣越しに鼓動が伝わってくる。

血の気の引いた顔。

荒い呼吸を繰り返しながら、瞳がゆっくりと焦点を取り戻し始める。

「神威様？」

翔の声に反応して唇が動く。

「結界が…封印が…」

一同が唇の動きを注視する。

神威の左手が再び宙に向かつて伸ばされる。

「一つ目の…封印…『土』が…」

やがて完全に意識が自我を取り戻す。それと共に瞳が驚きと憂いに支配されていく。

「『土』の封印が破られた」

はつきりとした口調で周りに集まる全員に伝える。

「……！！」

全員の顔に驚愕が浮かぶ。

神威は伸ばした指の隙間から何事もなかったかの様に輝く月を見つめ呟いた。

「全てが…停まっていた時間が…今、再び動き出したんだ…」

翔と旬だけはその呟きの意味を察知した。

顔に苦渋を浮かべ、神威と同じ様に月を見上げた。

## Chapter 9

静かな深緑の丘に貴方と私は佇んでいる。  
辺りを照らす優しく柔らかな日差し。

『もし、永遠の時間を手に入れられたなら…』

穏やかに吹く風が貴方の澄んだ声を私の耳へと運ぶ。

『もし、永遠の命を手に入れられたなら…』

振り向いた貴方が微笑む。

『世界の終わりを…君と…』

貴方は手を差し伸べる。

私は貴方に微笑み返し、差し出された手を握る。

『世界の終わりを、君と、この眼で見届けたい…』

抱き締められた暖かな感触が私の全身を包み込む。

7月8日、早朝。

神威・翔・旬・悠は自宅から車で30分ほどの距離にある場所に来ていた。

かくつち  
隠槌神社

代々、悠の家である東条家が管理している。

表向きは神社だが、といつても神を祀っているわけではない。実際は遠い古に張られた結界を護る為に造られたものだ。

火・水・土・風・金属。

この世界を司る5つの要素。

真神の初代当主はまだ力の不安定だった世界を護る為、それらの力を母体とし霊力の強い土地にそれぞれ『5つの結界』を張った。

『5つの結界』は互いに支え合い、この世の均衡を保つ。

そして、異質や邪悪な力による人災等から世界や人々を護る。

それが『5つの結界』の役目。

結界の力は今だに現存し、真神家・桜塚家・如月家・東条家により管理されている。

神社を前にし、4人は言葉を失い茫然と立ち尽くした。

入口にあったはずの茶の石鳥居は粉々に砕け、辺り一面に散らばっている。

その向こう側には無残に全壊した社。

境内の木々は落雷が直撃したかの様に全て縦半分に折れ倒れている。地面には社を中心に四方に広がる裂け目。

昨夜の地震は激しい揺れとは裏腹にほとんど被害は出ていない。

唯一、この隠槌神社を除いては…

「神威様…」

翔が隣に立つ神威を見る。

神威は険しい眼で倒壊した社を見つめている。「…嘘、だろ…？」  
少し前に居た悠が絞りだすように呟き、神威を振り向く。

「まさか…本当に結界が…」

「破られたんだ…」

神威はそう言うのと社に向かって歩きだす。

3人は折れた木々を避けながら後を追う。

社の直前で神威がふと足を止めた。

「どうしたの？」

旬が首を傾げ問い掛ける。

「動くな」

「…？」

「小賢しい真似をしおって…」

神威は苦々しく唇を噛んだ。

意味が分からず、近づこうとする3人を神威が右手で制す。

すると突然、地面の裂け目から黒の炎が立ち上る。

炎は無数の蛇の姿を形作り、頭をもたげると真つすぐ4人に襲い掛かってくる。

咄嗟に力で防御壁を張る翔・旬・悠。

だが、神威は無防備のまままで立っている。

「神威様！」

翔が神威の前に防御壁を張り、傍に駆け寄ろうとする。

「オン・バザラ・タマク・カン・ヤキシヤ・ウン」

翔が動くと同時に神威の真言が境内に響く。

「消え失せろ」

左手に拳を握り、前へと突き出す。

拳の先から放たれた白の光が無数の球体となり、翔の張った防御壁を突き抜ける。

そのまま疾いスピードで蛇に向かって飛んでいく。

それぞれの球体は蛇に辿り着くと全てを飲み込み『バン』と音を立て弾け空中に霧散した。

「神威、今のは？」

旬は防御壁を解除すると神威に駆け寄る。

「畏だ。力のある者がここに踏み込めば術が発動するように仕込んでいたんだ」「一体、何者が…？」

翔が裂け目を注意深く覗き込む。

「さあな。社の中央が見たい。瓦礫を退けてくれ」



神威が崩れた社を指差す。

翔と旬は頷くと社に向かって両手を伸ばす。

「ナウマク・サンマング・ボダナン・マカキヤラヤ・ソワカ！」

二人の声が重なる。

差し出した手から橙の光が現れ、三角錐の形を作り社全体を包み込んだ。

散乱した瓦礫が三角錐の上部に引き付けられていく。

社を形成していた物質が全て頂上に集まったのを確認すると、二人は互いに顔を見合わせ頷いた。

「オン・バサラ・ドースチ・マツト！」

声と共に三角錐は瓦礫を抱え込んだまま小さくなり、二人の前に着地した。

「悠、封印を解除しろ」

神威は後ろで茫然としている悠に声をかける。

悠はヨロヨロと社の中央部分に歩み寄り地面に向かい手をかざす。

「バザラ・ヤキシヤ・ナウボ・ソトテイ」

手から茶の光が地面に向かい放たれる。

それはゆっくりと地面を這い円形の文様を浮かび上がらせた。

悠は文様の中心に駆け寄る。

「…土の…結界鏡が…」

そこには宝飾が施され、中央に茶の石が埋め込まれた鏡があった。

神威達も鏡を覗き込む。

皆の眼に写ったのは石ごと真つ二つに別れた鏡。

「馬鹿な…社内に侵入した上、結界鏡が破壊されるなんてよ…」

悠は鏡の前に座り込んだ。

「俺の力が足りなかったせいだ…」

力一杯、拳を地面に叩きつける。

神威は悠の肩に手を置くと静かに言った。

「お前のせいではない。おそらく相手は以前から準備を整えいたのだろ。それに…」

一つため息を吐く。

「かなり力の強い者だ。おそらく土属性の力を持っている」  
悠は神威を見上げる。

「悠、完全に結界は破壊されている。しかし、このままにはおけない。せめて、少しでもいい。結界を修復してくれ」

悠は意を決し立ち上がる。

「時間は多少かかるがやる。翔・旬、手伝ってくれ」

そう言うと悠と旬は結界再生の準備を始める。

神威は動き出した三人を見届けると三角錐に歩み寄った。

「まさか…あの時に…終わってはいなかったのか…？」

三角錐の中を浮遊する瓦礫を見つめながら、再び唇を噛み締めた。

## Chapter 10

その湖は深緑に囲まれていた。

辺りからは鳥の囀りが聞こえる。

眩しく暖かな光が水面に反射している。

『愛しているよ…』

湖畔。

目の前には白のロープを纏った男の後ろ姿がある。

『愛しているよ…この世界に在る全てよりも…』

揃いの白のロープを纏った私は微笑む。

愛おしい想いの全てを込めて、男を後ろから抱き締める。

私の腕に男が触れる。

『愛しているよ…この世界の全てを犠牲にしても構わない…』

先ほどまでとは違う強い声と共に、触れた手に力が込められる。

不意に襲われる刹那。

『……？』

次の瞬間、抱き締めた腕は身体ごと無理矢理に引き剥がされる。

辺りに満ちていた光は突然、闇に掻き消された。

叫びにも似た奇声をあげながら一斉に飛び立つ鳥達。

私は困惑を浮かべ男を見る。

『けれど…今のこの世界では私の想いは叶えられない…』

男が私に振り向いた。

だが、顔は闇に覆われ見えない。

『だから…私は眠る…』

両手を広げる。

ゆっくりと湖に向かって倒れていく男。

私は瞬きも出来ずにただ見つめている。

『その時が訪れるまで…』

男の身体が水飛沫をあげながら水面に吸い込まれる。

私は男の落ちた場所に駆け寄り水面を覗き込む。

両手を広げたままの姿で沈んでいく男。

手を伸ばし白のローブを掴もうと水面に触れた瞬間。刺すような冷

たい感触が指から全身を伝う。

水面が一瞬にして厚い氷に変わる。

顔が分からない筈なのに、何故か私は男が微笑んでいると感じた。

同時に覚えた違和感。

私の姿が白のローブから黒のスーツに変わる。

『…貴方は…誰…？』

男は答える事無く湖底に沈み、やがて姿を消していく。

氷に触れた掌に暖かな私の涙が落ちる。

無意識に流れた涙が困惑をもたらす。

ふと顔を上げると辺りの景色は豹変していた。

深緑は真つ白な氷と雪に変わり、静寂に支配されていた。  
白の世界で私はいつまでも水面を見つめていた。

『貴方は…一体…誰なの…？』

返る事のない問い掛けを繰り返しながら…

神威は蒼龍邸のリビングのソファで目を覚ました。

昨日、着ていた黒のノースリーブのパンツスーツのまま。

その上から薄手のブランケットが掛けられている。

疲れていたせいか、帰宅後にそのまま眠ってしまったようだ。

同じく着けたままの腕時計を見ると、時刻はPM2:00を指している。

とても哀しい夢を見た気がする。

胸に残る鈍い痛み。

だが、内容を思い出す事が出来ない。

「目が覚めた？」

夢の記憶を探る作業に夢中になってしまい、匂が入ってきた事に気が付かなかった。

手にはティーカップセットと料理をのせた大きなトレイを持っている。

そのままソファに近付いてくる。

神威はそれをぼんやりと見つめていた。

ふと、その姿に違う人影が重なる。

黒の革の上下にエンジのマント。

茶の長髪を持った細身の青年が陽炎の様に揺らめいている。

「どうしたの？」

旬がソファアの前のテーブルにトレイを置く。  
不思議そうな顔で神威に問い掛ける。

重なった人影は旬の声に姿を消してしまった。

「いや…なんでもない…」

曖昧に返事をする。

「そう。紅茶で良い？もう昼だし。昼食、食べるよね？」

「ああ…」

ティーカップセットや料理を並べていた旬が心配そうに神威を覗き込む。

「大丈夫？」

「少し疲れているが、大丈夫だ」

今度は微笑みながら返事をする。

旬は安心したように頷くと神威の隣に座った。

黄金色の紅茶をティーカップに注ぐと神威に手渡す。

受け取ったティーカップからは白い湯気が立ち上る。

「…！」

カップに触れた瞬間。

手に伝わる異様な冷たさに激しく違和感を感じた。

「神威？」

カップを持ち上げて止まったままの神威を旬が怪訝そうに見ている。

旬の声に異様な冷たい感触が通常な熱い感触に変化する。

我に振り返り旬を見る。

「いや、なんでもない」

「神威、今日2回目だよ」

くすくすと笑い出す旬に神威が戸惑う。

「いや、なんでもないが2回目」

悪戯っぽくウインクする。

「ああ…」

「ああ…も2回目だね」

細く切られたパンを取り分けながら旬がまた笑う。

「悪かったな」

カップを置き、不貞腐れたように煙草に火を点ける。

紫煙が宙を漂う。

「神威ったら。いじけない、いじけない」

灰皿を手元に寄せながら旬を睨む。

「早く食べなつて」

神威は深く煙を吸い込むと灰皿に煙草を押しつけた。

何故か手が微かに震えている。

今度は動揺が襲う。

だが、それを旬に悟られまいとバターの塗られたパンを手に取り無理に口に運ぶ。

「翔達はどうしたんだ？」

旬は神威の変化に全く気付かず、困ったように首を傾げた。

「皆、部屋に引き籠もったままだよ」

「そうか…」

神威が深い溜息をつく。

「仕方ないよ。こんな状況になったんだから。皆、予期せぬ事態で感じたよ」

サラダを口にしようとしていた旬も溜息をついた。

「予期せぬ事態か…」

神威は再び煙草に火を点ける。

「神威、何かあったの？」

真っすぐに真剣な眼差しが向けられる。

「最近、変だよ？深く考え込んでるって感じに見えるよ」

神威は前を向いたまま紫煙を吐き出す。

「言えないような事？」

旬が神威を覗き込む。

「なあ、旬。こうして二人きりで食事をするのは久しぶりだな……」

あからさまに話題をそらす。

旬の表情が陰しく変わる。

「神威はいつもそうだね。肝心な事は話さない。全部を一人で背負い込む」

強く神威の腕を掴む。

「こつちを向きなよ」

珍しく強い口調に驚いた神威が旬を見る。

「大変な事が起ころうとしてる事くらい分かるよ。だからこそ、皆が心配してる。また神威が皆の代わりに傷つくんじゃないかって」

一息の間を置き、旬が続ける。

「そんなに僕達は頼りない？信用できない？」

神威は旬の顔を無言で見つめていた。

「答えてよ、神威」

掴んだ腕に更に力を込める。

神威の腕に痛みが走る。

「……私は……」

答えを言い掛けた時。

ぼやけた白の世界の映像が幻覚のように、神威の脳裏に浮かび上がる。

「……………」

途端に沸き上がる動揺、不安、恐怖。

動かない現実の身体。

『何か』が神威の動きを止めている。

その『何か』が分からない。



神威は沸き上がる幾つもの感情を必死に押さえ、幻覚に意識を集中させる。

白の世界は濃い霧に包まれたようにぼやけ、ハッキリしない。

だが、そこには確実に『何か』が存在する。

更に強く意識を集中させ、探索する。

白の世界と、そこにある『何か』を。

しばらくして、神威の探索に呼応したかのように霧が晴れていく。

クリアになる映像。

それを目にした瞬間。

今度は懐かしさを覚えた。

雪に包まれた森。

厚い氷に覆われた湖。

畔に立つ自分。

静寂に支配された白の世界。

以前に目にした風景。

そして、自分は確かにこの場所に居た。

…いつ？

…そこはどこ？

…誰かと？

…誰と？

自問自答を繰り返す。

思い出そうと記憶を探るが『何か』に遮られ思い出せない。

『愛しているよ…』

静寂の中に声が小さく響いた。

周りを見渡す。

だが、誰もいない。

『愛しているよ…』

再び発せられた声は後方から聞こえる。

「！」

振り返った神威は目を見開いた。

そこには、全身を厚い氷と雪に覆われた人形のような物が立っている。

顔は白の仮面が着けられているせいで分からない。

『愛しているよ…』

声はこの人形から発せられている。

神威は無意識に人形の顔の部分に触れた。

「……！！」

冷たさを感じたのと同時に激しい頭痛に襲われる。

静寂を破る耳障りなノイズと共に白の世界は形を歪め消えていく。

「神威！神威！」

耳元で匂が叫んでいるのが聞こえる。

意識は現実に戻り、身体の内は完全に戻っていた。

「神威！どうしたんだ！」

匂が慌てながら神威の身体を揺さ振っている。

「…旬。今、何があった？私は…」

神威が旬を真つすぐ見つめる。

「私は…今、何をしてた？」

旬の眼が微かに見開かれる。

揺さ振っていた手を引つ込める。

「分からないの？」

言いながら、テーブルの上にある神威のカップを指差す。

視線を向けると淡青のカップは無残にも粉々に砕け、中の紅茶が白のテーブルクロスを茶に染めている。

「…私が…やったのか？」

旬がこくりと頷く。

「話してる途中で神威の動きが止まって…眼を見開いて…そしたら

…」

神威の腕に旬が触れる。

握り締められていた部分にまだ鈍い痛みが残っている。

「急に身体が冷たくなって…僕、驚いてさ。気が付かせようとして神威の身体を揺さ振って…」

「…」

旬の次の言葉を待つ。

「そしたら…変なノイズが直接、頭の中に響いて…カップが内側から砕け散ったんだ」

ふと、旬の左の掌を見ると幾つかの赤い線が走っている。

飛んだカップの破片で怪我をしたらしい。

神威はその掌を取ると、左手をかざす。

淡い光が生まれる。

傷は光に包まれ治癒していく。

「すまなかつたな…また私のせいで怪我をさせてしまった」

神威は掌を離すと力なく笑う。

煙草に火を点け、深く吸い込んだ。

旬は怪我の治癒した掌を黙って見ている。

「やっぱり…何か隠しているんだね」

俯いたまま、旬が問い掛ける。

「どうして、何も言ってくれないの？」

神威は相変わらず答えようとしない。

「そんなに僕は頼りない？信用できない？答えてよ！」

旬は顔を上げ神威を睨む。

煙草を灰皿に押しつけ、旬に振り向く。

「これは私の問題だ」

真つすぐ旬の眼を見返す。

「信用などの問題ではない。これは私だけの、個人の、問題だ」

決意したように一息つくと、ゆっくりと次の言葉が続ける。

「お前達には関係ない」

言い終えると部屋を出る為、立ち上がる。

「待ちなよ。答えになつてない」

神威の腕を旬が掴み、強い視線で見上げる。

「僕の質問の答えになつてない。ちゃんと答えてよ！」

「お前達を信用するかしないかの問題ではないんだ。これは私の問題だ。だから、自分の手でカタをつけなければならない」

掴まれた腕を引き離し、出口に向かう。

「なら…僕達は何の為に神威の傍にいる？」

背中に旬の力ない小さな声が突き刺さる。

立ち止まり、その声に耳を澄ます。

「神威にとつて僕は…何なんだよ…？」

「お前達は…」

込み上げる想いを押さえ込み静かに答える。

「私にとって、他に変わりのない大切な者達だ。だから…」

「だから？」

旬も立ち上がり、神威の背中に問い掛ける。

「だから、何も言ってくれないの？心配を掛けない為に？」

神威は微笑んだ。

「食事はまともにも出来なかったが…今日は久しぶりに二人きりで居れて良かった」

出口に向かう。

「ありがとう。そして…すまない、旬」

そのまま振り返らずリビングを後にする。

「神威、僕は…」

引き止めることも出来ず、消えた神威の後ろ姿を見つめ深い溜息をつく。

「僕は…貴方を…」

治癒した左の掌を右手で包み込む。

「何があっても、守り抜くよ…」

強く噛み締めた唇。

口の中に錆びた鉄の味が広がる。

「例え、貴方が何に変わろうとも…」

虚ろな眼差しで神威の消えた出口を見る。

旬の背後で割れたカップの破片がカチャリと小さな音を立てた。

## Chapter 11

人間とは。

あまりに愚かで下らない生き物だ。

他の生き物より少しだけ英知を持ち誕生したからといって…

まるで自分達が神であるかの如く、この地球を支配<sup>ほし</sup>している。

それが当たり前かのように。

自分達が地上で最も醜悪で低俗な種族だと気付きもせずに。

空、海、山、大地、空気、植物、動物…

この世界に存在する総て。

それらは与えられたモノに過ぎないというのに。

その事を忘れ、総ては自分達の産み出した『所有物』なのだと大きな勘違いをしている。

そして…

愚かで下らない人間達の作った『世界』もまた…

とても、愚かで下らない。

あまりにも醜悪で低俗だ。

その様を観て、真の創造主は心底から嘆き悲しんでいる。

人間という種族に英知を与えてしまった事に、深い後悔の念を抱いている。

『こんな筈ではなかった』

『こんな世界になってしまつとは』と…

だから今こそ…

正さなければならない。

過ちを犯したまま、進む時計の針を…

狂ったまま廻る齒車を…

君を救う為にも…

君がいつでも幸せに、笑えっていられる様に…

再び新しく美しい世界と未来を創り出す為に…

古く醜い世界と過去を破壊しよう…

粉々に…

跡形もなく…

二度と再生出来ぬ様に。

都心にそびえ立つ高層ビル。

都会特有の厚い灰雲の隙間から微かな太陽光がガラス張りの外観を照らす。

ビル内には様々な企業が入っており、正面玄関からは絶え間なく人々が入り出している。

一台の黒いベンツが正面玄関に停車する。

紺の制服姿の運転手が降りてきて急いで後部座席のドアを開けた。車内から二人の男女が現れる。

黒髪、白い肌、整った顔立ち。

黒いスーツを纏った高くすらりとした長身。

穏やかな物腰で車から先に降りた男は真つすぐにロビーに向かう。

後から降りた女は立ち止まり、うんざりとした顔で空を見上げる。

緩いウェーブのかかった長い赤茶色の髪に派手に化粧を施したハッキリとした顔立ち。

体のラインを強調したシルバーのワンピース。  
細い足を飾るシルバーのピンヒール。

「嫌な空ね」

女は運転手を振り返りニヤリと笑う。

運転手は何も答えず運転席に乗り込むと走り去って行った。

「あいかわらず愛想が悪いヤツね」

女は不機嫌に呟くと男の後を追ってロビーに向かう。

「早くしろ」

ロビーの中央で男が振り返る。



「分かってるわよ。せつかちな男は女に嫌われるわよ」  
追い付いた女が男の腕に手を回した。

男は冷たい視線を女に向けその手を振り払う。

エレベーターホールに踵を返すと再び歩き出す。

「本当、どいつもこいつも。愛想が悪いヤツばかりね」

女はますます不機嫌に眉間に皺を寄せた。

「ねえ？いつになったら私はあの子達に会えるのよ？」

先を行く男に問い掛ける。

男は無視し、エレベーターホールの隅にあるエレベーターに乗り込んだ。  
んだ。

小走りで女も乗り込む。

「ねえって？質問してるんだから答えなさいよ」

男はエレベーター内の操作盤にあるスロットにカードを入れる。

【指紋および網膜照合を開始します。操作盤のセンサーに右手を、  
カメラに右目を】

機械音のアナウンス通り、操作盤の画面に右手を押し付けカメラを  
右目で覗き込んだ。

青い光が男の右手と右目を照らす。

【認証を完了しました】

発せられた機械音と同時にエレベーターは地下に降りていく。

「無視するんじゃないわよ」

背を向けた男に女が尚も話し掛ける。

「いい加減にしろ。それは私が決める事じゃない」

男は前を向いたまま素っ気なく答えた。

「ああ、そう！」

女の声と同時にエレベーターが目的の階に到着しドアが開いた。

ドアの目前には白の空間が広がっていた。

白い金属の壁、白い金属の床。

エレベーターから真つすぐに続く短い廊下の先には銀色をした重い金属製の扉が見える。

銀色の扉の上部には左右に一台づつカメラが取り付けられ、こちらに近づく人間を監視していた。

それ以外には何もない、白の空間。

男は無言で廊下を進んでいく。

女も無言で後を追う。

二つの異なる足音だけが廊下に響き渡る。

扉の前に着くと男は再び横にある操作盤のスロットにカードを差し込む。

右手を画面に押し付け、右目でカメラを見る。

【認証を完了しました。ドアロックを解除します】

機械音のアナウンスが言い終えると、空気音と共に重い銀色の扉が開いていく。

室内はひんやりと冷たい空気に包まれていた。

全体的に広く、上下二層に別れた造りになっている。

扉からすぐの上階には、数台のモニター・パソコン・素人には分からない精密機械の数々が設置されていた。

上階は全体的に薄暗く、機械達が発する音と微かな光が空間を支配していた。

奥には下階に続く数段の階段がある。

階段を降りた下階は上階とは違って明るい。

壁伝いに設置された無数の燭台。

その全てに絶えず白い蠟燭が立てられ、大きな炎が揺らめいている。右側には黒革のソファースーツとオニキスで作られたテーブル。

左側には大きな黒い箱型の機械「スーパーコンピューター」が三台、壁添いに並べられている。

中央には球体をした巨大なガラスの水槽。

スーパーコンピューターから伸びる何本ものコードが球体に繋がっている。

そして、球体の何歩か手前には守るように球体全体に青い淡光のベールが張られていた。

そのせいで離れた所からは球体の中が何なのか分からない。

男と女は上階の機械達をすり抜け、階段を降りる。

二人の足音に気づき、背を向けてソファに座っていた白髪の老人が立ち上がった。

「おかえりなさいませ、拓海様」

老人は体を杖で支えながら深々と頭を下げる。

男 愛染 拓海 は老人に無言で一礼すると、球体の脇に設置された三台のモニターの前に立った。

「ただいま、お祖父様」

女が老人に抱きつく。

老人は困った顔をしながら女を優しく引き離した。

「響華、おとなしくしていたか？拓海様にご迷惑をお掛けしなかったか？」

今度は女 岬 響華 が困った顔をする。

「私が拓海に迷惑かけない訳ないでしょ？ま、いつも通り無視されただけ」

そう言いながら拓海の隣に並ぶ。

「それは申し訳ございませんでした、拓海様」

岬老人は二人の背後に歩み寄る。

「構いませんよ、いつもの事ですからね」

モニターをチェックしながら拓海は答えた。

「それよりも。我が主<sup>あるじ</sup>に変わりはありませんでしたか？」

岬老人が中央のモニターに触れると画面は何かの波型グラフを映し出した。

「1時間ほど前までは軽度の覚醒状態を保っておりまして。しかし

……」

今度は右側のモニターに触れる。

「つい先刻から再び活動の全てを停止されております」

「再び眠りにについている？」

拓海は腕を組み眉間に皺を寄せた。

岬老人は考え込む仕草を取る。

「おそらく先日的一件で力を使われてしまったせいでしょう。完全な覚醒まではまだしばらく時間が掛かるでしょう」

「ねえ？また眠っちゃったの？」

今まで黙って二人を見ていた響華がゆっくりと球体に近付いていく。青い淡光のベールを潜り、球体に触れる。

「早く目を覚まして……」

生暖かいガラスに頬を寄せる。

「ねえ？私の声、聞こえてる？」

愛しそうに撫でる。

「早く目を覚まして。そして…私をあの子達に会わせてよ」  
子供が何かをねだる様な目で球体を見上げる。

『…分かっている…』

響華の声に反応したのか、球体の中の温水がポコポコと泡を立てる。

「私の声、ちゃんと聞こえたの？」

『聞こえている…』

さらに答える様に水面に波が浮き立つ。

『…もうすぐだ…』

今にも消え入りそうな男の声が直接頭に響いてくる。

『…もうすぐ、お前も、私も、あの子達に会える…』

声は球体から発せられていた。

「早く。早く。早く。ちゃんと目を覚まして」

響華は両手でガラスを軽く叩きながら呟いた。

『…それまでは良い子にしている、響華…』

諭す口調の声。

「そろそろ離れろ、響華。我が主に負担を掛けるな」  
拓海が響華に厳しい言葉を投げる。

「聞いているのか？負担を掛ければ、完全な覚醒はまた遠くなるん

だ」

だが、響華はまるで拓海の声が届いていないのか。完全に無視している。

「早く。早く。早く…」

同じ言葉を呪文の様に繰り返している。

「…一刻も早く覚醒していただかないと困りますな」

岬老人が拓海の顔を覗き込む。

「確かに。しかし…誰よりも覚醒を望んでいらっしゃるのは我が主、御本人でしょう」

拓海が岬老人を振り返る。

「だからこそ、私達は覚醒の為に出来る限りの事を行う」

「その通りです」

岬老人は頷くと球体に近付いていく。

「響華。さあ、こっちにおいで」

球体に張りついたままの響華の肩を掴む。

響華は我に返り岬老人に目をやる。

「我が主も良い子にしていると仰っていただろう？さあ…」

小さく頷くとノロノロと立ち上がった。

差し出された岬老人の手を握り、並んで扉に向かう。

すでに待っていた拓海と合流し部屋を出ようとした瞬間、響華が球体を振り向いた。

「早く、目を覚まして…蒼一郎…」

扉が締まり人気をなくした部屋は静寂に包まれた。

『…ああ…』

声と共に球体を包む光のボールが大きく揺らめく。

歪んだ光の向こうにある球体には…

目を閉じたまま水中に漂う人の姿があった…

## Chapter 12

穏やかな風が吹いている。

神威は邸内の池の淵にある桜の大木にもたれ掛かっていた。  
ぼんやりと空を見上げる。

遙か高く広がる空は夕暮れ時のせい、紅に色付いている。

季節は11月。

夏の暑さがまるで嘘だったかの様に辺りを吹く風は少し冷たく心地が良かった。

神威は池を泳ぐ鯉に視線を移す。

「のん気だな…」

再び天を仰ぐと、今度はゆっくりと目を閉じた。

隠槌神社の事件から4ヶ月の月日が流れていた。

結界鏡が破壊されていた為、完全な修復は不可能だった。

だが放っておく訳にはいかず、簡易的に別の種類の結界を張り直す事にした。

しかし、土地自体が持つ力を制御しつつ力を引き出す以前の結界ほど強力なものではない。

敵が再び襲撃してくれば破るのは容易いだろう。

だが、あれ以来『今のところ』は何事もなく仮初めの平穏が続いている。

逆にその平穏が不気味に感じられた。

こちらが長きに渡り、命を懸けて守ってきた結界を破られた。  
いとも容易く、簡単に。

誰もが大きな悔しさと怒りを感じていた。



そして…

それと同じくらい、大きな疑念と不安。

『一体、誰が…？』

『一体、何の為に…？』

例え一つでも結界を壊せば、保たれていた均衡は崩れてしまう。

世界はバランスを失い、やがて確実に滅びに向かう。

だからこそ、自分達は命懸けで守ってきたのだ。

結界を破る程の力を持つ術者ならば、その事は十分に理解しているはず。

それでも結界を壊した。

「世界の滅びを望む者、か…」

神威は一人、呟いた。

瞼を閉じた視界が赤い。

夕日で赤いのか？

体を流れる血液で赤いのか？

ふと、そんなどうでも良い疑問が浮かぶ。

赤い血液。

「私の体にも赤い血が流れているんだ…」

何故そんな事を思うのか、自分でも分からない。

だが、不意に無意識の世界に思考が支配される。

落ちる無意識の世界の中、頭上高い場所にもう一人の私が現れる。

とても、冷静に。

とても、冷酷に。

私を見下ろしている。

『血を流すのは、贖罪のつもりか？』

漂う私に何の前触れもなく、もう一人の私が問い掛けてくる。

『痛みを味わえば、罪は消せると思っているのか？』

『容易く命を掛ければ、許されると思っているのか？』

冷たい笑みを浮かべ、もう一人の私は問い掛けを続ける。

『本当は何も感じていないのに、感じているフリをするのは…』

笑みを浮かべた唇が醜く歪む。

『【人間】で居たいからか？』

低く濁った声。

『お前は何も感じていない。

痛みも、悲しみも、苦しみも、怒りも、喜びも、楽しみも。

そして。罪悪も、愛情さえも』

全身の感覚が消える。

それを見計らったように鋭い無数の刃が全身を貫く。

『ほら？本当は痛みなど感じていないだろう？』

『何故、感情を持つフリをしている？』

問い掛けが続く。

傷口から流れているはずの血液の色も温度も感触も感じない。

『感情を待つ者が【人間】なのか？』

『【人間】のフリをする必要が何処にある？』

重なり響くもう一人の私の声。

『自分に正直になれ。

フリはもう止める』

抗えない。

流れ続ける血液。

曖昧になっていく意識。

『私を受け入れろ。

そうすれば、自由になれる』

『自由…?』

一つの単語に惹かれ、初めて頭上を見上げる。

『そうだ。自由だ』

関心を示した私にもう一人の私が満足そうに頷く。

『お前が何よりも望んでいる、真実の自由。  
お前が何よりも望んでいる、真実の世界』

もう一人の私が手を差し出す。

『さあ…【人間】のフリは止める』

『さあ…罪を。お前の背負う全てを。  
そちら側に置き捨て、こちら側に来い!』

強く響いた声に視界が赤く染まる。

あまりの視界の赤さに有意識が反応し始める。

鳴り響く警告の鐘。

『私は、許されるとは思っていない…』

『私は、自由など望んでいない…』

出し掛けていた手を引き戻す。

全身を貫いていた刃が掻き消える。

『逃げる場所など何処にもない。』

私は自分の罪から逃げはしない』

もう一人の私の顔が不快に歪む。

『私は【人間】だ！』

真っ直ぐに頭上を見据える。

『だから、こちら側で生きていく』

拳を握り締め、唇を噛む。

『愚かだな。そう自分に言い聞かせているだけだ！』

口に広がる血の味。

もう迷わない。

『私は…お前とは違う！』

強く叫んだ私の声にもう一人の私が姿を崩していく。

『強がっていられるのも今だけだ。』

もうすぐお前は私と一つになる』

醜く崩れるもう一人の私が不敵な笑みを浮かべる。

『お前が本当に望む【私】になる日が必ず来る…』

赤い世界ともう一人の私が消える。

『また、会える…』

有意識が完全に戻り、ゆつくりと目を開ける。

目の前には半分沈んだ太陽といつも通りの風景。

そして、桜の太木。

頭は靄がかかった様にぼんやりとしている。

『私は眠っていたのか？』

今のは、夢…？』

先程までのビジョンを思い返す。

「私は【人間】か…」

声に出して呟いてしまった言葉に自嘲な笑みが自然と浮かぶ。

「あなたはちゃんと人間ですよ」

突然、邸側から声がする。

声の方に目をやると翔が上着を手にして立っていた。

「いつまでそこにいらっしゃるんですか？」

独り言を聞かれた恥ずかしさから視線を池に移す。

「さあな…」

翔は上着を神威に差し出す。

「外にいて、しかもそんな薄着で居眠りをしていたら風邪をひきますよ」

「大丈夫さ。そこまで弱くはないさ」

神威は粗暴に上着を受け取ると肩に羽織る。

その様子を微笑みながら翔が見つめている。

「ずっとそこに立っているつもりか？」

素っ気なく翔に言う。

「それは隣に座れという事ですか？」

「好きにしろ」

翔は困った様に肩をすくめると神威の隣に腰を下ろす。

「あなたはちゃんと人間です」

先程の言葉をもう一度繰り返す。

「お前は私の独り言の意味まで分かるのか？」

池を見つめたまま、神威が不機嫌に問い掛ける。

「いいえ。私はあなたの独り言の意味など分かりません」

「なら……」

神威の言葉を翔が遮る。

「でも。あなたがちゃんと人間だという事は分かっています」

ハッキリとした口調に神威が振り向く。

真っ直ぐに自分を見つめる目。

「ふん。何だ？ちゃんと人間って、おかしくないか？」

「確かに。よく考えたら、そうですね」

「それに、改めて人間って言われるのも微妙だ」

「ええ、それも確かに」

「第一、何の事だか分からずに答えただろう？」

「はい、分らないですよ」

一瞬の間を置き、互いに笑う合う。

穏やかな風と穏やかに流れる時間。

神威が煙草を取り出し口にくわえる。

翔がライターを取り出し火を付ける。

深く吸い込んだ紫煙を空の向かい吐き出した。

「お前もどうだ？」

煙草の箱を翔に差し出す。

「いいえ、私は結構です」

「お前は私の前では吸わないからな」

翔が苦笑いを浮かべる。

「だが…たまには良いだろ？」

箱から1本取り出し翔に差し出す。

翔は観念し煙草を受け取り口に運ぶ。

火を付けようとしたライターを神威が奪う。

「ほら」

「ありがとうございます」

顔を傾け煙草に火を点す。

「火ぐらいでいちいち礼を言っな」

神威がライターを返す。

二人の吐き出す紫煙がゆらゆらと宙を舞う。

「穏やかだな」

沈んでいく太陽を眩しそうに見つめ神威が呟いた。

「こんな日が続いていけば、それは幸せな事なんだろうな…」

翔も空を見上げる。

「あなたがそう思うならば、それが幸せなんですよ」

夕日を浴びて二人の体が赤く染まる。

「本当は…許されたくて、仕方ないのかもしれないな…」

珍しく力ない声に驚いて翔が神威を見る。

「許される為に私は今を生きているのかもしれない」

ゆつくりと次の言葉を続ける。

「未来の為などではなく、過去の為だけに…」

私は…今を生きている」

煙草を地面に押し付ける。



「そう思う自分が、そんな自分が…  
どうしようもなく許せない」  
絶望に近い溜息を吐く。

「神威様…」

それまで黙って聞いていた翔が声を発する。

「人の一生は儚い。

だからこそ、いつか必ず来る終わりの時まで。

私が私であり続ける為に出来うる限りの事を全てやる」

突然の言葉に神威が困惑を見せる。

「遠い昔、迷っていた私にある人が言ってくれた言葉です」  
優しい笑みを神威に向ける。

「例えどんな生き方を選んでも。

あなたが自身を見失いさえしなければ、嫌でも未来は訪れます。

訪れたあなたの未来を変える事が出来るのは、あなただけなので  
すよ」

じつとこちらを見つめていた神威の頬を撫でる。

「そして…あなたがどんな未来を選んでも、変わらない確かな事が  
一つだけあります」

強い思いを込めて神威を見つめ返す。

「私はあなただけの味方です。

私は…あなたの傍を決して離れない」

二人の間に秋の風が舞う。

神威は頬に当てられた翔の手を握り締める。

「翔…私は…」

言い掛けて手を引き離す。

立ち上がり池の畔に歩み寄る。

「私は自分で自分を認められないような不様な生き方だけはしたくない。」

迷いに振り回されてしまうような弱い心もいらない」

神威の声に少しずつ力が戻る。

「自分が大切だと思えるモノをこの手で守る為に、もう二度と大切なモノを失わない為に…」

翔も立ち上がり神威の背後に歩み寄る。

「だから、その為に。」

誰よりも強くある為に。

今日まで多くのモノを犠牲にして生きてきた」

太陽が沈み闇が包み始めた空間に神威の静かで強い声だけが響く。

「その事に後悔はない。」

そして、これからもそうして生きていく」

翔に振り向く。

「だが…もし…」

今の私が…」

私でなくなってしまう日が来たら…」

黙って聞いていた翔の胸に飛び込む。  
神威の突然の行動に体の自由を奪われる。

感じる鼓動。

肌に伝わる暖かい体温。

神威の腕に力が込められる。

無意識に答えるように力を込めて抱きしめる。

「私が…私でなくなってしまう日が来たら…  
その時は…お前が、私を殺してくれ…」

神威の言葉があまりに唐突すぎて理解が出来ない。  
激しい困惑の視線を向ける。  
腕の中の神威は困ったように微笑んだ。

「お前の手で、私を、殺してくれ」

同じ言葉をはつきりと繰り返す。

「…神威様…？」

困惑を問い掛けにしようとした翔の言葉が遮られた。

神威の唇が翔の唇に重なる。

翔が驚きに目を見開く。

神威は閉じた目を開くと翔から離れる。

「約束だ、翔」

そのまま振り向かずに邸内に向かって歩き出す。

翔は神威の遠ざかる背中を何も言えずに見つめていた。

突然に抱きしめられ、突然にキスをされた。

ほんの一時の時間が永遠の様に感じられた。

何よりも…

神威の突然の申し出に、心が大きな音を立てざわめく。

幻のように消えた体温と鼓動。

口の中に広がる自分の物ではない、血の味。

「神威様…あなたは…」

込み上げてくる強い苦しみに押し潰されそうになる。

消えてしまった神威の背中に語り掛ける。

「あなたは…やはり、誰よりも、残酷な人だ…」

いつの間にか穏やかだった風は、冷たく鋭い刃のように変わっている。

唇を噛み締め、ただ佇む翔を桜の大木は静かに見下ろしていた…



## Chapter 13

翔、旬、竜也、洋介、悠。

五人は朱雀邸の最上階の翔の部屋に集合していた。

皆、無言で顔を突き合わせテーブルに付いている。  
集合から彼は30分ほど経過している。

「で？洋介、全員に召集を掛けて何の用件だ？」

沈黙に絶えられなくなったのか、竜也が洋介に声を掛ける。

「そうだよ。わざわざ呼び出しかけてさ」

旬も洋介に問う。

しかし、洋介は答えようとしない。

椅子に体育座りをして何かの雑誌を読んでいる。

「おい、洋介。シカトしてんじゃねえよ！」

悠が声を荒げる。

「用がないなら自分の部屋に帰れ」

翔が冷たい視線を洋介に向ける。

それでも洋介は雑誌から目を離さず無言のままだ。

「いい加減にしろ。俺は部屋に戻る」

竜也が立ち上がる。

「悪いけど、僕も失礼するよ」

「無駄な時間を取らせやがって」

旬と悠も席を立ち、三人が出口に向かおうとする。

「あのさ？何で皆、そんなに苛ついてんの？」

その時、洋介がやっと声を発した。

三人が洋介を振り返る。

「何言ってたんだ？お前が呼び出しといてシカトしてたからだろ？」

「そうだよ。洋介のせいだよ」

眉間に皺を寄せて旬と悠が答える。

「俺が言ってるのは今の事じゃないよ」

洋介が顔を上げる。

「なら、どういう意味だ？」

翔が洋介を見る。

読んでいたページを開いたまま雑誌をテーブルに伏せると、洋介は軽い溜息を吐いた。

「神威が苛ついてんのは昔からだから分かるけどさ。

いつも冷静な竜也や翔も。

いつも癒し系の旬も。

いつも暑苦しい悠も。

あれからずっと苛ついたまんま」

四人を交互に見渡す。

「何か格好悪いよ、皆」

言い放つとテーブルのコーヒーに手を伸ばした。

「ああ！？何ぬかしてんだよ！？」

悠が洋介の胸倉を掴み椅子から立たせようとする。

「本当の事だろ？」

その手を洋介が力任せに跳ね飛ばす。

弾みでカップが倒れ、黒いテーブルにコーヒーが広がる。

「何だと！？」

更に掴みかかろうとする悠を竜也が止めに入る。

「洋介、確かにお前の言う通りかもしれない。だが…」

「理由があるんだ、だろ？」

竜也の言葉を遮り洋介が続ける。

「隠槌神社の結界が壊された。

何か大きな事が起ころうとしてる。

神威はそれが何か分かってる。

だけど、俺達にはさっぱり分からない。

神威は何も話してくれない。

また、一人で抱え込もうとしている」

一息ついて再び四人を見渡す。

「神威の助けになりたいのに拒絶される。

何かしてやりたいのに何も出来ない。

いつも傍にいるのに頼ってくれない。

それがどうしようもなく悔しくて、どうしようもなく腹が立つ」

洋介の的確な言葉に凶星を指され、四人は黙ったまま俯いている。

「思ってる事は俺も同じだよ。

俺だって…

何も出来ない自分にも、

何も言ってくれない神威にも、

結界壊した奴にも、

もの凄く腹が立つよ…」

無意識に拳を握り締める。

「だけど…苛々してるだけじゃ何も変わんない。

もし今、敵が来たらどうすんの？

俺達がこんなバラバラじゃ、神威は守れない」

「分かったような口聞くんじゃねえよ」

悠が洋介を睨みつける。

「分かってるよ。少なくとも悠よりはね」

「ああ？お前、さっきから俺らに喧嘩売ってんのか!？」

「だったら何だよ？」

洋介も負けじと悠を睨んだ。

「今の悠には負けないよ。

竜也にも、翔にも、旬にも。

状況を見失って苛々してるだけの奴らにはね」

握った拳をテーブルに叩き付ける。

大きな音を立て倒れたカップが飛び跳ねる。

「かかってきなよ、悠。



相手になつてやる。

何なら四人まとめてでもいいよ」

挑発的な言葉を投げる。

「いいだろ。」

望み通り、買つてやるよ!」

向かい合う洋介と悠。

緊迫した空気が流れる。

「いい加減にしろ」

それまで黙っていた翔が二人を制する。

「洋介、お前の言う通りだ。」

だが私達にはどうしようもない」

洋介を見上げる。

「神威様は変わらない」

「何でそう思うの?」

翔は煙草に火を点け深く吸い込んだ。

「僕もそう思うな」

同じく黙つてやり取りを見ていた旬が椅子に腰掛ける。

「神威は変わらない。」

今までと同じ。

これからもね」

冷めてしまったコーヒーを口に運ぶ。

竜也は無言のまま元の席に戻る。

「だから。」

何でそう思うの?」

洋介は尚も食い下がる。

「何で、諦めてんの?」

「諦めてる訳じゃねえよ」

悠は椅子を引き寄せると、乱暴に座りテーブルに足を投げ出す。

「変わらないもんはどうしようもねえだろ?」

「それを諦めてるって言ってるんだよ。どうしようもない、何も出来ない。」

そうやって言い訳して、投げ出して、逃げてるだけじゃん。俺達が諦めて、投げ出して、逃げたら…」

再び握り締めた拳が強い力に白くなる。

「神威は…」

本当に一人になっちゃうんだよ…」

俯いた洋介の体が小刻みに震え出す。

「神威は…俺達がこんなに悩んでるのも知らないでさ。いつも俺達の事を守ろうとしてくれてる。それこそ命懸けで…」

馬鹿みたいに無理してさ…」

今まで抑えていた思いが溢れ出す。

「あんなに強くて格好良いのに…」

怖くて意地っ張りで…」

辛い時に辛いつて言えなくて、一人で抱え込んで…」

俺達に心配掛けない為に何にも言わずにいるのが良いんだって。

勝手に大きな勘違いしちゃってさ…」

堪えていた涙が溜まらず流れ出す。

「でも…」

あんなでも…」

神威は女の子なんだよ…」

女の子は男が守ってやんなきゃ駄目なんだよ…」

腕で涙を拭くと顔を上げる。

「俺達が神威を守ってやんなきゃ。」

誰が守るんだよ!」

強い洋介の声に四人も顔を上げる。

「洋介、泣くんじゃねえよ」

悠が無愛想に言う。

「泣いてない！」

「泣いてんだろぅが？」

「泣いてないってば！」

竜也が立ち上がり洋介の肩を優しく叩く。

「洋介、お前の言いたい事はよく分かった。

とにかく座れよ」

椅子を引き洋介を座らせる。

自分も隣に座ると洋介の顔を覗き込む。

「俺達だって同じ気持ちだ。

ただ大きな出来事があつたせいで、動揺して少し見失っただけだ。  
諦めたり、逃げたりしている訳じゃない」

「そうだよ。

俺らが神威を見捨てる訳ねえじゃん」

悠が洋介の頭を軽く小突く。

「時にはこんな風に迷ったり、苛々したりする事だってある。

それでも、僕達はずっと神威の傍にいる。

諦めないし、逃げない。

神威を一人になんかしない」

旬が決意を込めて優しく洋介を見る。

「神威の事、一番分かっているのは僕達だけだろ？」

「そうそう。

神威のわがままに着いていけんのも俺らだけだ」

悠が洋介の肩を抱いて笑う。

「へへ…

皆：ちゃんと分かってんじゃん」

鼻を嚙りながら洋介もつられて笑う。

「お前、泣き虫だな」

「悠は怒り虫だよ」

「うるせえよ、泣き虫洋介」

「何だよ！怒り虫悠！」

「まあまあ。」

二人とも、喧嘩は終わり。

「コーヒー、入れ直そうね」

旬が全員のカップをトレイに載せ始める。

「ほら、洋介。」

零したコーヒー拭いて」

「うん！」

洋介は素直に返事をするとうち上がる。

「お前は本当に切り替え早いな」

「切り替えが早いと言うより単純なだけだ。」

弟ながら関心するな」

「ふん。」

皆が複雑過ぎるんだよ！

だからズルズルになるんだ」

洋介がテーブルを吹きながら反論する。

「確かにそうだね。」

僕達も少しは洋介の単純さを見習わなくちゃね」

入れ直したコーヒーを全員に配っていた旬が横槍を入れる。

「でもさ、女の子はいんじゃないかね？」

「女の子って言うより女、だな」

「ていうか、アマゾネス？」

カップを受け取った悠と竜也が顔を見合わせ笑い出す。

「何言ってるんだよ！」

神威は女の子だよ！」

椅子に座りなおした洋介が頬を膨らませる。

「あんな強い女の子がいるかよ？」

あれはアマゾネスだって」

「そんな事ない！」

神威は体細いしさ。

それに……」

「それに？」

「それに何だ？」

口籠る洋介に悠と竜也が声を揃えて聞く。

「それに…」

「凄く、可愛いし…」

真っ赤になって俯く。

「お前さあ…」

「単純な上に」

「馬鹿だな」

悠と竜也は呆れた顔で洋介を見る。

「何だよ、もう！」

「皆だつてそう思つてるだろ?!」

必死に反論する。

「まあまあ、洋介。」

「熱くならないの」

旬が笑いを堪えて間に入る。

「でも、絶対に神威に女の子とか可愛いとか言っちゃ駄目だよ」  
「そうそう。」

面と向かつてそんな事言つた日には…」

「確実に、殺されるぞ」

旬、悠、竜也はわざと真剣な顔で洋介を見る。

「可愛いって言われて怒る女の子はいないよ！」

第一、神威はそんな事じゃ怒らないもん！」

「なら、言つて来いよ」

「怒つても俺は助けてやらんぞ」

「僕も」

「神威は優しいから怒んないよ！」

ね、翔？」

三人に苛められて溜まらず翔に助けを求める。

「…？翔？」

しかし、翔は四人のやり取りを聞いていなかったのか。無言で三本目の煙草の炎を見つめている。

「翔？どうかしたの？」

匂が翔の肩に触れる。

洋介達も不思議そうに翔を見つめている。

「翔？」

長くなつた灰が組んだ膝に落ちる。

「…何でもない…」

一言だけ発すると落ちた灰を掃う。

「でも…何だか変だよ。」

さつきから黙つたままだし…」

「何でもないと言っているだろう」

肩に置かれた匂の手を振り払うと、部屋を出て行く為に立ち上がる。

「俺、何か変な事言つた？」

翔の様子に洋介が心配そうに声を掛ける。

「お前は何も間違つたことは言っていない」

それだけ言つと翔は部屋を出て行つてしまった。

「翔、どうしちゃつたのかな？」

俺が怒らせちゃつたのかな？」

乱暴に閉められたドアを見つめ、不安気に洋介が呟く。

「お前のせいじゃないだろ？」

しかし、翔があんな態度を取るのは珍しいな」

「さあな。」

生理なんじゃないの？」

「悠、冗談になってないぞ」

「知らねえよ…」

竜也と悠が互いに首を傾げる。

旬はただドアを見つめていた。

部屋から出た翔は真っ直ぐに池に向かっていた。  
どうしようもない苛立ちで体が震える。

その苛立ちは洋介達に対してのモノではなかった。  
ましてや神威に対してのモノでもない。

洋介達の言葉に触発され過去の記憶が湧き上がってくる。

『私が神威を守る。』

決してあの子を一人にはしない』

低く澄んだ男の声が頭の中に響く。

『翔…』

神威を守るのはお前じゃない』

池に辿り着くと桜の大木に歩み寄る。

『神威が必要としているのは…』

先日の神威の唇の感触と体温が脳裏に蘇る。

『お前じゃない』

回想を消すように男の声が木霊する。

声を振り払うように力任せに拳を大木に叩きつけた。  
鈍い痛みが腕を伝う。

「私は…」

叩き付けた拳に更に力を込める。

「私はあなたのようにはない」

流れ出した血が大木を滑り落ちる。

「あなたのように、誓いを破ったりはしない」

大木の傍らに男の姿が薄っすらと陽炎のように浮かび上がった。  
翔はその陽炎を強く睨みつける。

「あなたにだけは神威様は渡さない」

嘲笑う様に陽炎が揺れる。

「決して負けない」

血に染まった拳を陽炎に向かって突き出す。

「蒼一郎！お前だけには！」

叫んだ声に陽炎は姿を消した。

翔は唇を噛み締め、完全に消えた陽炎をいつまでも睨み続けていた。

それと同じ時刻。



都心ビルの地下の球体の水槽で眠る男はゆっくりと目を開いた。

『翔…お前は何も変わらないな…』

暖かい水に漂う。

『変わらず…身の程知らずのままだ…  
嬉しいよ…』

いくつもの水泡が浮上する。

『もうすぐ、神威を迎えに行く…  
それまでは…神威の傍に居させてやる…』

蒼一郎は禍々しい笑みを浮かべると再び目を閉じた。



## Chapter 14 (前書き)

蒼一郎のまともな(?) 初登場です。

どうしても、神威&蒼一郎の関係の強さ・現在はポーカーフェイスな神威の苦悩などを表現したくて思いのままに書いてしまいました…

文章力がない上にダラダラ長くなって申し訳ないです…

最後まで読んでくださった方にとっても感謝感謝です！

ありがとうございます！！

## Chapter 14

真神家の本邸でもある白虎邸。

今現在は住人はおらず、特別な行事の時のみ使用される。毎日の様に通いの使用人達の手により掃除等の手入れはされているが、住人がいないせいか邸内は閑散としている。

真夜中。

神威は木製の廊下を一人、ある部屋に向かっていた。古い板張りが歩く度にギシギシと乾いた音を立てる。

八年前まで、神威は家族と共にこの白虎邸で暮らしていた。

厳しく笑わなかった実母、綾乃。

穏やかで優しくかった義父、宇月。

昔から平和主義だった、旬。

旬の実母で綾乃の実妹、静。

旬の実父、大河。

多くの住み込みの使用人達。

そして…

異父兄、蒼一郎…

廊下を歩きながら幾つもの部屋を通り過ぎていく。

あの頃は屋敷中に人が行き交い、いつも賑やかだった。

唯一、静かになるのは皆が寝静まった真夜中だけ。

短い沈黙と闇が支配する中、懐中電灯を片手に持った蒼一郎とよく邸内を歩き回った。

たくさんのお部屋を二人で手を繋ぎ探索して行くのだ。

声を潜めて話していても蒼一郎の言葉が可笑しくて、つつい笑い声を漏らしてしまう。

その度に誰かに発見され怒られ、それぞれの部屋に戻された。それでも、私達は真夜中の探検を止めはしなかった。

この屋敷に来たばかりの頃は静寂とあまりの広さで夜が恐ろしかった。

だが、そんな時に決まって蒼一郎が部屋を訪ねてくれる。

お陰で次第に夜が好きな時間へと変わっていった。

「本当に静かだな……」

神威は目的の場所に着くと格子扉の錠前の鍵を外す。

格子扉の向こう側には白い襖が見える。

前に立ち一息つくと襖を開けた。

畳と微かな伽羅の香が混じった匂いが鼻を掠める。

戸口から部屋をぐるりと見渡し足を踏み入れた。

木製の低い机と座椅子、三つ並んだ大きな本棚、鍵の付いた引き出しのある箆笥。

目の前には今はもう使われていない家具が並べられている。

机に近付きスタンドの明かりを付けた。

橙の弱い灯りが薄っすらと部屋を照らす。

「蒼一郎……」

神威は小さく呟いた。

この部屋は白虎邸の一番奥にある、かつて蒼一郎が使っていた部屋だった。

神威は箆笥の引き出しの鍵を開ける。

中には古びたアルバムと古びた日記帳。

そして、伽羅の香と年代物のカメラ。

それらを取り出すと座椅子に腰掛ける。  
机の上の灰皿に伽羅の香を置き火を点けた。  
心地の良い香りが全身を包んでいく。

神威は少し躊躇した後、思い切ってアルバムを開いた。  
最初のページには咲き乱れる桜の大木の下、無愛想な顔をした神威と笑顔の蒼一郎。

真神家に来て初めて撮った写真。

元々が写真嫌いで必死に拒んだのが、宇月がどうしてもと聞かず仕方なく撮った物だった。

そのせいか酷く無愛想な顔で写っている。

「子供だったな……」

微かに笑い次のページをめくる。

そこには両ページに一枚ずつ異なった写真が貼られていた。

左側は神威。シンプルな白いワンピースを着てこの部屋で立っている。

右側は蒼一郎。白いシャツを着て座椅子に座っている。

どちらも幸せそうに満面な笑顔を浮かべていた。

蒼一郎は年代物のカメラを手に『骨董屋で見つけて一目で気に入ってしまったのだ』と笑って言った。

『記念すべき第一号のモデルは雪乃しかない！』

買ったばかりのカメラをこちらに向ける。

『大袈裟なのよ、蒼一郎は』

『そんな事ないよ！写真嫌いの雪乃の為に買ったんだし』  
意地悪な含みを込めて蒼一郎を軽く睨む。

『何よ、それ？ただ一目惚れして買ったんじゃないの？』

『雪乃を撮る為に一目惚れして買ったんだよ』

『一目惚れして買ったから私を撮るんでしょ？』

『違うよ！』

『ふ〜ん、そうなの〜？』

『まあ、良いじゃないか。』

さあ、笑って笑って』

ファインダー越しに蒼一郎が笑う。

『あ！誤魔化してる〜』

つられて私も笑う。

『誤魔化してないよ。』

ほら、笑って。

この前みたいに不機嫌な顔は可愛くないよ』

『分かったわよ』

レンズに顔を向けた瞬間、シャッター音が部屋に響いた。

フィルムの巻かれる音を確認すると蒼一郎の手からカメラを奪う。

『次は私の番。』

蒼一郎も笑って。

この前よりも良い笑顔でね』

『雪乃：』

これから二人でたくさんの思い出を作ろう。

そして、このカメラにその足跡を残していこう』

ファインダーの向こうの蒼一郎はとても優しい目をしていた。

写真を撮った時の状況がつい昨日の事のように蘇る。

その映像があまりにリアルで、あれから何年も経っているのを忘れてしまいそうになる。

今思えば、今までの人生の中で一番幸せだったのかも知れない。

ほんの束の間の、至高の幸せ。

真神の当主になる為の修行はとても辛かった。

『当主として恥じない立派な振る舞いを』と周りからしつこく言われ、極端に行動を制限された。

どこにいても、何をしていても、誰かに監視された。

どんなに周りの者に丁重に扱われようと、自分の置かれた突然の状況に付いていけずにいた。

新しく家族となった者達が親切に接してくれようとしても、全く馴染めずにいた。

真神家での日々が続く内、私は本来の自分の姿が分からなくなっていた。

『逃げ出してしまうおう』

自分で選べなかった自分の未来に絶望して、何度そう思った事か。だが、そんな私を救ってくれた者がただ一人だけ存在した。

真神 蒼一郎。

父親は違っても、半分血の繋がった兄。

初めてこの家に来た日から私を守ってくれた。

どんな時でも傍に居てくれた。

何度も挫けそうになる私を必死で励ましてくれた。

『この世界にはどうしようもない、変えられない事がたくさんある。無理矢理に自分の持つ何かを奪われてしまう事もある。

自分の意思じゃなく、誰かに押し付けられたモノから逃げられない時もある。

だけど、雪乃の生きる時間は雪乃だけのモノ。

それだけは誰にも変えられないし、奪えない。

だから、絶望に囚われないで。

前を向いて、笑っていて。

僕がずっと傍に居るから……』

蒼一郎が居たから、逃げずに生きていられた。  
自分の未来を受け入れられた。



蒼一郎が傍に居てくれたから、笑っていられた。  
泣く事だって出来た。

私がこの世で初めて無条件で信じ、心を開く事の出来た人。  
私がこの世で初めて、愛した人。

例え、半分血の繋がった兄妹でも構わない。  
そんな事、関係ない。

あの頃。

彼だけが…

私の世界だった…

私の全てだった…

傍らのカメラに触れると指先に冷たい感触が伝わる。  
現実が容赦なく戻ってくる。

アルバムは全て神威と蒼一郎、二人の写真だけで埋め尽くされていた。  
た。

他の者が写っている物は一枚もない。

神威がこの家に馴染めなかった様に、蒼一郎もまた馴染めてはいなかった。

母・綾乃が自分を置き去りにして別の男と失踪したせいで、心無い者達に陰口を言われていたせいだ。

似た孤独、似た苦悩。

それらが二人の絆を強め、繋いでいたのかもしれない。

【二人きりの世界】

それでも二人には何よりもかけがえのない、大切な物だった。  
永遠に続いていくのだと信じていた。

手にしたアルバムを閉じると神威は再び部屋を見渡す。

「夢は夢…」

やがては消えて失くなってしまふ…」

日記帳の表紙に書き殴られた文章を声に出して読む。

いつ書かれたのか神威は知らない。

ただ、幸せだったと思うあの頃でない事を祈る。

あんな風に感じていたのは自分だけではなかったと信じたい。

永遠など何処にも存在しなかった事を知った今。

あの頃、蒼一郎に抱いていた愛情が何よりも美しく思える。

「蒼一郎…どうして…」

目を閉じると優しく笑う蒼一郎が浮かぶ。

「どうして…あんな事に…」

神威は【最後のあの日】を思い返していた。

幸せな日々は少しずつ、でも確実に壊れ始めていた。

雪乃はその事に気付かない。

いや、本当は気付いていた。

認めたくなくて、現実を見ないでいた。

ひび割れて行く音に耳を塞いだ。

蒼一郎の心の深淵に確実に存在する、どす黒い狂気。

強く押さえ込んでいても時々不意に現れる、激しい衝動。

穏やかな顔の裏側にある、冷たい顔。

人の感情に敏感だった雪乃は早くから気付いていた。

だが、認める訳にはいかなかった。

認めれば唯一の大切な者を失ってしまふ。

安らげる唯一の時間と場所を壊してしまう。

何よりも…

蒼一郎の狂気に呼応してしまいそうになる自分が怖い。

蒼一郎と同じ様に闇に囚われてしまうのが怖い。

そんな混乱する意識に支配されまいと、蒼一郎の【変化】から目を背けた。

やがて、雪乃のその行為が大きな事態を招いてしまう。

15歳の春。

私は正式に真神の当主の座に就いた。

【神威】という名は代々、強い力を持つ者だけが継ぐ事のできる名だ。

『歴代当主の中でも一・二を誇る力の持ち主だ』  
そう周りに称えられた。

この日、私は戸籍上で【朽木 雪乃】のままだったそれまでの名を捨て【真神 神威】となった。

名が変わったせいで、それまでの自分が消されてしまった様な気がして酷く不快だった。

『本当にもう何処にも逃げられない』  
そんな思いが心にまとわりつく。

それでも、蒼一郎だけは今まで通り【雪乃】と呼んでくれる筈。

他の全員が【神威】と呼んでも、蒼一郎だけが【雪乃】と呼んでくれれば…

今までの私は決して消えずに残る。

あの写真達のように…

当主の継承式は両親のみしか出席出来ない仕来りだ。

そのせいで蒼一郎は池の桜の大木で式が終わるのを待っていてくれる。

私は式用の白い袴姿のまま、池に向かって走って行く。途中に擦れ違ふ者達に祝いの言葉を掛けられていたが、そんなものは全く耳に入らなかった。

ただ蒼一郎に本当の名で呼んで欲しくて夢中で走った。

やっと池に着くと、蒼一郎は桜の大木に寄り掛かり池を眺めている。

「蒼一郎！」

それ以上の言葉が出てこない。

たまらず足袋のままで地面に降り立つ。

私の声に反応して蒼一郎がこちらを向いた。

「式は終わった？」

立ち上がり、ゆっくりと私に歩み寄って来る。

「おめでとう」

蒼一郎が立ちすくむ私を抱き締める。

「これで、やっと……」

暖かな体温に堪えていた思いが溢れ出しそうになる。

「これでやっと、僕の願いが叶うよ……」

抱き締められた腕の力が徐々に増していく。

「蒼一郎？」

「君が僕の願いを叶えてくれるんだ」

言葉の意味が分からずに蒼一郎を見上げる。

彼は笑っていた。

いつもの優しい笑みではなく、禍々しい笑み。

「ありがとう、神威」

背中を冷たい汗が伝う。

私は不意に湧き上がる強い恐怖に駆られ、力任せに蒼一郎を突き飛ばした。

「どうしたんだ？」

蒼一郎が私の行動に驚いた顔をする。

何も言えず、体が勝手に後退りしていた。

「一体、どうしたんだ？」

蒼一郎が再び禍々しい笑みを浮かべ、少しずつ近付いてくる。

「神威」

もう一度名を呼ばれた私は、踵を返しその場から走り去っていた。

とにかくあの場から立ち去りたかった。

蒼一郎の笑みが、全身から滲み出ていた狂気が、怖かった。  
そして…

【雪乃】と呼んでくれなかった事が何よりも許せなかった。

気付けば私は客間の前に立っていた。

私の当主継承を祝う者達で宴が開かれ賑わっている。

「神威様？」

突然現れた私に翔がいち早く気付き近付いてくる。

息を切らし俯いた私の顔を心配そうに覗き込む。

「神威様？どうなされたのですか？」

翔の手が答えない私の肩に触れようと動く。

「私に触るな！」

手を振り払い叫ぶ。

その声に客間にいる皆が私を見る。

「…神威様？」

「私の名を呼ぶな！！」

激しい声に皆がざわめき出す。

翔はそれ以上は何も言えず、ただ私を見ている。  
私を見る全ての好奇心な視線が腹立たしかった。

「神威、何を騒いでいるのです？」

様子を見兼ねて、少し離れた場所から綾乃が割って入ってきた。

「何を騒いでいるのか聞いているんです。」

「答えなさい」

強い口調で詰問される。

それが昂ぶる感情を更に煽る。

「お前は誰に口を利いている？」

感情を必死に押さえ、低い声で言い返す。

「神威、それはどういう意味です？」

負けじと綾乃が切り返してくる。

「そのままの意味だ。」

お前は誰に口を利いている？

私は今日より真神の当主だ」

鋭く綾乃を睨みつける。

「例え、実の母親でも私にその様な口を利く事は許さない。

真神の当主である私に。

もう、偉そうに指図するな」

綾乃が一瞬、悲しい表情を浮かべた。

だが、すぐにいつもの厳しい顔に戻る。

「ならば、神威。」

この様な場で不様な真似はよしなさい。

当主に有るまじき行いです」

「お前は私の言葉が理解できなかったのか？

つい先程、私に指図するなと言ったはずだ」

互いに譲らず睨み合う。

久しぶりに交わされた会話はとても親子のモノではなかった。

皆が私達のやり取りに気まずさを感じ黙り込んでいる。

綾乃と話していると、次第に【ある感情】が大きく膨らんでいく。

『お前が自分の宿命から逃げたせいで、多くの者が苦しんでいる』

それは【怒り】が招く【憎しみ】だった。

「本当に不様ね」

綾乃が冷たく言い放つ。

その言葉に私の理性の箍が外れそうになる。

『この女の苦しむ顔が見てみたい』

私は衝動に身を任せ始めていた。

「誰のせいだ？」

冷静な表情を作る。

「何を言っているのです？」

綾乃が眉間に皺を寄せる。

「誰のせいだ？」

私が自分で生き方を選ぶ事が出来なかったのは」

自分でも驚くほど冷たい声だった。

「誰のせいだ？」

私の義父・宇月が強い絶望と恥を味わったのは」

厳しい綾乃の顔がみるみる苦しみに歪んで行く。

自分の目に闇が宿るのを感じる。

「誰のせいだ？」

私の実父・隼人が心労が祟り、若くして死んだのは」

もう止める事は出来なかった。

「誰のせいだ？」

蒼一郎が捨てられた悲しみや苦しみに耐え、生きているのは」

私の体から放たれる黒い狂気に誰もが圧倒されている。

「全部、お前のせいだろう？」

お前の身勝手な行いが招いた結果だろう？」

【憎しみ】が【殺意】に変化する。

「なのに何故、お前は平気な顔でいる？」

綾乃の目から涙が溢れ出す。

反論できないのか、無言で顔を伏せその場に座り込んだ。

「何故、お前は、生きていられる？」

その姿を冷酷な眼差しで見下ろす。

自然と口元に笑みが刻まれる。

『殺せ』

心に誰かの声が響く。

無意識に上げられた左の掌に黒い球体が浮かぶ。



「お前など、死ねばいい」

『殺せ！』

球体は声に呼応し大きくなっていく。

『殺せ！！』

「その命で己の罪を償え」

言い終えるのと同時に綾乃に向かって球体を放つ。

「神威様！！」

「神威！止める！」

翔と宇月が同時に叫ぶ。

叫びを無視して球体は綾乃に向かっていく。

綾乃の顔が恐怖に彩られる。

「これで終わりだ」

「……！！」

球体が綾乃の体を貫こうとした瞬間。

白い光が部屋を包んだ。

眩しさに目を瞑る。

「蒼一郎！」

綾乃の声に目を開ける。

そこには綾乃を守るように防御壁を張った蒼一郎が立っていた。  
球体は防御壁に阻まれ無残にも砕け散る。

「止めるんだ、神威」

静かな声。

綾乃を庇った蒼一郎に【殺意】の矛先が変わる。

「邪魔をするな。

そこを退け」

蒼一郎は真っ直ぐ私を見て微動だにしない。

「退く訳にはいかない」

「もう一度だけ言う。

そこを、退け！」

視界が黒に染まっていく。

「退く訳にはいかない！」

再び左手に球体が浮かぶ。

「邪魔をするなら……

お前も殺す！」

私の叫びと共に球体が蒼一郎を目掛けて飛んでいく。

「オン・ハンダラ・ウン！」

蒼一郎の真言に合わせ蒼い龍が姿を現す。  
龍は球体を飲み込み、こちらに向かってくる。  
咄嗟に防御壁を張るが間に合わない。  
龍に貫かれ私の体が後方に弾かれる。

「！！」

壁に叩きつけられると覚悟し、目を閉じた。

「！？」

だが、私の体は強い腕に受け止められた。  
驚いて目を開けると蒼一郎の顔が間近にある。

「もう良いんだ」

いつもと同じ笑顔で言う。

「もう良いんだよ」

その笑顔に暴走した意識が正常を取り戻す。

「今は憎しみに支配されないで…」

暖かい手が頬に触れる。

耳元で囁かれる言葉。

「今は、ゆっくりお眠り…」

子守唄の様な穏やかな声に意識が遠のいていく。  
全身の力が抜け、私は深い眠りに落ちて行った。

『この女を殺すのはまだ早い…』

眠りに落ちる間際、私は確かに聞いた。

『もつと、強い苦痛を…  
もつと、深い絶望を…  
味合わせてやるんだ…』

心に直接語り掛けてくる、蒼一郎の低く淀んだ声を…

『殺すのはそれからだ』

この一件の直後、私は自分で自分に封印を施した。  
左腕に付けた力を抑える銀製の腕輪。

幅広の内側には力を制御する真言が刻まれている。  
私自身が本当に力が必要だと心から願わなければ、この腕輪は決して外れない。

例え、外れたとしても。

引き換えにこの世に存在する最も耐え難い、肉体的な痛みを味わう事になる。

二度と同じ暴走を繰り返さない為に。

二度と大切な者達を自らの手で危険に晒さない為に。

二度と…

蒼一郎の闇に触発され、自らの闇に囚われない為に。

それから、三年後。

【ある事件】によって綾乃・宇月・静・大河。  
そして…

蒼一郎は、この世を去った。

二度と帰れない死の世界へと旅立ってしまった。

蒼一郎の命と共に私の全ても失われた…

同じ血を受け継ぐ家族は私と旬だけになった。

残された私は旬を本家の養子に入れ義弟にした。

敷地内に別の屋敷を建てさせ【蒼龍邸】と名付けた。  
完成すると直ぐに旬と共にそちらに移り住んだ。

それと同時期から様々な幻覚に度々襲われる様になった。

そして…

蒼一郎の使っていた部屋に結界を張った。

私の過ちが眠る場所。

私の狂気が隠れる場所。

誰にも汚されない私だけの聖地。

私以外の人間が決して立ち入れない様、強力な結界を施した。

それだけでは不安で、部屋の前に格子扉を取り付け鍵を掛けた。

やがて…

行き交う人々は消え、白虎邸は通常は使われない廃墟同然になったのだ。

神威は窓に近付き、厚いカーテンを開ける。

白み始めた空が妙に眩しく感じた。

「あれからもう、八年も経つのか…」

ガラス越しに空を見上げた。

「蒼一郎…」

何故、私を…裏切ったんだ？」

そこには居ない蒼一郎に問い掛ける。

答える様に背中の中の傷跡が鈍く痛む。

「あれから、ずっと…考えていた

裏切られた理由を…」

ガラスに触れると体温で白い手形が浮かび上がった。

「でも…私には分からない…」

部屋を振り返る。

静まり返った空気。

「答えてくれる訳ないな…」

自嘲気味に呟くと、出した物を引き出しにしまい始める。

引き出しに鍵を掛け、カーテンを閉じる。

「また来る」

部屋を後にし、格子扉に鍵を掛けた。

白虎邸の玄関へ向かう。

振り返る事無く、真っ直ぐに。

人気がなくなった蒼一郎の部屋に陽炎が浮かぶ。

神威の付けた窓の手形を見つめている。

窓越しに明け方の空を飛ぶカラスが甲高く鳴いた。

その鳴き声に陽炎は姿を消した。







## Chapter 15

12月の上旬。

いつに間にか辺りはすっかり寒さに覆われていた。

蒼龍邸のリビングにはいつも通り、翔・旬・洋介・竜也・悠が顔を揃えていた。

「ねえ、神威は？」

雑誌を読んでいた洋介が、ノートパソコンの画面と睨み合いをしている翔に声を掛ける。

「玄武邸にいらっしゃるはずだ」

顔を上げずに答える。

玄武邸とは蒼龍邸の隣に位置したコンクリート作りの建物だ。

道場を始め、ジムやプールも併設されている。

いわゆる、身体を鍛える為の訓練施設といった所だ。

当初は道場のみの古い木造作りだったが【ある時】火事で焼失した為、神威が新しく建て直させたものだった。

「ふーん、また鍛錬？」

「お前も少しは神威様を見習ったらどうだ？」

「翔こそね」

いじけた顔で翔を睨む。

「翔は今、お仕事してるんだよ。

サボってる訳じゃないよ」

旬がすかさずフォローを入れる。

「朝からつい先刻まで、神威に付き合って手合わせしてたしな」  
竜也が後を続ける。

「それにしてもスゲえよな」

神威とまともに手合わせ出来んのは今や翔と匂くらいだよな？」  
悠が感心した様に翔と匂の顔を交互に見る。

「今の俺達なんて秒殺だもんね」

洋介が悠と竜也を見る。

「少なくともお前よりはもつがな」

「だな」

竜也と悠は意地悪な笑みを浮かべた。

「ふーんだ。」

どうせ、俺は弱々だよーだ」

更にいじけてそっぽを向く。

「いじけないの。」

僕達だって最近では、相手するのはやっとなんだよ」

匂がちらりと翔を見る。

翔は匂の視線を避ける様にパソコンの画面を向けたまま、コーヒーを口にしていた。

「神威は日を追う毎に、ますます強くなっていく。

近い将来、僕達だって手合せの相手さえ出来なくなるよ」

少し寂しそうな表情を浮かべて匂が笑った。

「やっぱ、アマゾネスだな」

微妙な空気を感じたのか悠が軽口を叩く。

「だーから！

神威は……」

「か弱い女の子、だろ？」

「そうだよ！

女の子だよ！

で、でも……

か弱くはないかも……」

「何だそれ？」

悠は大げさに首を傾げた。

「ところでさ、洋介。」

何の雑誌読んだの？」

旬が洋介の前に置かれた雑誌を指差す。

「そういえば、この前もそれ読んだよな？」

悠が雑誌を覗き込む。

「これ？」

よくぞ！聞いてくれました！

じゃーん！」

自慢気にあるページを開いて皆に見せる。

『気のない彼女をその気にさせる！クリスマス！必勝法！！』

赤い文字の大きな見出しが四人の目に飛び込んで来た。  
皆があからさまに呆れた顔をする。

「…あのさ…洋介…」

あえて、聞くけどさ…

それ…何？」

やっこの思いで旬が洋介に問い掛けた。

「何って！決まってんじゃない！」

洋介が胸を張る。

「皆で神威とクリスマスを！」

神威の誕生日を！

祝うんだよー！」

威勢の良い声を張り上げ、いっばいに両手を広げた。

「お前さ…」

本当に！馬鹿だな！」

「いつその事、神威にやられてしまえ」

悠と竜也が呆れた声を上げた。

「何で!？」

「良いじゃん!」

「良い悪いじゃなくて…」

旬が困った顔をする。

「神威様が嫌がるに決まってるだろう」

翔が旬の後を続ける。

「神威が誕生日を祝われるのが嫌いって事、洋介も知ってるよね?」

「そうだ。」

「そんな事したら、それこそまた神威の逆鱗に触れるぞ」

「また張り倒されっぞ。」

「やめとけって…」

旬・竜也・悠が諭す様に言う。

「ほら!また!」

みんな、諦めてる!」

「諦めているんじゃない。」

「神威様の嫌がる事をしたくないだけだ」

翔も洋介を諭す。

「昔は毎年、やってたじゃん!」

「確かに…アレからはやってないけどさ…」

皆の反対に合い、洋介が寂しそうに俯く。

12月24日。

クリスマスイブだと世間で騒がれるこの日は、神威の【誕生日】でもある。

洋介の言う通り。

確かに以前は毎年、蒼一郎・翔・旬・洋介・竜也・悠を始めとする幾人かのメンバーで祝っていた。

元々、神威は何故か自分の【誕生日】を極端に嫌っていた。

『神威が生まれた日があったからこそ、僕達は出逢えたんだ。そんな日を祝わないでどうするんだよ』

そう蒼一郎が説得したお陰で、神威も祝われる事を喜んでいた。

しかし…

蒼一郎が他界した八年前からは祝う事を一切、許さなかった。

神威にとっては蒼一郎が居たからこそその【誕生日】だったのだろう。

実際に翌年、『おめでとう』と言ってしまった洋介に『黙れ！』と神威の激しい罵声と鉄拳が容赦なく飛んできた。

以来、神威の誕生日は【何も言わない】【何もしない】というのが皆の中での暗黙のルールとなった。  
それは現在まで守られている。

「だいたいさ。

何で嫌がつてるか、みんな知らないじゃん！」

しばらく俯いていた洋介が反論の声を上げた。

「理由は良いんだ。

嫌がつてる事には変わらない」

翔が切り返す。

「でも！

昔、蒼一郎も言ってたじゃん！

生まれた日を祝わないでどうするんだって！」

蒼一郎の名前に翔がぴくりと反応する。

「なら、お前は神威様の嫌がる事をあえてしたいのか？」

自然と眉間に皺が寄り、きつい口調になる。

「そういう訳じゃないよ！

でも！もう良いだろ？」

「どういう意味だ？」

洋介が真顔になって翔を見つめる。

「神威が誕生日を祝って欲しいと思っているのは蒼一郎にだけだつて事ぐらい、俺にだって分かつてるよ！

でももう、蒼一郎はいないんだ。

そして、俺だって神威の一年に一度しかない日を祝ってやりたい」  
決意を込めた声で言う。

「それはみんなも同じ気持ちだろ？」

一息つく。

「八年も経つんだ。

もう良いだろ？」

今度は皆を見つめる。

「でも、洋介。

いくら僕達が祝ってあげたいと思っても、それを神威が望まなければ意味がないよ……」

「そうだ。

本人が望まない事をやっても迷惑なだけだろ？」

旬と竜也が力なく答える。

「意味とか理屈とかはどうでも良い！

なんてやってみなくちゃ分かんないだろ！」

バンと両手でテーブルを叩く。

「このままじゃ神威は前に進めない。

俺達だって！

ずっとあの時で立ち止まったままだ！」

切ない叫びが部屋に響く。

「……確かにそうかもしれないな……」

悠がぼそりと呟く。

「神威は色んなモノを背負い過ぎてる。  
特に過去って奴をな。」

俺達はその事に気付いてるのに、神威が嫌がるからって事を理由にして触れようとしない」

悠は洋介を見て苦笑する。

「それってさ…」

神威からも蒼一郎からも、逃げてるのと同じなのかもな…」  
皆の間に沈黙が流れる。

「やってみなくちゃ分からない、か…」

旬が沈黙を破った。

「確かにそうだね…」

笑顔で洋介を見る。

「よし！やってみよう！」

立ち上がると洋介の肩を叩く。

「神威がもし激怒したら…」

皆で仲良く張り倒されよう！」

「それもそうだな」

「赤信号、皆で渡れば怖くない！ってか？」

旬・竜也・悠が洋介に同意をする。

「翔、良いよね？」

旬が黙って煙草を吸っている翔に問い掛けた。  
皆が注目する。

翔は溜息と共に紫煙を吐き出す。

「お前達がそこまで言うなら仕方ないな」

ノートパソコンを閉じると軽く笑う。

「しかし、洋介。」

どうするつもりだ？」

喜んでいる洋介に翔が問う。

「普通にやっても駄目だろうな」

竜也が同意する。

「だから！

これだよ！」

雑誌を掲げる。

「それってさ、女を落とすつてもんだろ？

この場合は違うだろ？」

「悠！その気のないってのは同じだよ！」

「そりゃそうだけどさ…」

雑誌を奪い取った悠が記事を読み始める。

「明確な計画はあるのか？」

竜也もつられて雑誌を覗き込む。

良くぞ聞いてくれましたと言わんばかりに洋介が立ち上がる。

「神威も女の子なんだよ！」

誰かが代表で普通の子がやるみたいないデートコースを回らせて…

和んだ所でここに連れ帰って…

サプライズなパーティーを開催！」

再び手を広げる。

「…あのさ…

それって、かなり無理なんじゃねえ？」

悠が顔を上げる。

「誕生日にあえて外に連れ出すのは難しいんじゃないのか？」

竜也も同意する。

「第一、誰がデートコースを回らせるんだよ？」

「洋介じゃ絶対無理だよ」

「即答で却下だな」

「何、言ってるの？」

そりゃ俺がやりたいけど、無理なのは分かってるよ…

他に…

適任者がいるじゃん！」

四人が一斉に翔を見る。



「…もしや…」

私にやれと言うのか？」

翔が露骨に不信感を浮かべる。

「私に神威様を連れ出せと言うのか？」

「だって！」

このメンバーの中じゃ翔が一番びったりだよ！」

洋介は翔の背中に回り抱きついた。

「無理だ」

洋介の手を振り払う。

「翔だったら大丈夫だって！」

「確かに翔なら信用されるね」

旬が大きく頷いた。

「それなら。」

旬の方が適任だろう」

翔が反論する。

「だめだめ。」

僕はサプライズなパーティーの準備しないと。

洋介達だけだったら心配だしね」

「しつかりの者の旬には残ってもらわないとな」

「他の俺達の誰かが誘うと、わざとらしく見えてバレちまう可能性が高いしよ」

旬・竜也・悠が翔を取り囲む。

「そうそう。」

翔なら自然に神威を誘い出せるよ」

「神威もお前相手なら怪しまないだろうしな」

「お前しかいないって！」

三人がにじり寄る。

「それとも、翔は神威の誕生日なんてどうでも良いの？」  
旬が翔の顔をわざとらしく覗き込んだ。

「そんな訳ではないが…」

珍しく翔が口籠る。

「連れ出す計画は俺が立ててるからさ！」

洋介が止めを刺す。

「観念しろよ」

四人の声が揃う。

「分かった」

翔はついに観念したように大きな溜息を付いた。

「よし！決まり〜！」

翔の言葉に四人がガッツポーズを取る。

「で、洋介？」

計画とやらを聞かせてもらおうか？」

新たな煙草に火を点けながら洋介を見る。

「簡単だよ！」

ほら！」

ポケットから白い封筒を取り出す。

それを受け取ると中身を確認する。

「…クラシックのコンサートか？」

「そう！」

神威は翔の弾くピアノを気に入ってんだろ？  
で。

『好きな楽団がクリスマススイブにコンサートやるんですが。

たまたま知り合いにそのチケットを貰ったので一緒に行きませんか？』

って誘い出すんだよ」

「そんな簡単にいく訳がないだろう？」

「大丈夫！」

実際にクラシックに興味あるのは翔と神威だけだし。

他の奴らは誘っても居眠りされるだけだって付け加えれば、もう

完璧だよ！」

翔はチケットを眺めている。

「で。その後、イルミネーション輝く街を二人でしばらく歩いてさ。良い感じになった頃合で竜也が神威に電話する。

『旬が階段から落ちて大怪我した！すぐに家に戻って来い！』ってね」

「何で、俺が電話するんだ？」

「だって、残ったメンバーの中で一番信じてもらえそうじゃん」

「何で、僕が階段から落ちるの？」

「だって、一番ありえそうじゃん」

「それを言うなら、洋介が落ちたって言う方がありえるよ」

「俺が落ちたって言っても『馬鹿だな、ほっとけ』って無視されそうじゃん……」

四人が洋介を見て頷く。

「……確かにそうだな」

「でも、僕って間抜けな役だね……」

何かやだな……」

旬が不服そうに呟く。

「まあ、たまには良いんじゃない？」

悠が笑って言う。

「ま、神威の為だから仕方ないね」

「神威の為だけじゃないがな」

竜也が悠と手を取り喜んでいる洋介を眺めて微笑んだ。

「洋介のあんなに喜んでる姿を見るのは久しぶりだね」

「七夕……以来だな」

旬と翔もつられて微笑みを浮かべる。

「でも、何で急に神威の誕生日を祝ってやりたいなんて言い出したんだろ？」

「激怒される可能性が遥かに高いのにね」

「いつもの気まぐれ等ではなさそうだな」

二人が竜也を見る。

「あいつなりに考える事があるんだろう」

竜也が軽い溜息を付く。

「あいつには、あいつにしか見えないモノがあるんだ……」  
寂し気に呟いた竜也を翔と旬がじっと見つめる。

「なぐにコソコソ話してんの？」

洋介が割り込んでくる。

「お前は筋金入りの馬鹿だと話していたんだ」

「何だよ、竜也。」

馬鹿馬鹿、言うなよ！

「事実だろ？」

「馬鹿のフリしてるだけだもん！」

「そうだったのか？」

今まで気付かなかったな。

意外だったな

大袈裟に何度も頷く竜也に洋介がしがみ付く。

「あ！」

「やっぱ馬鹿扱いしてる！」

「だから、事実だろうが」

「馬鹿馬鹿言う竜也の方が馬鹿なんだよ！」

「耳元で喚くな」

竜也が洋介を振り払おうと体を動かす。

洋介は抵抗し尚も強くしがみ付く。

「離せ、洋介。」

「でないとシメるぞ」

「何か竜也って神威に似てきたよ」

悠が二人のやり取りに参加する。

「確かに似てきたな」

「そう言われてみれば似てるね。」

話す口調とか怖い顔とか、特にね」

旬も参加する。

「いい加減に離れる。」

うつとうしい！

怖い顔なら翔の方がそっくりだろうが！」

皆を振り払い立ち上がった竜也は、翔に矛先を向けた。

「何で私に振るんだ？」

翔は再びノートパソコンを広げる。

「竜也の言う通り、怖い顔なら翔も負けてないね」

「悪かったな」

「そう思うなら笑ってよ」

翔の顔を旬が横から覗き込む。

「笑ってよ」

その隣で洋介が同じ仕草をする。

「ねえ、笑ってよ」

更に悠が加わる。

並んだ三人を翔は無視して画面を見ている。

無視された三人が顔を見合わせ笑った。

「何を騒いでいるんだ？」

声と共にリビングのドアが開く。

白の胴衣に紺の袴姿の神威が不思議そうにこちらを見ていた。

翔がすぐさま立ち上がり神威に歩み寄る。

「さっきの計画、神威には絶対に内緒だよ……」

洋介が声を潜めて言う。

「了解」

旬・竜也・悠が小さく頷いた。

「何だ？」

持っていたタオルを翔に渡しながら、神威が首を傾げる。

「何でもありません、神威様」

タオルを受け取ると優しく笑う。

「ああ！神威の前だと笑うんだよね」

洋介が翔を冷やかす。

「何の話だ？」

「神威、冷たいお茶でも入れようか？」

旬が困った顔をしている翔を助ける。

「ああ…頼む」

まだ不審そうに翔達を見ながらも神威は席に座った。

「洋介、何か企んでないか？」

「え?!」

「な、なんにも企んでないよ!」

神威にじつと睨まれた洋介が途端に慌て始めた。

「なら、何故そんなに慌てるんだ？」

「神威がそんな怖い顔して見てるからだよ」

旬がグラスを手渡す。

「そうか？」

グラスを受け取ると一気に飲み干した。

「神威はいつつも怖い顔してるからな」

ていうか、ホント男らしいな…」

悠が神威の飲みっぷりを感じた様に見つめる。

「女らしくなくて悪かったな」

ちらりと悠を見返す。

啜えた煙草に翔がすかさず火を点ける。

「神威はれっきとした女の子だよ。」

ね？洋介」

旬が話題が変わり神威の隣で安心していた洋介に同意を求める。

「あ！う、うん!」

しどろもどろになって答える。

「何か変だな…」

神威はわざと洋介に顔を近付けた。

あまりの近さに洋介が真っ赤になって俯く。

「何か隠してないか？」

洋介？」

吸い込んだ煙を洋介の横顔に吹き付ける。

洋介が軽く咳き込んだ。

「何も隠してないよ」

ていうか…

神威：顔、近いよ…」

「何、赤くなつてんだ？」

悠が洋介の横腹を突付く。

「赤くなつてないよ！」

むきになって反論する。

「可愛い〜洋介〜」

「悠！うるさいよ！」

「ますます可愛い〜」

二人にやり取りに顔を離れた神威は自然と微笑んでいた。

「本当に騒がしい奴らだな」

煙草を消すと立ち上がる。

「何処行くの？」

旬が神威の背中に声を掛ける。

「シャワーを浴びてくる」

「そう、いつてらしゃい」

神威は旬の声に片手を挙げて部屋を出て行った。

「危なかった」

神威が部屋を出たのを確認すると、洋介はテーブルに突っ伏し情けない声を上げた。

「お前、慌て過ぎだつて」

伸びをしながら悠が洋介を見下ろす。

「神威はただでさえ勘が良いんだからね」

旬が洋介の前に冷たい茶の入ったグラスを置く。

「だって」

旬が変な事言い出すからだろ」

グラスを手にすると、先程の神威の様に一気に飲み干した。

「ったく、冷や冷やさせやがって」

悠がばやきながら立ち上げる。

「俺、朱雀邸に戻るわ。」

何かどつと疲れた」

手を振ると旬も悠の後を追う。

「僕も」

とりあえず。

みんな、詳しい話はまた後日って事で」

全員が軽く頷く。

「私も戻るか。」

「ここじゃ仕事も進まないしな」

翔もパソコンを手にするとドアへ向かう。

「では、竜也に洋介。」

後片付けを頼んだぞ」

翔はそう言い残すとドアを閉めて出て行った。

リビングには如月兄弟が残された。

幼い頃からずっと部屋が別々だった為、この兄弟が二人きりになる事は極めて少ない。

少し重たい空気と沈黙が部屋に漂う。

「それにしてもビビった」

気まずさに耐え切れず、テーブルの上の物を片付けながら洋介が声を発する。

それを竜也が呆れた顔で見た。



「情けない声を出すな」

「だってさ！」

あんな近くで見られたらさ……」

「言い訳するな。」

追求されても動揺するな」

微かに眉間に皺を寄せ、厳しい口調になる。

「動揺してもそれを表に出すな。」

それでも先見の家の者か？」

「いきなり説教するなよ」

「たまには真面目に聞け。」

そんな事では如月の未来も危ういな」

「何、言ってるの？」

家は竜也が継ぐんだから。

大丈夫でしょ？」

カップを乱暴にトレイに載せる。

「もし、俺に何か遭った時はお前が継ぐ事になるんだぞ」

「縁起でもない事言うなよ。」

俺は嫌だからな」

洋介がいじけてそっぽを向く。

「お前はいつまでも変わらないな……」

竜也はそんな洋介に少しだけ苦笑いを浮かべた。

「良いのか？」

あいつら、二人きりにしてさ」

朱雀邸に向かいながら、悠が先を歩く翔に声を掛ける。

「たまには兄弟で話をするのも良いだろう。」

こんな事でもなければ互いに距離を取るからな」

振り返らずに答える。

「確かに。」

普段は会話の少ない兄弟だからね」

隣にいた旬が悠をちらりと見た。

「あいつらつてさ、何か水と油みたいなもんだよな。  
見た目も性格も正反對だしよ」

翔が立ち止まる。

「いや。あの二人はよく似ている」

「そうか？」

「僕も似てると思うよ。」

でも、だから余計に避け合うんじゃない？」

ふーんと悠は大きく背伸びをする。

「まあ、俺らには分からない何かがあるってか？」

「血の繋がりがあからって相手の全てが分かる訳じゃないよ。」

僕だって神威の考えてる事は全然分かんないし」

小さく言った旬の肩を二人が左右から軽く叩く。

「私にだって神威様の事は全く分からないさ」

「だけど、それでも俺らは神威の傍に居る。」

それだけちゃんと分かっけてりや十分でしょ？」

三人は互いに顔を見合わせ強く頷いた。



## Chapter 16

四方から滝の流れる音が遠く聞こえてくる。

12月20日、夕刻。

都心の高層ホテル。

その一階にあるティーラウンジ。

ラウンジ内はたくさんの観葉植物が置かれ、白を基調としたインテリアで統一されている。

ゆったりとしたソファーに広めのテーブル。

ラウンジの四方はガラス盤に囲まれ、その向こうには濃い黒色の大理石で出来た人工の滝が流れている。

透明な水が頂上から次々と止めどなく滴り落ちていく。

このホテルは真神財閥の傘下にある日本有数の高級ホテルだ。

神威と翔はラウンジの一番奥の席に並んで座っていた。

人工の滝を神威はぼんやりと眺めている。

低いテーブルには何冊かの書類が並べられていた。

神威は滝から書類に視線を移す。

目の前には二人のスーツ姿の男達。

先程から交互に熱弁を振るっていた。

翔が時折、それに意見や質問を挟んでいる。

男達は真神財閥の企業の幹部社員で、来年2月に始まる新たなプロジェクトの最終打ち合わせの為に集合していた。

「肝心な箇所が抜けているな」

それまで黙っていた神威が口を開く。

書類の一冊を手に取るとパラパラとページを捲った。

男達が緊張した顔付きで神威の様子を見る。

「現在までの買収成功率は？」

書類を見たまま神威が問う。

「九割といった所です」

年配の方の男が遠慮がちに答える。

「九割？」

それで先に進めようとしているのか？」

「しかし…」

それで十分かと…」

答えた男が口籠った。

神威は冷たい視線を送る。

「残りの一割はどうするつもりだ？」

このまま放っておくのか？」

書類をテーブルに投げ捨てる。

「しかし、相手も手強くて…」

男が取り出したハンカチで額の汗を拭う。

「手強くて落ちないから、とりあえず今は放っておく？」

それで？」

直前になって慌てるつもりか？」

「…」

男が無言で俯いた。

それに合わせ片方の若い男も俯いてしまう。

「手強いからこそ、真っ先に落としておく。

でなければ、いざという時に牙を剥かれ全てを台無しにされる。

面倒を後回しにするな」

真っ直ぐに男達を見た。

「顔を上げる」

強い口調で言葉を続ける。

「手強いというが、株価の動きを始めとする表に出てくる情報だけを信用するな。」

あそこの社長と副社長にはうち主催のパーティーで会った事がある。

話してみたが、社長は大した人物ではなかった。

実際に実権を握り、会社を動かしているのは副社長の方だろう」

神威は注文されたコーヒーを一口すすする。

「噂では副社長は無類の酒好きで女好きと聞く。

それに私の印象では自意識過剰で虚栄心の強い男だった。

ならば、夜の街もさぞや好きな事だろう。

恐らくひいきにしている店、ひいきにしている女がいるはずだ」

真剣な表情で話を聞いている男達を神威はちらりと見る。

「すぐにそれを調べろ。」

見つけたら、店へ客を装い何度か出向いて女に話を聞け。

所詮、あの程度の男がひいきにしている女だ。

奴より高い金を使ってやれば何でも話してくれるだろう。

このままにした事で出るだろう損害よりは安いものだ」

「しかし…」

そんな事で有力な情報が得られるんでしょうか？」

若い男が疑問を口にする。

それに神威が意味有り気にニヤリと笑った。

「お前達は女が接待してくれる店に飲みに行った事はないのか？」

「そりゃあ、何度かありますが…」

年配の男が答える。

「その店で女に会社の話をした事は？」

「い、いや…」

「隠さなくて良い」

「はあ…」

神威が煙草を取り出し火を点ける。

「成功は他者に称えられる程に価値を増す。  
だからこそ。

それなりの仕事を成せば、それを誰かに話したいと思うもの。  
逆に愚痴などは他者に知られたくないと思うもの。

だが、話さず内に抱え込めば大きなストレスになる。

誰かに聞いて欲しいが、誰にでも話せる訳ではない。

愚痴などは下手をすれば重大な弱みになる場合があるからな。

そういう様々な事情を考慮すると、夜の女は聞き相手にはうって  
つけだ」

煙を吐き出すと年配の男に視線を送る。

「夜の女達は、どんな奴でもある程度の金を払えば酒の相手をする。  
どんな話でも嫌がらずに聞かし、大袈裟に感動したり共感してく  
れる。

それが彼女達の仕事だからな。

そして、基本的には聞いた話を外部には漏らさない。

口の軽い女ばかりの店は信用をなくし、客は近寄らなくなるから  
な。

万が一に漏れたとしても『酒の席での戯言』と言えはある程度は  
済まされる」

「なるほど！」

若い男がパンと手を叩く。

「しかし、副社長は会社の事を話したりしてるんでしょうか？」

年配の男が口を挟む。

神威はうんざりした様な溜息を付いた。

「お前は『しかし』が多過ぎるんだ。

先程も言っただろう。

『私の印象では自意識過剰で虚栄心の強い男だった』と。

そんな男がちゃはやとしてくれる場所でも何も話さない訳がない。

大方、かなりの装飾をして女に話して聞かせているだろうな」  
灰皿に煙草を押し付ける。

身を乗り出し、軽く拳を握ると書類をコツコツと叩く。

「固定観念に囚われていてばかりでは新しい事など成し得ない。たまには変わった方向から攻めてみるのも成功の秘訣だ」

神威が男達をじっと見つめる。

「最近は特に忙しかっただろうからな。

まあ、お前達も息抜きを兼ねて遊んで来い。

会社の経費って奴でな」

男達がキョトンとした顔をする。

「ただし。

しつかり情報を集め、必ず成果は挙げろ。

社内の他の者達が経費の事で何か言い出したとしても、成果さえ上げられれば必要経費だったで通せる」

神威は書類をまとめると年配の男に手渡す。

「先の話をするのは残り一割を落としてからだ。

お前達に自信がないなら、こちらでやるがどうする?」

「自信は他者から与えられる物ではなく、自分の中から搾り出す物だ。

限界という物も他者が決めるのではなく、自分自身が決める物だ」

神威は男達に優しく笑いかける。

「どうするんだ?

やるのか、やらないのか?

出来るのか、出来ないのか?

私はお前達に期待をしているんだがな……」

黙っている男達に答えを促す。

男達は顔を見合わせると大きく頷いた。

「やります。

やらせてください!」

ラウンジ内に年配の男の興奮した声が響く。



その声に他の人々が驚き、神威達のいるテーブルを振り返る。

神威と翔が苦笑いを浮かべた。

「良い返事だ。」

そうと決まれば、早く結果を出せ。

与えられる猶予は1ヶ月だ」

「十分です！」

目を輝かせて男が神威を見る。

「よし。」

ならば、さっさと行動に移せ。

こんな所でグズグズしている暇はないぞ」

男達が再び頷くと立ち上がる。

「必ず、ご期待に応えます！」

「ああ。」

是非そうしてくれ」

神威も立ち上がると年配の男に手を差し出す。

「有り難き光栄です！」

感動で涙目になった年配の男が神威の手を握る。

「期待していますよ」

翔も立ち上がり、強い視線を二人に送った。

「僕も全力を尽くします！」

「ああ」

神威は手を引くと笑顔を浮かべソファーに座る。

「では。」

私達はこれで失礼します」

男達は深く礼をするとラウンジの出口に向かう。

翔はそれを見送ると神威の前に腰掛けた。

「単純な奴らだな」

二本目の煙草を咥える。

「仕方ありませんよ。」

神威様が社員に対して、あの様に長く話されるのは珍しいですからね」

翔が身を乗り出し火を点ける。

「たまには良いだろう。」

まあ、お陰で疲れたかな」

背もたれに身を預けると滝の方に視線を移した。

「コーヒーが冷めてしまいましたね。」

取り返させましょう」

翔はウエイトレスを呼ぶ為に手を上げた。

「いや、必要ない」

手に気付いて近寄ってきたウエイトレスに神威が首を横に振る。

「この後の予定はどうなっている？」

「今日はこれで終了です」

「そうか。」

なら、一杯付き合え」

そう言々とスツと立ち上がる。

「神威様？」

「行くぞ」

そのまま出口に向かって歩いて行く。

翔が慌てて後を追う。

出口で赤茶の髪の女と肩がぶつかった。

勢いで女の持つていた鞆が床に落ちる。

「すいません。」

大丈夫ですか？」

翔は頭を下げると鞆を拾い上げる。

女はそれを受け取るとにこりと微笑んだ。

「いいえ、大丈夫です。」

ありがとうございます」

「良かった。」

では、失礼します」

翔も微笑み返すとラウンジを後にする。  
女はその後姿をじっと見据えていた。

「早くしろ」

神威はロビー手前で立ち止まり振り返る。

「申し訳ありません」

小走りで追いついてきた翔を確認すると、ロビーを横切りエレベーターホールに向かう。

「どこに行かれるんですか？」

「上だ」

短く答えると到着したエレベーターに乗り込む。  
最上階のボタンを押すと翔を見上げた。

「部屋の方が良かったか？」

口元に意地悪な笑みを浮かべる。

「いいえ。」

「バーラウンジの方が落ち着きます」

翔は壁にもたれると神威を見下ろす。

「こういう時は嘘でも同意するもんじゃないのか？」

「相手によりますよ」

その言葉に神威が背伸びをして翔に顔を近付けた。

「私じゃ不服か？」

「ええ」

目を逸らさずに神威を真っ直ぐに見つめる。

「理想の高い奴だな……」

神威はふんと鼻で笑うと体を離れた。

それを見計らった様にエレベーターが目的の階に到着する。

「ようこそ、いらっしやいませ」

ドアが開くと同時に黒服の男の声が聞こえてきた。

「これは真神様、桜塚様。

お久しぶりで御座います」

黒服の男は二人の顔を確認すると深々と頭を下げた。  
翔が二人分の上着を黒服の男に手渡す。

「ああ、久しぶりだな。

いつもの席は空いているな？」

「ええ、勿論です。

ご案内いたします」

黒服の男に促され二人は店内に足を踏み入れる。

ここは同ホテルの最上階にあるバーラウンジ。

完全な会員制で入れる人間は限られている。

カウンター越しに広く大きく取られた窓からは、周囲の夜景を一望する事が出来た。

一階のティーラウンジとは対照的にインテリアは全て黒を基調としている。

ゆったりとしたいいくつかのボックス席。

中央には古いグランドピアノがあり、初老の男がスローテンポの曲を弾いていた。

「どうぞ」

カウンターの一番奥の席に到着すると、黒服の男は二人を振り返った。

神威が翔の引いた椅子に座る。

「桜塚様も」

黒服の男が神威の隣の椅子を引いた。

「ありがとうございます」

軽く頭を下げると腰掛ける。

「失礼します」

それを見届けると黒服の男は下がって行った。

「ご注文はいかがなされますか？」

カウンターの前にいたバーテンダーが二人の前にコースターを差し出す。

「バーボンをロックで。」

「チェイサーは要らない」

「私はウーロン茶を」

「かしこまりました」

作業に取り掛かったバーテンダーを神威はじっと眺めている。

「たまには外で酒を飲むのも良いな」

煙草を取り出し自分で火を点ける。

一口深く吸い込むと翔に差し出した。

「お前は運転があるから飲めないんだったな」

仕方なく受け取ると口に運ぶ。

神威はにこりと笑うと再び煙草に火を点けた。

二人の紫煙がゆらりと漂う。

「さすがに星は見えないな……」

目の前に広がる夜の闇を見つめながら神威が呟いた。

「そうですね。」

屋敷と違ってここは都心部ですから」

翔もつられて闇を見つめる。

「お待たせいたしました」

バーテンダーが二人の前にそれぞれのグラスを置く。

神威はロックグラスを持ち上げて翔に笑いかける。

「お疲れ様でした」

翔もグラスを手にとると笑い返す。

「本当に疲れたな」

半分ほど口に含むと一気に流し込む。

喉を通るバーボンに熱を感じる。

「でも、熱く語る神威様は良かったですよ。」

皆に見せてやりたかった」

「余計な事は言うなよ」

神威は綺麗に並ぶグラスの中の氷を指で突付いた。  
氷はカランと音を立て崩れる。

「分かっています。」

そんな事をしたら私が鬱陶しい目に遭いますよ」

「確かにそうだな」

残りの半分を飲み干すと、少し離れた場所にいるバーテンダーに手招きする。

「ボトルと氷を置いておいてくれ」

バーテンダーは頼まれた物を置くとその場を離れた。

神威はボトルを取ると自分のグラスに注ぐ。

「大丈夫ですか？」

ペースが早いですよ」

翔が困った顔をする。

「大丈夫だ」

心配そうに見つめる翔を無視して二杯目に口を付ける。

そんな神威に軽く溜息を付く。

二人の間を沈黙が支配する。

「そういえば、神威様」

少しの沈黙の後、翔が思い出したようにジャケットの内ポケットから白い封筒を取り出す。

嬉しそうな洋介の顔が思い返される。

「ん？」

何だ？」

五杯目のバーボンを口にしていた神威は、グラスを置くと不思議そうに封筒を受け取った。  
すぐに中身を確認する。

「クラシックのコンサートか？」

「はい。」

知人に頂いたのですが…」

言い掛けてウーロン茶を一口飲む。

意を決して次の言葉を続ける。

「宜しかったら、ご一緒していただだけませんか？」

「…」

神威は無言でチケットを見つめている。

「せっかく頂いたので行きたいのですが…」

日にちが日にちなので、一人では行きにくいですし…

かと言って、他の者では間違えなく居眠りされてしまいますし…」

自然と語尾を濁してしまう。

「やはり、お嫌ですか？」

無言のままにいる神威に自然と断られた事を残念がる皆の顔が浮かんでくる。

「嫌じゃない…」

「良いぞ…」

不意に小さな声で神威が答えた。

「え？」

意外な返事に翔が気の抜けた声を上げる。

「行ってやつても良いと言ったんだ」

「良いんですか？」

驚いている翔に神威が呆れた顔をする。

「誘っておいでその態度は何だ？」

「いえ…」

きっと断られると思っていましたので…」

「そう思うなら誘うな」

「申し訳ありません…」

翔が恥ずかしそうに下を向く。

神威はくすりと笑い声を漏らすと、グラスに残ったバーボンを飲み干した。

「そろそろ帰るか…」

「そうですね」

二人は同時に立ち上がった。

黒服の男が気付き近寄ってくる。

「もうお帰りですか？」

「ああ」

「では、上着をご用意いたします」

そのまま出口の方に向かっていく。

二人も後を追う。

「どうぞ。」

真神様、桜塚様」

「ありがとうございます」

上着を受け取るとエレベーターに乗り込む。

「またのお越しをお待ちしております」

黒服の男が笑顔で頭を下げる。

「ああ、また寄らせてもらう」

神威も笑顔で返すとエレベーターのドアが閉じた。

翔は一階のボタンを押すと壁にもたれている神威を見る。

「大丈夫ですか？」

「だいぶ飲まれていた様ですが…」

「大丈夫だ」

短く答えると翔の視線を避けるように反対側の壁へ移動しようとする。

動いた拍子にカーペットに躓き足がもつれた。

「神威様！」

翔が倒れそうになった神威を咄嗟に支える。

間近にある互いの顔と絡み合う視線。

息遣いを肌に感じる程の近い距離。



「すまない…」

神威は不意に近くなってしまった距離に慌てて翔から離れる。

「いえ…」

重苦しい沈黙。

視線のやり場に困り、二人は階の表示板を見上げる。

そんな中、エレベーターはやっと一階に到着した。

「神威様、車を表に回してもらって来ます。

ここで少し待っていて下さい」

翔が近くに設置されているソファに神威を座らせた。

「ああ。

早くしろよ」

ひらひらと手を振る神威に苦笑を浮かべると翔はロビーへ向かう。

「やはり、少し飲み過ぎたか…」

翔の後姿を見ている視界がぼんやりとしてくる。

「大丈夫ですか？」

突然、横から声を掛けられた。

振り返ると赤茶の髪を持った女が心配そうに神威を覗き込んでいる。

「気分が悪そうですけど…」

「いえ、大丈夫です。

ありがとうございます」

神威が軽く頭を下げた。

「なら、良かった」

女は優しい笑顔を残してエレベーターホールの方へと去って行った。

『綺麗な女だったな…』

心の中で呟きながら女の去った方向を見つめる。

「神威様？」

「どうかなさったんですか？」

ロビーから戻ってきた翔が不思議そうに神威を見下ろしている。

「いや、何でもないさ」

立ち上がると玄関に向かう。

外に出ると既に車はスロープに止まっていた。

翔が運転席に乗り込むとエンジンをかける。

「ありがとうございます」

ドアマンがそう言いながら助手席のドアを開けた。

神威は乗り込むと自らでドアを閉める。

それを確認すると翔はゆっくりと車を発進させた。

車内には静かなクラシックの音楽が流れている。

酒の酔いと暖房の心地良い暖かさも手伝って、激しい眠気に襲われる。

「神威様、眠いんじゃないませんか？」

うとうとし始めた神威に気付き、翔が音楽のボリュームを下げる。

「そうだな。」

悪いが着くまで眠らせてもらおうよ」

シートを倒すと窓の方を向き目を閉じた。

「着いたら起こしますね」

既に眠りに落ちていている神威に笑いかける。

自宅への帰路を急ぐ為、車のスピードを上げた。

「おかえり」

蒼龍邸の玄関に着くと勝手にドアが開いた。

車の音に気付いた洋介が迎えに出て来たのだ。

「って」

ええ！？」

二人の姿に洋介が驚きの声を上げる。

自宅の駐車場に無事到着したのは良いが、神威は目を覚まさない。

「神威様、着きましたよ」

何度か声を掛けながら体を揺さ振ってみたが、一向に起きる気配がない。

途方に暮れてエンジンを切り、車から降りた。

観念して助手席のドアを開けると神威を抱き抱える。

足でドアを閉めると蒼龍邸に向かって歩き出した。

「静にしろ。」

神威様が目を覚ましてしまったらう」

翔は洋介を睨むと小声で制する。

「あ、ごめん。」

ていうか…神威、寝てるの？」

洋介が翔の腕の中の神威を覗き込む。

「ああ、そうだ。」

良いから、ドアを開けてくれ」

「ほい、ほい」

陽気な声を上げながら洋介がリビングに走って行く。

「おいおい…」

嫌な予感を感じて翔は溜息を付いた。

「なになに？」

洋介？」

洋介に手を引っ張られ引き摺られて来た匂が前方を見て立ち止まった。

「ど、どうしたの!？」

慌てて翔に駆け寄る。

「寝てるんだって」

洋介が後ろから声を掛けた。

「へ？」

寝てるの？」

「だいぶ飲んだからな」

翔の答えに旬が驚いた顔をする。

「酔って爆睡？」

「珍しいね」

「疲れていたせいもあるんだろう」

「何だよ！洋介！」

何も知らない悠が大声を上げながら近付いてくる。

「何が大変なんだ？」

後に続いて竜也が顔を出した。

「し」

洋介が右手の指を一本立て口元に当てる。

「何がし」だよ！

「つては？」

翔達に気付き立ち止まった。

「何だ？」

竜也が悠の視線の先を辿る。

同じく驚いて立ち止まった。

「良いね」

みんな同じ反応

「神威、寝てるんだよ」

自慢気に洋介が説明する。

「お酒に飲まれちゃったみたいだよ」

旬が補足する。

その言葉に悠と竜也は顔を見合わせた。

「マジで？」

「神威がか？」

二人は翔に歩み寄ると神威をマジマジと見る。

「いい加減にしろ、お前達。」

「神威様が起きてしまう」

翔は回りを一瞥すると、三階の神威の自室へ向かう。

「道を開ける」

そのまま階段を上って行く。

「匂、悪いがドアを開けてくれ」

途中で匂を振り返る。

「了解」

返事をするとう翔を追い越した。

「待つてよ」

洋介・竜也・悠も後に続き階段を上って行く。

神威の自室に着くと、匂がベットの掛け布団を捲る。

翔がそこに神威をそっと寝かせた。

「ほんとに爆睡だね」

布団を掛けながら匂が翔に言う。

「私も驚いたさ」

「でもさ。」

初めて寝顔見たかも……」

「確かに」

「人前だと眠らないからな」

洋介・悠・竜也がじつと神威の寝顔を見つめる。

「やっぱり可愛いなあ……」

ニコニコしながら洋介が神威の頬を突付く。

「こら。」

神威が起きちゃうよ」

「匂だってそう思うだろ？」

「う、うん。確かに。」

子供みたいで可愛いね」

「ていうか、女の子だな……」

「悠ったら、また……」

全員が改めてベットを覗き込んだ。

神威は皆に見られているとも知らず、安らかな寝息を立てている。

「顔がちゃつと赤くなってるよ」

再び洋介がちゃんと頬を突付いた。

「もう！洋介！」

ダメだって」

旬が洋介の手を押さえる。

「お前達、そろそろ行くぞ」

「そうだな。」

今、起きられたらヤバいしな」

翔と悠がドアに向かう。

「そのまま目を覚ましたらシメられるぞ」

竜也も後を追った。

「でもさ」

「ほら、行くよ」

まだ名残惜しそうな洋介の腕を引っ張り、旬がドアに引き摺って行く。

「おやすみ、神威」

旬はにこりと微笑むと静かにドアを閉めた。

「どんくらい飲んだんだ？」

リビングに下りると悠が翔に問い掛けた。

「バーボンをロックで五杯だ」

ソファーに腰掛けながら返事をする。

「神威がその量で眠り込んでしまうとは珍しいな」

竜也が先程座っていた窓際の席に戻る。

「いつもはボトル二本くらい飲んでも平気なのにね」

コーヒーの用意をしながら旬が言った。

「あ！」

最後に入ってきた洋介が突然声を上げる。

「どうしたの？」

旬が不思議そうに首を傾げた。

「写メ撮れば良かったな……」

呟いた洋介に全員が呆れた顔をする。

「で、例の件はどうなったの？」

洋介の呟きを聞き流し旬が翔にコーヒーを手渡す。

「成功だ」

答えるとカップを受け取った。

「マジで？」

「やったな」

悠と竜也が感心した視線を翔に向ける。

「難しいと思っていたが。」

あっさり了承された」

翔が熱いコーヒーを口に運ぶ。

「そうなんだ。」

意外だね」

旬は隣に座ると翔を覗き込む。

「何かあった？」

「いや、何も。」

何でだ？」

「ううん。」

なら、良いよ」

「？」

「ねえ？」

「買い物はいつ行く？」

洋介が二人の間に割り込んで来る。

「買い物？」

「パーティーのだよ！」

「ああ。」

「明日にでも皆で行こうね」

「よーし！」

「プレゼントは何にしようかな」

「ふざけた物買ったら、また神威に怒られるよ」

旬がまと割りつく洋介を押し退け立ち上がる。

そのままドアに向かう。

「旬？」

何処行くの？」

背中洋介の声を受けて振り返った。

パソコンを開いて見ている翔をちらりと目線を送る。

「僕も疲れたから部屋に戻るよ」

「ふん。」

じゃあ、また明日ね」

「うん。」

おやすみ」

笑顔で手を振ると部屋を後にした。

旬は自室のある二階にはすぐに戻らなかった。

三階の神威の部屋に迷わず入っていく。

ベットに近付くとしゃがみ込んだ。

「僕の前でも眠ったりしないのに…」

悲しい表情を浮かべ、寝顔を見つめる。

眠っている神威の頬に触れた。

「翔の前なら構わないんだね…」

いつもより熱い体温が指先から伝わる。

「僕じゃダメなのかな…？」

顔にかかっていた神威の髪を掻き上げると、その頬にそつと口付けた。

「ごめんね…」

やっぱり僕は…」

良い弟じゃ居られないよ…」

呟くと桜色の唇に自分の唇を重ねる。



一瞬の時間が永遠に感じられた。

旬は唇を離すと乱れた布団を直す。

「神威… 良い夢を…」

もう一度、神威の頬に触れる。

立ち上がり出口に向かう。

静かにドアを閉めると部屋を後にした。

階段を降りる途中、三階の部屋を見上げる。

唇に残る神威の感触を思い出す。

固く閉ざされたドアに神威との距離を感じ、唇を噛み締めた。





## Chapter 17

12月21日、早朝。

蒼龍邸のリビング。

「おはよう」

元気な声と共に洋介が勢いよく入ってきた。

「おはよう、洋介」

朝食の準備をしていた旬が笑顔で答える。

「あれ？みんなは？」

洋介はぐるりと部屋を見渡す。

「まだ来てないよ」

「じゃあ、今日は俺が一番乗りだ！」

右手の人差し指を掲げて明るい声を上げる。

その姿に旬は微笑んだ。

「洋介、手伝って」

「ほい！」

二人で他愛もない話をしながら、ワゴンにのった食器や料理をテーブルに並べていく。

「おはようさん」

ある程度の準備が整った所で寝呆け顔の悠が姿を現した。

「おはよ！」

洋介が悠に駆け寄る。

「朝からテンション高えな」

まとわりつく洋介を振り払ういつもの席に座る。

「おはよう。」

まだ眠そうだね」

心配そうに見る旬に片手を挙げて答えた。

「おう。」

あんま寝てねえんだよ」

「徹夜でもした？」

「いいや。」

2時間くらいは寝たかな？」

大きな欠伸をする。

「何してたの？」

「うん？」

翔とDVD見てた」

「二人で？ずつと？」

「そそ」

洋介が悠の隣に座って欠伸の真似をする。

「酒飲みながら男二人で朝まで映画鑑賞？」

寂しいね」

「うつせえよ」

寝不足で機嫌が悪いのか、ふざける洋介の頭を強めに小突く。

「痛っ！」

ひどいよ！悠！」

「お前がうるせえからだろ」

「まあまあ、二人とも。」

朝から喧嘩しないの」

旬が苦笑いで二人の間に割って入る。

「悠、コーヒー入れようか？」

「ああ、頼むよ」

「洋介は？」

「俺、オレンジジュースが良い」

「お前、やっぱガキだな。」

ていうか、そんなくらい自分でやれよ」

「ガキじゃねえよ」だ。

悠だって自分でやったら？」

「旬の煎れるコーヒーが一番美味いだよ」

悠は面倒くさそうに洋介をちらりと見ると、テーブルの上の新聞を手を取った。

「悠、嫌い！」

洋介が悠に向かって思いつきり舌を出す。

「嫌いで結構だね」

視線を新聞に向けたままで悠は素っ気無く答えた。

「朝から騒がしいな」

「せっかくの静かな朝が台無しだ」

翔と竜也が並んでリビングに入ってきた。

「おはよう」

コーヒーとオレンジジュースを持った旬が二人に声を掛ける。

「おはよう、旬」

翔が洋介の前の席に座る。

「朝からうるさい奴だな」

竜也は窓際のいつもの席に座ると、隣にいる洋介の頭を小突いた。

「ああ！竜也まで！ひどい！」

「耳元で喚くんじゃねえよ！」

今度は反対側から悠が洋介の頭を小突く。

「何すんだよ！」

馬鹿になんだろ！」

「お前はそれ以上は馬鹿にはならない」

旬からコーヒーを受け取った翔が笑顔で洋介に言った。

「翔までひどいよ」

いじけてジュースのストローをクルクルと回し始める。

「洋介は馬鹿じゃないよ。」

ただちやつと足りないだけだね」

一つ席を開けて旬が翔の隣に座った。

「旬。全然、フォローになってねえよ」

悠は新聞を置くとちらりと前を見る。

「そう？」

僕なりの最大のフォローだよ」

旬は素知らぬフリをしてサラダを取り分け始める。

「今日の旬って何かおかしくないか？」

小声で悠が竜也に問い掛ける。

竜也は悠の問いには答えずに置かれた新聞を取りながら旬に問い掛けた。

「そういえば、神威は寝てるのか？」

「さあ？」

でも今日はまだ降りてきてないよ」

壁の大時計を眺めながら悠はまた欠伸をした。

「ま、たまには良いだろな」

「そうだよ。」

普段はほとんど寝てないからね」

旬がいじけたままの洋介を見て笑っている。

「そういえば、昨日の件だが…」

翔が思い出したように口を開く。

「何？」

紅茶を飲んでいた旬がその先を聞く。

「神威様には黙っている」

「何を？」

神威の寝顔見ちゃった事？」

それとも、翔が神威を抱きかかえて帰って来た事？」

捲くし立てる様に言うと言つ直ぐに翔を見る。

その視線を受け止め翔は答えた。

「両方だ」

旬の脳裏に翔に抱きかかえられて眠る昨夜の神威が浮かぶ。それと同時に覚える嫉妬と苛立ち。

「そうだね。」

どっちにしても神威は嫌がるからね」

無理に作るうとする旬の笑顔が歪む。

皆に悟られないように立ち上がると、トレイを手にした。

ティーポットやカップ、いくつかの料理をのせ始める。

「翔。悪いけど、これを神威に持って行ってくれない？

たぶん起きてると思うから」

一通りのせるとトレイを翔に差し出した。

見下ろした視線が自然と鋭くなる。

「私より旬の方が良いんじゃないか？」

「翔が持つて行つてよ」

冷たい声に旬を見上げた翔が怪訝な顔をする。

悠と竜也は二人のやり取りをただ黙って見つめていた。

「はい、はい！

俺が持つていくよ！」

それまで黙っていた洋介が手を挙げて立ち上がった。

「旬、俺が行く！」

トレイを無理やり旬から奪う。

「でも、洋介だと神威を怒らせちゃうよ」

「旬の言う通りだな」

「朝からうるさい！黙れ！ってね」

旬・竜也・悠が一斉に反対する。

「俺、うるさくないもん！」

洋介が頬を膨らませて反論する。

「いいや、十分うるせえって！

絶対、シバかれるって！

そう思うだろ？翔？」

悠がまだ旬を見ている翔に同意を求めた。

洋介へ視線を移すと、目で必死に訴えて掛けてくる。



「良いんじゃないか？」

その答えに洋介が満面の笑みを作った。

「ただし、騒ぐんじゃないぞ」

「分かってるよ！」

ありがとね〜！翔！」

言い終えるのと同時に洋介は陽気にリビングを出て行った。

「神威が激怒しても知らないよ」

旬は席に戻ると何事もなかったかの様に食事始める。

「その時は私が責任を取るさ」

呟くように答えるとコーヒーを口に運んだ。

洋介は鼻歌を歌いながら階段を昇って行く。

神威の部屋に到着するとコンコンとドアをノックする。

「神威〜？起きてる？」

返事を待てずにドアを開けた。

「…！？」

洋介は持っていたトレイを危うく落としそうになる。

部屋の中を見た瞬間、強い違和感を覚えた。

空高くある太陽の光が差し込む室内。

すぐ近くで鳥の囀りが聞こえている。

消毒薬の匂いが鼻につく。

ベッドには青白い顔をした神威が眠っている。

左目を覆い隠す白い包帯が妙に眩しく写った。

周りには神威を心配そうに見ている翔・旬・竜也・悠。

ドアの前に立っている洋介に気付き竜也が近寄って来た。

「…」

何か声を掛けられているが、不思議と声だけが聞こえない。

『みんなは下にいたはずじゃ…？』

【過去】とは明らかに違う、時間。

【現在】とは明らかに違う、空間。

「洋介？」

神威の声に我に返る。

「どうした？」

ベッドから半身を起こしていた神威が首を傾げ、こちらをじっと見つめている。

「え？」

飛び出してしまうんじゃないかと思うくらい、心臓が激しく鼓動していた。

『今のは？』

幻覚？

それとも…

先見の力？<sup>さきみ</sup>』

初めて体験した感覚に混乱する思考がまとまらない。

『俺は先見の力を継がずに生まれたはず…』

疑問と確信が交互に浮かぶ。

『なのに…なぜ？』

先程見たビジョンがリアルタイムのモノでない事だけは本能で理解できる。

「いつまでそんな所に立っているつもりだ？

中に入ったらどうだ？」

神威が困ったように笑った。

その笑顔に必死で平静を装い、ぎこちない動作でベットに歩み寄る。  
「朝ご飯、持ってきたよ」

絞り出した声が上ずってしまふ。

「そうか。」

「ありがとう」

「う、うん」

ベッドの歩み寄り、サイドテーブルにトレイを置く。

傍の椅子を引き寄せると前屈みに腰掛けた。

「二日酔いはしてない？」

頭に浮かぶ思いを必死で振り払う。

「大丈夫だ。」

ただ：寝過ぎたせいで少しだるいかな」

「そうなんだ…」

紅茶をカップに注ぎ神威に差し出す。

神威はそれを受け取らず洋介の手の甲に触れる。

「震えているぞ」

真っ直ぐに見つめられ洋介は俯いてしまふ。

「緊張してるんだよ…」

「珍しく神威と二人きりだからさ」

「ありきたりな言い訳だな」

神威はカップを取ると微笑んだ。

暖かい紅茶の香りが心地良く感じる。

「ところで、お前は済ましたのか？」

「え？」

「朝食だ」

「あ！忘れた！」

「まだ途中だったんだよ！」

無邪気な答えに神威はわざと呆れた顔を作った。

「普通は忘れないだろ？」

「だって！みんなが苛めるんだもん！」

「いつもの事だろ？」

顔を上げた洋介が大きく頬を膨らませる。

神威はカップをサイドテーブルに置くと、優しく洋介の頭を撫でた。

「お前の分も持って来い。」

一緒に食べよう」

「え！？

ホントに！？良いの！？」

途端に明るい笑顔に戻る。

「ああ。早くしろ。」

でないと、一人で食べてしまうぞ」

「うん！」

洋介は立ち上がると飛び跳ねるようにしてドアに向かう。

一度振り返ると満面の笑みで親指を立てる。

「待つてて、神威！」

慌しい音を立てながら、そのまま一階へ降りて行った。

騒々しい足音がリビングに響き渡る。

その音を聞きながら竜也が翔に視線を送る。

「秒殺、だな」

悠が欠伸をしながらドアの方を見た。

それと同時に洋介がリビングに飛び込んでくる。

周りを見向きもせずトレイを掴むと、自分の席にあった料理や飲み

物をのせていく。

「何してんだ？」

洋介の服の裾を引っ張りながら悠が問い掛ける。

「やめてよ！」

「何してんだって聞いてんだよ」

「見たら分かるでしょ？！」

慌てた様子に皆が首を傾げる。

旬は立ち上がると洋介の隣に回りこむ。

「洋介？怒られなかったの？」

「うん！」

「だって騒がなかったもん！」

得意気にVサインを送る。

「それは偉かったね。  
で。何してるの？」

穏やかな笑顔を洋介に向けながら頭を撫でた。

「あのね、匂！」

さつき、神威も頭撫でてくれたよ！

そんで！一緒に朝ご飯食べようって！」

四人が顔を見合わせる。

「神威が？」

「そう言ったの？」

「そうだよ！」

だから、早く自分の分も持って来いって！」

のせ終わると再び周りも見ずに急いでリビングを出て行った。

「奇跡だな」

竜也がコーヒークップを眺めて呟いた。

「洋介が騒がなかったのも奇跡だけだよ…」

神威が洋介の頭撫でて、しかも二人で飯食うなんてなあ」

「奇跡よりも稀な事だ」

「恐ろしいくらい、優しいよな？」

匂は席に戻ると二杯目の紅茶をカップに注ぐ。

「何か心境の変化でもあったんじゃないの？」

「心境の変化ねえ…」

悠がドアの方を今度はまじまじと見つめる。

「神威、昨日からおかしかったしね」

黙ったまま食事を続けている翔の横顔を匂がちらりと見て言った。

洋介が三階に戻ると神威は窓際のテーブルに朝食を並べていた。

「神威！持ってきて来たよ！」

トレイを抱えてテーブルに駆け寄る。

「そんなに急ぐな。」

「トレイごと転ぶぞ」

「だって！」

神威が早くって言ったんじゃん！」

「そうだったか？」

「さあ、こっちに座れ」

椅子に座ると向い側の席を指差す。

洋介は「はい！」と元気良く返事をしてトレイをテーブルに置く。座ろうと椅子に手を掛けた時、何気なく窓に視線を向けた。

「え！？」

心中の驚きが声になって出てしまった。

磨かれた窓ガラスに写った自分の顔は【現在】とは明らかに違っていた。

耳の辺りまでしかないはずの金色の髪は肩まで伸び、頬にはないはずの大きな傷がある。

傷は斜めに入り完治していない様で薄っすらと血が滲んでいた。目の下の濃いクマが強い疲労を表している。

「何だよ、これ？」

洋介が窓ガラスを凝視したまま呟く。

「どうしたんだ？」

いつの間にか神威が隣に立ち心配そうに洋介を見ている。

「洋介？」

「神威？」

ぎこちなく神威に顔を向けた。

「俺……」

今日、何か変かも……」

それだけ言うのがやっとで俯く。

「何があつた？」

神威の手が洋介の肩に触れる。

「何を見た？」

その言葉に洋介が顔を上げた。

「先程、部屋に入ってきた時。

そして、今。

何か見えたんじゃないのか？」

穏やかな口調で神威が問い掛ける。

洋介は黙つたままだ。

触れた手から神威の体温が伝わってくる。

説明したいのに混乱が言葉を奪つていく。

「無理には聞かない。

ただ……

とりあえず、食事をしないか？」

洋介の混乱を察知したのか、神威は話題を一時逸らす。

「さあ、座つて」

両肩に手を置くと座るように促す。

「う、うん……」

やっと出せた言葉はそれだけだった。

座つたのを確認すると神威はトレイにのせられた物を洋介の前に並

べていく。

洋介はもう一度、真剣な目で窓ガラスを見つめた。

先程見えた顔は跡形もなく消えている。

並べ終わると神威は自分の席に着く。

「お前に真剣な顔は似合わないぞ」

「え？」

掛けられた言葉にぽかんと口を開けた。

「そうだ。」

お前にはその間抜け顔の方が似合っている。  
さあ、食べよう」

くすりと笑うとカップを手にした。

「ひどいよ…」

洋介が力なく抵抗する。

「事実だろ？」

「俺だつてたまにはマジになる事だつてあるよ…」

「ちゃんと分かっているさ」

前を見ると神威は優しく笑っている。

その笑顔に混乱が解けていく。

「食べないのか？」

神威が大袈裟に顔を傾ける。

「食べるに決まつてるじゃん！」

フォークを掴み無造作にサラダに突き刺す。

そのままフォークの先の野菜を口に放り込む。

「洋介。」

昨日の事なんだが…」

もごもごと口を動かしながら神威を見る。

神威は照れくさそうに視線を窓に移した。

「実は…」

帰つて来た時の記憶がないんだが…」

慎重に言葉を選ぶように先を続ける。

「私は…」

何かしなかったか？」

微かに頬が赤らんでいる。

洋介はそんな神威を可愛いと心から思う。

気が着くと混乱は姿を消していた。

「あのね！

…あ！」



帰って来た時の状況を説明しようとした時、下にいる四人の怒った顔が浮かぶ。

「え〜っと…」

『正直に話したらみんなに怒られちゃう…』

「普通に自分で部屋に戻って寝ちやったみたいだよ」

ぎこちない言葉に神威が疑いの視線を向けてくる。

「本当か？」

「本当だよ！」

俺と旬と竜也はリビングにいて、悠は部屋でDVD見てたみたいでさ。

誰も帰ってきたのに気付かなかったんだよ！」

嘘をつくのが下手な洋介は自然と声が大きくなる。

「で、翔は悠の部屋に行つて一緒に朝まで映画鑑賞してたんだつて！」

神威は黙ったまま、じつと洋介を見つめていた。

誤魔化す様に洋介は両手を広げおどけてみせる。

「キモいよね〜？」

男二人で朝まで映画鑑賞なんてさ！」

「確かにキモいな…」

微かに笑うと神威はフォークを手にした。

オムレツを口に運びながら、窓ガラスをちらりと見る。

その様子に気付いた洋介は黙り込んでしまった。

沈黙のまま、一通り食事を終わると神威が煙草に火を点けた。

目の前に紫煙が漂う。

オレンジジュースを口にしていた洋介がこほんと咳払いをする。

「すまない。」

煙たかったか？」

「うつん、そうじゃないよ…」

そうじゃなくて…」

必死に言葉を選んでいる様子の洋介を神威が再び見つめる。

「あのさ…」

適切な言葉が見つけれられないのか、洋介は下を向いてしまった。それでも神威は黙って次の言葉を待つ。

「あのさ…」

神威は最初に力がさ…」

決心したように拳を握り締め神威を真っ直ぐ見つめる。

「神威は最初に力が発動した時、どう思った？」

発した言葉がちゃんと伝わったのか心配になってしまう。

神威は持っていた煙草を灰皿に押し付けた。

「初めて力を使った時は怖かった」

意外な答えに洋介が驚いた顔をする。

静かな声で神威は先を続ける。

「自分にはこんな力がある。」

自分は普通の人間とは違う。

そう思うと自分一人だけが世界から取り残されたような気になつて…」

遠い目で軽い溜息を付く。

「無性に怖くなった」

次の煙草に火を点けると深く吸い込んだ。

その様子を洋介は真剣な表情で見つめる。

「神威も怖いつて思う事もあるんだね」

「当たり前だ。」

普通ではないが、一応は人間だからな」

「そうだったね」

互いに笑いあう。

そのやり取りに緊張がほぐれた洋介は身を乗り出す。

「怖いつて気持ちはどうやって消したの？」

「消えてなんかないさ」

「え？」

「そうなの？」

「そんな風には見えないか？」

悪戯な笑みを浮かべる。

「今でも怖いと思う気持ちは変わらない。

しかし、その気持ちに負ける訳にはいかない」

窓の外を見ながら神威は何かを思い出しているようだった。

「自分の力に対する恐怖はどうやっても消せなかった。

だが、恐怖に負ければ力を制御出来なくなる。

そうなれば自分はもちろん、周りの者も傷つけてしまう。

そんな事になれば恐怖は更に大きくなる。

やがて、完全に飲み込まれてしまう」

そこまで言うと洋介に顔を向ける。

「そうならない為に。

恐怖に負けない為に。

日々の鍛錬を怠らないんだ」

煙草を消すと洋介の頬に右手を当てる。

「私だけじゃない。

翔、旬、悠。

そして、竜也だって。

そう思っているはずだ」

「竜也も？」

「ああ。

お前の兄もだ」

そのまま洋介の頬を軽く摘む。

「お前だけじゃない。

それに……」

優しく笑う。

「お前が恐怖に負けないように、支える為に私達は傍にいたんだ」  
その言葉に洋介の目に涙が浮かぶ。

「どんな時でも決してその事を忘れるな」

落ちた涙を拭ってやると、洋介は何度も頷きながら子供の様に笑った。

「おい？」

ドアの向こうから悠の暢気な声が聞こえてくる。

「神威？洋介？」

心配そうな旬の声が続く。

「騒いだせいでやられたんじゃないのか？」

「そうかもしれないな」

竜也と翔の推測がドア越しに丸聞こえだ。

神威はゆっくりと立ち上がるとドアに向かう。

一拍の間を開け勢いよく開けた。

苦笑を浮かべた神威の前に驚いた四人の顔が並んでいる。

「悪いが洋介は無事だぞ」

窓際の椅子に座る洋介を指差した。

四人はばたばたと窓際に向かい、無言で取り囲む。

俯いている洋介を覗き込んだ。

「お前、泣いてんのか？」

悠が洋介の頭を小突く。

「泣いてなんかないよ！」

鼻を真つ赤にした洋介が反抗する。

「神威ったら…」

怒ったの？」

旬が振り返って問い掛けてきた。

「神威は怒ったりしてないよ！」

俺が勝手に泣いただけだよ！」

立ち上がった洋介に押され悠がよろめく。

「やっぱ泣いたんじゃない？」

「うるさいな」

二人のやり取りを微笑みながら見ていた神威に翔が視線を向けた。

「少しだけ昔話を聞かせてやっただけだ」

そう言っと、何となくその視線を避けるように神威は部屋を出て行くとする。

「竜也。」

洋介に力の制御や使い方を教えてやれ」

竜也が不思議な顔で神威と洋介を交互に見る。

「まあ、そういう事だ」

神威は右手をひらひらさせながら部屋を後にした。

「やったな！」

「これから勝負だな！」

神威が部屋を出ると、やっと意味を悟った悠と竜也が歓声を上げた。

「頑張るよ！！」

洋介が自慢気にピースサインを作る。

「途中で根を上げるなよ」

翔は優しく洋介の頭を撫でる。

「えへへ。」

今日は朝から頭撫でられてばっかだ」

「たまには良いだろう？」

竜也が洋介の肩を抱く。

「本当に騒がしい奴らだな」

階段を降りる神威は小さく呟くと柔らかな表情を浮かべた。

蒼龍邸が明るい雰囲気包まれている。

だが、旬だけは神威の後姿を見送ったまま笑ってはいなかった。





## Chapter 18

12月23日、夜。

街は派手な装飾に色取られている。

赤、緑、白…

クリスマスカラーに染められた街は、そこにいる人々に賑やかな気分を与えていた。

「〜」

何処からか聞こえてくるクリスマスソングに合わせ、前を行く洋介がスキップしている。

「何にしようかな？」

時折、店の前に立ちショーウィンドウを覗き込んでいる。

しかし、なかなか決められないようで、すぐにまたスキップで先へと進んで行く。

旬・竜也・洋介・悠は明日の為の買い物に出てきていた。

一通りパーティー用の買い物は済ませたのだが、神威の誕生日プレゼントを選ぶのに一行はかれこれ3時間ほど街中をウロウロしている。

「おい！まだかよ！」

疲れた悠がうんざりしたような声を上げた。

「だって！」

久しぶりなんだから！喜んで欲しいんだもん！」

「気持ちに分かるけどさ。

いい加減に決めるよ！」

悠は洋介の頭を小突く。

「楽しそうだな」



そんな二人を後ろから眺めていた竜也が呟いた。  
「だね」

隣にいた旬が呟きに返答する。

「あれから洋介と話したのは？」

「ああ」

少しだけな」

並んで歩く竜也を見ると、眼鏡越しに少し寂しそうな目をしていた。

「洋介！悠！」

突然、旬が二人を呼び止めた。

「何？」

振り返った洋介がこちらに走ってくる。

「僕と竜也は少し休憩していいかな？」

ちよつと、疲れちゃったから」

旬が隣の竜也をチラリと見る。

「プレゼントはまだ決まってるんだろ？」

「良くなって思うのがいっぱいあり過ぎてさ。

決められないよ」

すぐ横にあるカフェを旬が指差す。

「なら、僕達はそのカフェでお茶するから。

1時間後に合流するってのは？」

「俺も休憩したいんだけど」

追いついてきた悠が間に入ってくる。

「悠は洋介のお守りしてくれないと。

一人にすると迷子になっちゃうよ」

旬が諭すように悠の肩をポンポンと叩く。

その仕草に何かを察したのか、悠は大きく溜息を付いた。

「はいはい、分かったよ」

そのままキョトンとしている洋介の腕を引っ張って行く。

「何だよ」

痛いよ！悠！」

「うるせえな！行くぞ！

なら1時間後な」

空いている大きな手をヒラヒラさせながら、二人は雑踏の中に消えて行った。

残された二人は並んでカフェに入る。

店内は思ったより空いていて、席を見付けるのも容易だった。

「何にする？」

旬が少し離れたレジの後ろにある大きなメニューを指差す。

「エスプレッソ」

簡潔に答える竜也に旬は苦笑する。

「頼んでくるから。」

先に席に座っててよ」

竜也は無言で頷くと窓際の喫煙席に腰掛けた。

ガラス越しの外に目をやると、イルミネーションが異様に眩しく感じる。

行き交う人々の顔は皆が笑顔で幸せそうだ。

堪らなくなつてポケットの煙草を取り出し火を点けた。

紫煙でガラスの向こうが霞んで見える。

「珍しいね、煙草」

トレイを抱えた旬が向かいの席に座る。

「たまにはな…」

差し出されたエスプレッソを口に運ぶ。

口の中に心地良い苦味が広がる。

「クリスマスだね」

外を見たままの竜也に旬が問い掛ける。

「そうだな」

煙草を灰皿に押し付けると旬に視線を移した。

「悠にはちよつと悪い事したね」

生クリームのがったココアを熱そうに飲んでいる。

「それで？」

「何を話したの？」

真っ直ぐな匂の視線を受け止める。

「これからの事を少しな。」

鍛錬の内容や先見の心構えとか」

「ふん。」

洋介は真面目に聞いてくれた？」

「今までよりはな。」

だが、分かったのかは怪しいな」

少しの間を置き、次の煙草に火を点ける。

「分かってもらわないと困るんだがな…」

溜息と共に紫煙を吐き出す。

「僕も貰うよ」

匂はテーブルに置かれた煙草を取る。

「お前も珍しいな」

ライターの火を匂に差し出す。

「たまにはね」

二人の吐き出す紫煙が宙を漂う。

「洋介の力は俺よりも遥かに強い」

意を決して竜也が話し始める。

再びガラスの向こうに視線を移す。

匂もつられて外を見た。

「あまりに強いせいで、幼い頃に母が封印を施した。  
緋焰神社の土地の力と連動させてな。」

強い力を借りねば、洋介に封印は施せなかった」

「先見の力は、時には見たくないモノも見えてしまう…」

「ああ。」

洋介は純粹だ。

そのせいで幼い頃は大変だった。

あのままだと間違えなく、精神的な崩壊を招いていた」

半狂乱で泣き叫ぶ幼い頃の洋介が脳裏に浮かぶ。

「実力から言えば如月の当主は洋介の方だ。

しかし、あいつは優しすぎる。

だからこそ、もし身近な者の死が見えてしまったら……」

「絶えられない」

「そんな事では当主は務まらない。

何よりも……」

「精神が持たない」

脳裏にある洋介がこちらに手を伸ばしてくる。

「俺は何もしてやれなかった。

俺自身、力に戸惑っていたからな」

その手を取ってやる事がどうしても出来なかった。

洋介同様、自分も幼かった。

支えてやれる程の余裕はなかった。

この世でただ一人の、大切な弟なのに。

「だから、洋介の代わりに当主になったの？

洋介が苦しまなくて良い様に」

その言葉に前を向くと、匂は優しい視線を向けている。

幼い頃に助けてやれなかった罪悪感がいつまでも消えない。

そのせいで洋介とは何となく距離を置くようになってしまった。

そんな自分に出来る事は、洋介が背負うはずだった宿命を代わりに背負う事。

だからこそ自分が如月当主になり、緋焰神社<sup>ひえん</sup>の結界の守主となった。それが自分なりの償いだった。

「洋介には幼い頃の記憶がない。

それに、今はまともに力も使えない。

自分は力を継がずに生まれてきたと思っている。

だからこそ、今まで生きてこられた」

封印によって力を使えなくなった洋介。

初めて見た、無邪気な笑顔を今でも鮮明に覚えている。

「だが、さすがに歳を追う毎に封印の力が弱まってしまった。

俺の力では再度、封印を施してやる事は出来ない」

「それほど、洋介の力は強大なんだね」

「恐らく自分では制御出来ないだろう」

確実に近付いている未来に二人は深い溜息を付いた。

「俺は…

洋介には今のままでいて欲しい」

一口残ったエスプレッソを飲み干す。

「緋焰神社の結界が破られたら…

洋介の封印も完全に解かれる。

そうなれば、洋介自身が望まなくとも…

今のままではいらなくなる」

封印が完全に解けてしまったら…

洋介はどうなってしまうんだろう？

自分はその時、洋介を支えてやれるのか？

どんな事になっても洋介を守ってやれるのか？

疑問が浮かぶ。

眼鏡の向こうの瞳に力を込める。

…その為に自分は強くなろうと鍛錬してきたんだ。  
次はどんな事があるうとも、必ず伸ばされた手を握ってやると誓ったんだ。

二人が同時にガラスの向こうを見た。

そこには、大きな包みを抱えた洋介と小さな紙袋を下げた悠が通りを横切ろうとしている。

少しずつカフェに近付いてくる二人は何やら言い争いをしていた。

「まったく緊張感のない奴だ」

洋介を見ながら竜也は微笑んだ。

「そこが洋介の良い所だよ」

旬も洋介達に向かつて笑みを送る。

「俺があいつに教えてやれる事は少ないが…」

年が明けたら、本格的に洋介の鍛錬を始める。

だが、あいつは俺の前では強がるだろう。

それで…

もし、あいつが辛くて泣き言を言ってきたら…」

「その時は優しく鞭打ってあげるよ」

「俺より手厳しいな」

竜也はテーブルの上の煙草をポケットにしまうと立ち上がった。

トレイを持って旬も立ち上がる。

レジ横のダストボックスにトレイを置くと出口に向かう。

「みんながいるから大丈夫だよ」

出口の壁にもたれて待っていた竜也の肩を叩く。

そのまま店の前に到着した二人の元へ歩き出す。

「お前は大丈夫なのか？」

不意に竜也が旬の後姿に声を掛けた。

旬は振り向かず手を上げピースサインを作る。

「ある意味、お前が一番心配だ」  
苦笑を浮かべると竜也は三人に合流した。

「その包みの中身って何なの？」  
旬が洋介に問い掛けた。

かなり大きな物で抱えている洋介の背丈ほどはある。  
包みには赤・緑・白のリボンが掛けられていた。

リボンの中央には『Happy Birthday! & M  
arry Christmas!』と書かれたメッセージカードが  
下げられてある。

恐らく洋介が書いたのだろっ、お世辞にも綺麗な字とは言えない。  
それでも祝ってやりたいという気持ちは十分に伝わってくる。

「知りたい？」

嬉しそうに包みを掲げる。

「あのね！」

サンタクロースだよ！」

「え？」

自慢気に答える洋介を旬と竜也がマジマジと見つめる。

「だから！」

サンタクロース！」

「バゝカ！」

ちゃんと説明しないと分かんないだろうが？」

悠が間に割って入る。

「そっか！」

あのね、サンタクロースのおじいちゃんの人形だよ！」  
旬が不思議そうな顔をする。

「人形？」

「そう！」

すごいリアルな顔をしててね！」

近付くと踊りながらフオフオって笑うんだよ！」

「それが神威への誕生日プレゼント？」

「うん！」

「すごく可愛いし！」

「面白いよ！」

旬と竜也が後ろを歩いていた悠を振り返る。

「俺は止めたよ。」

「それも、かなりね」

悠は大袈裟に首を傾けた。

「でも、こいつ聞かねえんだもん。」

止めれば止めるほど、店の中でギャーギャー喚くしよ」

「大変だったね…」

旬の哀れみの視線を振り払うように悠は先を追いついて行く。

「まあ、いいって事よ」

「でも、まずいんじゃないのか？」

竜也が悠の横に並ぶ。

「ふざけてんのか！？って怒り出したら迷わず洋介を差し出すさ」

「それが良いな」

「それに、プレゼントはアレだけじゃねえし」

下げていた紙袋を揺らす。

「それは？」

旬が紙袋を覗き込んだ。

中にはシンプルに包装された小さな包みがいくつか入っている。

包みの一つだけには、太めの赤いリボンが掛けられていた。

「あとのお楽しみ」

悠は紙袋を後ろにやると、周りを見渡す。

「ていうか、腹へった」

「何か食わねえ？」

「俺も」

「腹へったあ」

四人は立ち止まり並ぶと顔を見合わせる。



「すぐそこに美味しいイタリアンのお店があるよ」

旬が通りの向こうを指差した。

「そこなら予約してなくても、僕達なら席を作ってくれるよ」

「何で？」

首を傾げる洋介に旬は悪戯な笑みを浮かべる。

「神威と翔がよく使ってるからね」

三人が同時に「なるほど」と頷く。

「さあ、行こう」

旬を先頭に皆は歩き出した。

店の外観は古いレンガ造りの洋館風だ。

周りの近代的なビルとは様子が違っているせいで目立っていた。

看板には西洋の城の絵と『リストランテ モルジエクス』と筆記体で書かれている。

「いらつしゃいませ」

扉を開けると黒服姿の女性が笑顔で出迎えてくれた。

広い店内にはクラシックが流れ、照明は薄暗い。

全体が静かな雰囲気包まれている。

「真神です。」

予約はしてないんですが、席は空いてますか？」

代表して旬が問う。

女性は一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに深く頭を下げると再び笑顔を浮かべる。

「いつも、ありがとうございます。」

四名様ですね？

すぐにお席をご用意致しますので、少々お待ち下さい」

「お願いします」

旬も頭を下げると、女性は頷き店の奥へと消えて行った。

「俺、ここ来たの初めて」

「俺も」

悠と洋介が待合の為に設置されたソファに腰掛ける。

「俺は二度、来た事がある」

竜也が洋介の隣に座る。

「何で!？」

「仕事の後に、神威と翔と旬の四人でな」

「いいな」

「お前は騒ぐから連れて来てもらえなかったんだ」

「じゃあ、俺は？」

「こいつと同類？」

悠が拗ねた顔を竜也に向ける。

「たまたま機会がなかったんだよ」

困った表情を浮かべた竜也に旬が助けを出した。

「お待たせいたしました。」

「ご案内致します」

先程の女性が戻って来ると、店内を指し示す。

四人は後を追って店内を進んでいく。

グレーの絨毯に白い壁。

あちらこちらにアンティークの木製家具や金属製の調度品が飾られていた。

ゆったりとした感覚で並べられたテーブル全てには白いクロスが掛けられている。

「こちらのお席になります」

一番奥のテーブルに着くと女性は頭を下げた。

「ありがとう」

旬は椅子を引こうとしたウェ이터を無言で手で制した。

四人は自分で椅子を引き席に着く。

「飲み物は全員、ミネラルウォーターで。」

「食事はシェフにお任せします」

旬が簡潔に指示を出す。

「お嫌いな物などはございませんか？」

「大丈夫です！」

代わりに洋介が返事をする。

女性は微笑むと「かしこまりました」と厨房へ向かった。

「で？」

その紙袋は何？」

悠の足元に置かれた紙袋を旬が指差した。

「先に飯食ってからな」

「もったいぶるね」

「これも洋介が選んだんだけどさ。」

こいつにしてはまともな物だからな」

悠は隣にいる洋介の頭を撫でた。

「へえ」

それは楽しみだな」

「悠が褒めるくらいだから、確かにまともなんだろうな」

旬と竜也は洋介に笑顔を向ける。

洋介は皆の珍しい反応に照れくさそうにはにかんだ。

「失礼いたします」

話している内にウェイターが最初の料理を運んできた。

「じゃあ、食べよっか？」

旬の言葉で食事が始まる。

「ふう」

お腹いっぱい」

洋介がポンポンとお腹を叩きながら幸せそうな声を上げる。

「あれだけ食べれば満足だろう」

食後のコーヒーを飲んでいた竜也が呆れた顔をする。

「旬と竜也があんまり食べないからだよ！」

美味しいのに！もったいないじゃん！」

二人を指差す。

「僕達は洋介と違って少食なんだよ」

紅茶を飲みながら旬が笑う。

「そろそろ良いんじゃない？」

悠が洋介に紙袋を手渡した。

「では！」

お楽しみ解<sub>く</sub>禁！」

小さな包みを一つずつ全員の前に置いて行く。

「僕らに？」

「神威にじゃないのか？」

旬と竜也が包みをじっと眺めている。

「みんなにも！だよ！」

ささ！開けてみてよ！」

洋介が手を広げて促す。

悠をチラリと見ると親指を立ててウィンクしている。

「あ！」

「お！」

包みを開けた二人は同時に声を上げた。

包装紙に包まれた箱の中に入っていたのは、銀製のバングルだった。幅は2cm程で二人の可愛い彫刻の天使が互いに手を伸ばしている。

二人の間にはハートを象った黒い石が埋め込まれていた。

「オニキスなんだって！」

洋介が二人の前で右手を振る。

その腕には既に同じバングルがはめられていた。

「オニキスはね。」

戦士のお守りなんだって！

それに！

ネガティブをポジティブに変える力があるんだって!」

「俺達にピッタリだろ?」

言いながら悠も右手を上げる。

「神威と翔とでみくんなお揃い!」

洋介が満面の笑みでピースサインを作った。

二人は顔を見合わせるとバングルを右手にはめる。

「洋介にしては上出来だな」

「そうだね。」

きつと神威も喜んでくれるよ」

四人はテーブルの中央で右手を合わせた。

「寒くないか?」

その頃。

神威もまた街に来ていた。

雑踏の中、隣を歩く黒髪の少年に声を掛ける。

「うん、大丈夫」

少年は笑顔で答える。

「もうすぐ着くからな」

「うん」

そのまま目的の場所を目指して歩いて行く。

『リストランテ モルジエクス』

店の前に到着すると神威は迷わず扉を開けた。

「いらつしゃいませ。」

お待ちしております」

先程と同じように黒服姿の女性が笑顔で出迎える。

「お席へご案内致します」

二人は前にいたウェ이터に上着を手渡すと女性の後を着いて行く。  
窓際の席に着くと引かれた椅子に腰掛けた。

「ありがと」

少年が女性に頭を下げる。

女性はそれに笑顔で答えた。

「飲み物は何が良い？」

神威が少年に問い掛ける。

「ペリエのライム入り」

周りを見渡ししながら少年は答える。

「なら、私もそれで良い」

「かしこまりました」

女性は深く礼をすると下がって行った。

「奏多、好き嫌いはなかったな？」

「うん」

神威は向かいに座る少年・奏多・の答えに微笑んだ。

「何？」

奏多が不思議そうな顔をする。

「奏多は『うん』ばかりだな」

「うん。」

あ…」

黒い瞳を恥ずかしそうに伏せる。

奏多。

青白い肌に黒い髪。

まだ幼さの残る顔に大きな黒い瞳。

体の線は細く、身丈も神威より少し低い。

歳はおそらく16か17くらいだろう。

神威がちゃんと知っているのは名前と携帯番号くらいだ。

名前に関しては本人から聞いたもので、実際に本名かどうかは分からない。

神威と奏多が初めて出会ったのは、一年前のちょうど今頃。  
何故か理由は分からないが、昔から冬が嫌いだった。

冷たい風を感じると無性に苛立ちが込み上げてくる。

その日は朝からとても寒かった。

そのせいで仕事が終わるとすぐに翔を帰した。

どうしても、一人になりたかった。

苛立ちを抑え切れず、翔に当たってしまったのは嫌だったからだ。

イルミネーションの輝く街を一人あてもなく歩いていると、周りのカップルや家族連れの浮かべる幸せそうな笑顔が腹立たしく思えてくる。

神威は堪らず人気のない路地に入った。

しばらく行くと前方から激しい怒声が聞こえてくる。

「おい！聞いてんのか！」

「ぶつかったら『すいません』って言うのが礼儀だろうが！」

「ガキが！そんな事も知らねのか！」

少し進むと川沿いの広い場所に出た。

そこにはいかにも柄の悪い男三人がまだ幼げな少年を取り囲んでいる。

大方、軽く肩でもぶつかった事に因縁を付けてるのだろう。

「黙ってねえで何とか言え！」

一番、大柄の男が少年の胸倉を掴んだ。

華奢な少年の体が宙に浮く。

それでも少年は目を逸らさずに男をじっと見ている。

「やっちなえ！」

残りの二人が声を揃えた。

調子にのった大柄の男が右の拳を振り上げる。

「！！！」

拳が振り下ろされる事はなかった。

神威が男の腕を掴んでいた。

「手を離してやれ」

そのまま掴んだ手に力を込めた。

「ギャ！」

男が情けない声を上げた。

「聞こえなかったか？」

その手を離してやれ」

低い声でもう一度、繰り返す。

「離さないのなら、このまま腕の骨を砕く」

更に力を込める。

「いいのか？」

「分かった！」

離す！離すよ！」

男は少年を掴んだ腕を引っ込めるとその場にへたり込む。

「何だ！？この女！？」

「このガキの連れか！？」

呆気にとられていた二人は我に返り、矛先を神威に向けてきた。

「醜いな」

神威はわざと大きな溜息をつく。

「ああ！？」

一人が今度は神威の胸倉を掴もうとする。

神威は逆にその手を掴むと、男の腹に思い切り膝蹴りを食らわす。

男は呻き声を上げながら蹲った。

「不様だな」

男を見下ろしながら神威は再び溜息をついた。

「まだ、やるつもりか？」

三人に冷徹な目線を送る。

「やらないのなら、今すぐ此处から消えろ」

その言葉に三人は奇声を発しながら走り去って行く。

神威はその後姿を黙って見送った。

「ありがとう」

後ろから少年の小さな声が聞こえる。

「構わない。

ただ……」



振り返って少年を真っ直ぐに見つめる。

「そのナイフをしまえ」

「気付いてたんだ」

悪戯を見付かった小さな子供の様に舌を出す。

コートの袖に隠れてはいるが、手にはしっかりとバタフライナイフが握られている。

「お前の殺気に気付かないアイツ等の方がおかしいんだ」

「お前じゃないよ。」

僕は奏多

少年は自らの名を言うと、ナイフを畳みポケットにしまった。

「僕を助けてくれて…ありがとう」

奏多がもう一度、礼を口にする。

「アイツ等を助けてあげてありがとう、だろ？」

二人はくすりと笑いあう。

いつの間にか、神威の苛立ちは消えていた。

あれから一年。

二人はたまに会っている。

大抵は奏多が誘ってきて神威の都合に合わせていた。

「失礼します」

ウェイターが前菜を運んできた。

奏多は目の前に置かれた皿を珍しそうに眺めている。

「食べないのか？」

「綺麗だね」

につこりと笑うとフォークを手にした。

「いただきます」

丁寧にお辞儀をすると前菜を口いっぱいに頬張る。

その姿を見ていると、殺気を漲らせナイフを握り締めた少年と同じとはとても思えない。

奏多は不思議な子だった。

普段は口数は少なく、物静かでのんびりしている。

だが、ふとした拍子に別の顔を見せた。

寂しい顔。

初めて会った時の冷酷な顔。

ひどく大人びた顔。

異様なほど無表情な顔。

この子が普段はどんな生活をしているのか？

多少は気になるが、本人が自ら話さないのだから知られたくないのかもしれない。

神威も自分の事を詳しく話すつもりはないので、何も聞かない事にしている。

その内、聞いて欲しくなったら自ら話すだろう。

何よりも…

奏多には接した相手にそう言う細かい事を気にさせない様な雰囲気がある。

一言で言えば、

『透明な水』

そんな印象だった。

奏多と過ごす時間は心地が良かった。

おそらく、互いの事を全く知らないせいで色々と考えなくて済むせいもあるのだろう。

知らないからと言って互いに詮索のし合いはしない。

ただ飾らずにありのままが良い。

それが無性に心地良くて…

正体の分からない相手なのに、こうして会う事が出来るんだと思う。

「おいしい」

奏多は運ばれてくる料理を次々に平らげていく。

「良かったな」

ペリエを飲みながら神威はその姿を眺めている。

「お姉さんはあんまり食べないね」

まだ料理の残ったままの皿を指差す。

「私の事は気にしなくて良い」

答える代わりに奏多は皿に残った最後の肉を口に入れた。

奏多にはこちらの名前は教えていない。

『神威』という名は知っている者が聞けば、すぐに正体がかつてしまう。

こんな子供相手なら大丈夫だとは思うが。

最初に会った時、名乗ろうとしない神威に奏多は笑って言った。

「名無しは困るから……お姉さん」で良いよね？」

普通は名前を知りたがるものだが、奏多はそれ以上は聞いてこなかった。

それ以来、神威は『お姉さん』と呼ばれている。

「雪、降らないかな？」

一通り食べ終えた奏多が窓の外を見ながら呟いた。

「今年は寒いからな。」

もしかしたら、降るかもしれないな」

神威も窓の外に視線を送る。

「雪、好きだな」

「なら、降ると良いな」

他愛もない会話と静かに流れて行く時間。

「失礼します。」

デザートをお持ちしますが、お飲み物は紅茶とコーヒーはどちらがよろしいですか？」

気が付くとウェ이터が隣に立っている。

「私はデザートはいらない。」

飲み物はコーヒーで」

「僕は紅茶」

ウェイターは「かしこまりました」と礼をして下がって行った。

「ちょっとトイレ行ってくるわ」

悠は席を立つと出入り口近くにあるトイレに向かう。

店内を横切ろうとした時、視界の端に窓際の席が写った。

「は？」

そちらに顔を向けると、そこには無邪気にデザートを頬張る少年とそれを優しく見守る神威がいる。

「マジかよ？」

トイレには行かずに悠はそのまま踵を返す。

「あれ？早かったね」

「どうしたんだ？」

三人が妙に真面目な顔で戻ってきた悠に注目する。

「あのさ…」

今日：神威が一人で出掛けた理由、知ってる？」

悠の問い掛けに三人が首を横に降る。

「何で？」

洋介が首を傾げた。

「神威ってさ…」

ガキは嫌いだよな？」

「嫌いではないと思うけど…」

たぶん、苦手なんじゃないかな？」

旬の答えに悠は「だよな」と頷く。

「ていうか、神威にファミリー以外の親しい奴っている？」

「同級生の女性が一人いるくらいかな？」

でも、最近は会ってないと思うよ」

「一体、何なんだ？」

ハッキリしない悠に竜也が苛立ちを表す。

「いやさ…」

今、変なもの見たんだよな…」

「変なものって何？」

旬も首を傾げる。

「あ！」

もしかして、神威がここにいるとか！？」

洋介がポンと手を叩く。

驚いた表情で悠が洋介を見る。

「え？マジ？」

ていうか、誰と？」

「翔じゃないと思うよ。」

今日は神威の代わりに仕事してるはずだよ」

「じゃあ、誰とだ？」

三人が再び悠に注目した。

「…黒髪のカキ」

「え？」

今度は三人が驚いた顔をする。

「知ってる子？」

悠は記憶を探るが、該当する顔は見当たらない。

「いや…」

見た事ねえ」

「どこに座ってたんの？」

洋介が興味津々で悠の腕を引っ張る。

「真ん中辺りの窓際」

答えを聞くと洋介は席を立った。

「待て、洋介」

慌てて竜也が止めようとするが間に合わない。

そのまま洋介は聞いた席へと走って行ってしまった。

竜也がすぐに後を追う。

「あ！」

神威を見つけた洋介が声を上げた。  
つられて竜也も窓際の席を見る。

「！」

二人の動きが止まる。

それは神威の前に座る少年に感じた『違和感』だった。

見た目は白いセーターに黒い革のパンツ。

だが、二人の目に写ったのは黒いローブに白い仮面。  
全身からはどす黒いオーラが溢れている。

「何で、あんな奴と？」

やっこの思いで洋介が声を絞り出す。

「どうしたの？」

後を追ってきた旬と悠が固まっている二人を覗き込んでいる。

「ホントに子供と一緒にだ」

「だろ？」

竜也と洋介は互いに顔を見合わせた。

「あれが見えないのか？」

少年を指差して竜也が二人に問い掛ける。

「お前達には見えていないのか？」

『旬と洋介には見えていない？

ならば…あれは過去か？

それとも、未来？』

隣を見ると、洋介もこちらを見ている。

おそらく、同時に感じた感覚。

兄弟が初めて共有したビジョン。

『あの少年は危険だ！』

二人の本能が激しい警告を発する。

「おい、洋介！」

洋介が険しい顔で窓際の席に向かって行く。

「待てって！」

俺達に黙ってたんだからさ。

邪魔すんなって！」

悠が洋介の腕を掴む。

「離せ！」

珍しくきつい口調で洋介は腕を振り払おうとする。

「洋介、どうしたの？」

ちゃんと話して」

旬も片方の腕を掴んで問い掛けた。

「神威が危ないんだ！」

「どういう事？」

要領を得られずに二人は竜也を見る。

「竜也？」

竜也はただ無言で少年を睨んでいた。

「そろそろ出よう」

突然、奏多が神威を促して席を立ち上がる。

「満足したか？」

「うん」

神威も立ち上がると並んで出口へ向かった。

「二人を行かせちゃダメだ！」

神威達の後を追って洋介と竜也は走り出した。

奏多は黒服の女性から二人分の上着を受け取ると扉を開ける。

「ありがとうございます。」

またのお越しをお待ちしております」

深々と礼をする女性に神威は軽く手を上げて答えた。

「また寄らせてもらう」

そのまま振り返らずに奏多と並んで店を出て行く。

外の冷たい空気が全身を包む。

店を出る瞬間、奏多は店内を振り返った。

慌てた様子でこちらに向かつてくる洋介と竜也が視界の端に写る。

『バイバイ』

奏多は声は出さずに口だけを動かす。

「どうした？」

神威は店内を見ている奏多に問い掛ける。

「何でもない。」

「さあ、行こう」

そう言うのと神威の手を取って雑踏に向かい走り出した。

『バイバイ』

奏多の口がそう動いたのを、洋介と竜也は確かに見た。

「あいつ、俺達に気付いていたのか!？」

「神威! 待って!」

二人は店を飛び出し辺りを見回す。

だが、雑踏に紛れているのか?

神威達を見つける事が出来ない。

「何なんだよ!」

後を追って店を出てきた悠が二人に向かって叫ぶ。

「あいつ……」

二人はしばらく雑踏の中で動けずにいた。



「奏多」

しばらく黙って着いて来ていた神威が前に行く奏多の名を呼ぶ。  
ようやく二人は立ち止まった。

「急に走り出すなど、どうしたんだ」

神威は奏多の持っていた自分の上着を取ると肩に羽織る。

「別に。」

ただ走りたかったから」

「何だ？それは？」

微笑みながら握られたもう一枚の上着を奏多の肩に掛けてやる。

「食後の運動」

神威の手に触れ微笑み返す。

「それにしても急だな」

「もう行かなくちゃ」

奏多が空を見上げて言った。

「お兄さんが呼んでるんだ…」

悲しい顔をする。

「お姉さん、また会ってくれるよね？」

帰り際、いつものやり取り。

「ああ、またな」

その答えに奏多が天使のような笑顔を見せる。

「バイバイ」

今度は声に出して手を降る。

そのまま奏多は振り返ると雑踏の中、走り去って行った。  
白いコートが人込みの中に消えて行く。

神威はしばらく後姿を見送ると反対の方向へ歩き出した。

奏多はある高層ビルに向かっていった。

『楽しかったか？』

低く澄んだ声が直接、頭に響く。

「うん」

走りながら小さく呟いた。

『良かった…』

「神威は少し元気がなかったよ」

目の前にガラス張りのビルが姿を現す。

「今、行くね。」

蒼一郎…」

奏多は立ち止まりビルを見上げると、再び正面玄関へと走って行った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6404a/>

---

『DIABOLOS』

2010年12月4日14時20分発行